(1) 核的技术

創刊大正十三年 通卷七三二号昭和六十三年四月三年五日 印 卿



日川協加盟

No. 7 3 2

五月号

友好と観光 中国吟行の旅

北京一洛陽一西安一上海

□63年9月18日出発

6日間コース

費用23万7,000円 (全食事付)

人員25名かぎり (詳細は逐次、発表します)

川柳塔社



NHK学園東海北陸川柳大会

○大会へ参加希望の方はご自分の住所氏名の ○大会へ参加希望の方はご自分の住所氏名の

妻前投句 海前投句 東H 海K常出 ·陸川柳 2 加柳センター36

北崩越夷

席

題

宿

会 日

場時

H和 K名古屋的

放 26

送局C

本生

身

西

尾 栞

を選んだ。 ちらかを正科で習うのである。僕は柔道

中学の二年になると、剣道と柔道のど

くどと教えられて、受身に時間をつぶさ 柔道の基本は受身であることを、くど 受身とは投げとばされる練習である。

その代り

人の前でころぶ練習である。 人の前で負ける練習である。 人の前で叩きつけられる練習である。 つまり人の前で失敗したり、

恥をさらす練習である。 ぶざまにさらけだす練習、それが受身 自分のカッコ悪さを、多くの人の前で、

> である。 を教えない。 柔道の基本では、カッコよく勝つこと

長い人生には、 いさぎよく負けることを教える。 素直にころぶことを教える。

しかも本腰を入れて負けることを教える だから柔道では初めに負け方を教える。 はるかに多いからである だらしなく恥をさらすことの方が

それが受身の極意である。 負けてもすぐ立ち直る。 ころんでもすぐおき上る。

口惜しい時は「こんちくしょう!!」 負けるときはさらりと負けるがよい。 我々は失敗を気にしてはならない。 極意が身につけば達人である。

るな。 と正直に叫ぶがよい。弁解など一切す

> やせ我慢などすることはない。 泣きたい時は、思いきり泣くがよい

その代り スカッと泣いて、ケロリと止めよう。

うまくなろう。 そして、下積や、下働きの苦しみをた 早くから勝つことを覚えてはならない。 負けることを学んで、恥をかくことに

っぷり体験しよう。

体験したものは身につく。

に耐えて、他人の胸の痛みを、心の底か ついた人間が、世の中の悲しみや苦しみ そして、負け方や、受身の本当に身に 身についたもの、それは本物である。

ら理解出来る。 のである。 そして、やさしく温かい人間になれる

三年は赤帯であった。 僕は受身ばかり稽古していたため二、

四年生の秋にやっと茶色の帯になった。



III 柳塔 五 月号 目次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

白選集 川柳塔 水煙抄 ■連載 船から鉄道 ■川柳太平記 誹風柳多留廿六篇研究 同人吟 -同人吟 (120)) 連絡船を惜 川柳の群像 L 三条東洋樹 ……… to 黒 東 弘 I 西 JII 津 野 尾 大 甲 香 栞 選 選 八 吉 栞 慶 : : : 1 34 2 57 38 4 31 36

か ら鉄 連絡船を惜しむ 道

船

工 藤 吉

いから、私には「退屈だけでした」ではない んの詩情も湧いて来ないのではないだろうか が、想像だけでモノを言うのもどうかと思う だろうかと思われるのである。 が、「トンネルを抜けると陸上だった」ではな 第一トンネルの中に詩情があるとは思えな 未だそのトンネルをくぐった経験のない者

賛成でない者の一人であった。 たちには済まない気がするが、 ところで私は、 トンネルマンやその道の人 トンネルには

とがあった。それに対し竹内さん日く た竹内俊吉さんに「青函トンネルはほんとう 知事で私たちの新間記者としての大先輩だっ に必要なものなのかどうか」と訊いてみたこ だから当時、 代議士をしていた故・青森県

はあえてふれなかったように記憶している。 しかし津軽海峡トンネルはたしかにすばら あらましこのように言って必要、不必要に うのが政治家である。そして政治家という 者は日本一とか世界一とかを好むらしい。 何かをしたい。何かをやってみたいとい が、その反面 昔の言葉で言えば『国威発揚』にもな 歴史ある青函連絡船を

夜鳥

塚

句評リレー

春城年代・小砂白汀・大矢十郎・橘高薫風…………………

木千 高

代 風

選 選

62 58 61

64

布

施

幸

子

〈女性コーナー〉 愛染帖

茴香の花

秀句鑑賞

水煙抄

土

螢

解 善 ::	「いんいいん	裁月が天の配剤の夫婦にし	父性愛妻の涙に及ばざり	1 * 4 * * 1	■ 5月各地句会案内 103 ■編集後記 105	田佳秋)	本社四月句会	柳界展望	「 縁 」	一路集「 袋 」	「足」	初歩教室	天国の堕駄さんへ	草刈堕駄様を悼む	プロ第二日のご送去を作す。	大山袁二氏の言近長と卓。	悼 市場没食子先生	わが土地の春	七七調の実作
風 選選選的子絵作三論子錆		滕	_	1		i	i		春	田	松	阿	奥	林	稲	松	森	辻	竹
風 選選選的子絵作三論子錆	1	解	静						城	中	下	萬		1+	田	本	下		内
風 選選選的子絵作三論子錆	36	清	水	B		į	:			隆一	う	萬							
	Vi.	風	_	*			į				み選								
	1	000000		T						:	:		:	TA	:	-	:	:	:
$ \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$)		86	82	80	_	78	78	-	75	75	74	73	73	71	70

はみな同じ。岸壁の別れ、五色のテープ、哀聞けなくなったと悲しむ。青森の人々の思いのりんご屋のおばさんも、ボーと鳴る汽笛がのりんご屋のおばさんも、ボーと鳴る汽笛がいんご屋のおばさんも、ボーと鳴る汽笛が

王。 王、 一千八百回ぐるぐる回って走った海峡の女 を二千八百回ぐるぐる回って走った海峡の女 なってしまった。

愁をそそる銅鑼の音、すべては過去のものと

新聞の投書欄にこんな記事も載った。古く

海峡へ消え去ったのだった。は川柳家渡辺虹衣と交友のあった石川啄木。は川柳家渡辺虹衣と交友のあった石川啄木。は川柳家渡辺虹衣と交友のあった石川啄木。は川柳家渡辺虹衣と交友のあった石川啄木。は川柳家渡辺虹衣と交友のあった石川啄木。は川柳家渡辺虹衣と交友のあった石川啄木。は川柳家渡辺虹衣と交友のあった石川啄木。は川柳家渡辺虹衣と交友のあった石川啄木。は川柳家渡辺虹衣と交友のあった石川啄木。

の結婚式参列のためであった。 大会(函館)へ。最後は四年前の従弟(函館) 大会(函館)へ。最後は四年前の従弟(函館)



西

尾

栞

選

谷 垣 史 好

松 原市

の約束がありまだ死ねぬ のびのびに 0 笛

横道が好きで歩いたわけでなし

締切りがないから手紙

二人だけ お

Ш 見舞

を喀

の苺も て極彩

血 色 0 0

色も真

0

赤

夜

b

が生はかくもかぼそき銀

タン一つとれたままなり百ヵ日

ボ

玉

松

原市

置 重

人

コーヒーにさそわれ錯覚してしまう

青畳 沈黙をしてるジョー 椿 輪極まれり カー

握ってる

ほろ酔 失恋を青春賛歌とも思う 10 の月と道行きするもよし

水甕の底

の好きな夫婦

の茶が

はい

n

伸びた分だけ無口になる息子

甕の底に沈んでいる余裕

D

ボ

トも機械も大目に見てくれ

x

集

帳 科

無

神論者と知っ

科 印

酿

耳鼻科

の診

る

診察券があ

天を白木蓮 0 支え お ŋ 八尾

市

高

杉

鬼

大正よ婦人倶楽部が消えてゆく の知らない文字を識ってい

る

ワー

プロ

神さまの

お使いで来た奉加

帳

馬鹿でない証拠に莫迦なことをいう 考えてなお考えている振り子

西宮市

影法師に真似をするなと諭される 西

10 わゑ

- 4

遊

公用 身内 合 新化别 今日 曇天 未 家風に合う雛人形 血 カラット 湯 嘘に慣れ 花 コ 酒 切る たん ち椿 古 柄 練 鍵 1 粧 n 続きという助っ人が顔を出 束と一人娘を引き替えに しきり では 車 転 から の絵 かい を郵送にし ると決 をとも か 0 E よくて 6 顔 ぼ がすワインに 紙 0 酒 でし ない 妻はキ 月賦が残る形身分け 何 で愛想の に昨日の彩を足して塗る の指ではとげ ふところ 0 0 は早めにきり みそ豆 ブラッ 時 夢を E め よう E たはチ 步 割 が 隣 はずされ耳不足 (三月三日…… 無 n てさようなら 10 + 無口 てくれ 勘 クが 0 にまだ夫婦 心 リアを積み上 0 0 留 慣 3 顔 くり煮込 言 11 0 いれてい ぬ白い 子に 別れ話 感を選る な 出 守 Ĺ コをたべ Vi 出せず 淋し た友 げる 酒 会 になる 貰 る舌で 米 聞 まれ す う 31 倉 、てから げ < 前 敷 江 る る 市 市 市 市 舟 波 高 小 多 の日 橋 野 木 Ŧī. 干 与 克 方子 楽 根 庵 枝 行 腰低 それ 贈 母 天 御 防 平 六 西 角 あ 父 厳 独 一咲く からの きず 井 寒貧 家五 冬暖 を背に 犯 Ш 砂糖ゆっくり + やとりの Z 均 0 から 点ぐら よ四 0 水心に流 な 語 祖様これパ カメラへ 10 寿 ń アイド 冬三 U 庭 の影が一足先を行 男足技かける気か 命 4 て らく の影 そ 0 姉 季は 笑う猥 に 風 皆んなが抱 行きたや京の 井戸 に耳 男の Vi 紐 n 妹 所 まともに顔を見せてやる で足 か ル れの音を聞 0) か 0 限 かい 中二 あ 打 6 6 過 夫でしんぼうする 情 渡 作にもあ チンコの とけてく午 n 談 n きし 句う 流 一去が 1 n 17 3 か 10 なく 母 n が 長 E 0) X 観 を呼 て置 胸 知り てい 紐 遠 風 10 知 劇 邪 3 K 成果です 任 10 橋 春 n たく た踏 3: 12 青 棲 後 なる せよう 薬ぬ 春 0 む 米子 島 雨 絵 関 T 根 # 県 市 市 市 岩 小 林 石 砂 JII 本

侃

流

洞

雀

踊

子

瑞

枝

白

汀

あの人は美人だからと負け惜しみ	「おじいちゃん」と大きい声で言わんといて	会者定離花屋の花の合言葉	音無しの構えだんだん眠くなる	熊本市 有 働 芳 仙	もう一枚着る迄待てよ寒椿	激痛をへのへのもへの言うて耐え	おばはんが死んで燕が淋しがり	仏像の欲しがりません左の掌	生殖器探してミミズ日が暮れる	ころころと林檎が春を売るように	岡山県 土 居 耕 花	水虫に訊くと美人の足がいい	スト旺んデモる阿呆を撮る阿呆	万引きをしてさりげなくガムを嚙む	ジャンジャン街ポルノ作家に縄のれん	丘に寝て何を企む花曇り	空き腹にかかわりのないビラをくれ	岸和田市 福 浦 勝 晴	酒屋の子らしくろれつが廻りかね	宍道湖を何んとしようぞ創生論	男子厨房に入り指を切り	誇らかにフィギュアスケート美女の尻	ぞっこんとまではゆかぬが愛しくて	風うなる汝が来し方を哭けとかや
指先の記憶青春疼きだす	島根県 堀 江	つっかえ棒はずれて人の字が崩れ	歩行者天国やっぱり左右確認す	五輪ではニッポンというアナウンス	割合いをつければ倖せらしい日々	好きなものいや嫌なもの人間だ	反論はせず論点は外さない	岡山市 時 末	傷口にじんじんしみてくる法話	閏年の一日損か得したか	古備前の味持つ人にまだ会えぬ	バイブルを身近に置いてあくびする	花の名を知っているので手折れない	食卓の隅に独りの刻がある	大阪市 西 出	虚も実も忘れ上手な春の風	食べ頃は今日と書かれてあるメロン	てにをはの乱れが続く日記帳	いさぎよく訣れてからの昼と夜	曇り後雨のわたしの誕生日	自転公転意地を張るのはもう止そう	和歌山市 西 山	振り返ると影も私を振り返る	「はい、それまで」と誰か音頭をかけんかい
	正							小							山 楓							ш		

灯

朗

楽

幸

Va \equiv あ 良 横書きも 三月は扶養家族 デマ少し L まなうらに我が旅立ちの景を描 私 盲 盲 花 T 一月は はより 足ひ 薬 金 ま 生暮色絵 てろま 人の を待ち花を忘れ さくら 0 あ 訳 Vi ひとも 0 0 b 10 0 U いをし しとあ 風呂私 喜劇 ても避け ろの生き方をも 苦さ五十 はなしは 方い時計 夢白黒でし 3 花 ++ 0 笑顔 の広 総書きもある借用 信じてしまう 花 0 0 中の て出 この 扉 し死 旦 は 0 な かが と同 悲 当さの 一人 L° って通 ひとも はしない た午後は 独 路 に 濡 ぬまで登っていく 3 少し足りません 劇 I の花暦 0 かも か描け n らすまよ 動 居 る 春 飢えてい D 指定席 酒も を待 い n てい 申 露路 7 X 5 善 なろう 知 ぬ年齢になる ちち **美天風呂** 眉 一告 れぬ酌 T La る を描 た ます こが 齢になり 菓 証 期 te b D 雪 計 か 大阪 八 岡 < n な < n 尾 Ш Thi 市 匪 宮 津 嘉 守 元 数 弥 兆 柳 代賀 4: 伸 鬼と 感謝 気兼 宍道 その キリギリスの人生観が見直され 庇 隅 あ 玄 ケリのつく一 どう見ても力の上に馬鹿 命 耐 君 明 女房に言葉遣 力 だだ 関 が 髪も 0 ż 断 0 日 河国浮 出 状 和 切れ 器 けをつつく 世 の色紙をほめる客が来る ta 湖 先にあなた けで慕う女へ 住 は 妻に出 し仏 よりソフトみじ すと素直 でも歌える歌を覚 なく歩ける道がお気に が貝でも をくぐってなお 熱 to b 42 ぬまま日め 10 往 かい た話 言 身た と和した行 追いを指摘されれの上に馬鹿が 乗へ L 恋 言がある実力者 品が多す な心 たい 税務署に めてる 0 風 0 、迫る涯 帰 揺 邪 L る海 くりの 訳 とば 電 n いこころに ぎる めな力こぶ 义 が 楽 淡 \$ は 割り えたい じめ そう \$ あ 水 があ 地 待ち 付き 11 木 3 和 召 る 切 か n 米子市 歌 倉 ぼうけ 人禰市 L 岩市 n 切 Ш す 替える 市 松 安平 11 奥 西 谷 原 引. 寿 雄 弘

以

朗

子

道

蕾から偽りの無い紅椿 妻が書くシナリオに添い恙無し 言いなりにならぬ子供を信じよう 言いなりにならぬ子供を信じよう	振込みを親の甲斐性と思いたし) らが正 のは 背不	選に来て準備体操して帰る 選上する河でドラマが終らない かたくなな母で砧を放さない かたくなな母で砧を放さない がたくなな母で砧を放さない がたりなな母で砧を放さない	才媛の割り符男を甘くみるカクテルの罠を知ってる水中花
	井	城	200	
	菁	武	荒	
	居	庫坊	介	
ランドセルの押売りをする親の愛古疵を温め合って柚子湯かなタクアンが上手だったと通夜の席配達に来て甘酒を振舞われ	干しのスルメが好きな漁労杖がはずれてからの世迷いき酒の主で酒豪と限らないの芽がゆるみ牛蒡を播くはの芽がゆるみ	高み草の造いっ曳しらっらく貝 マ田市 久 家 代仕男卒業をしました口紅塗りました 学酒禁煙そんなまじめなのはキライ 禁酒禁煙そんなまじめなのはキライ はいかい かんじょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう はいました はいました はいました はいました はいました はいました はいました はいました はいまい はいまい はいまい はいまい はいまい はいまい はいまい はいま	画像をピカソの眼からい出をバラ色にする桜りひとつを妻の外の穴はダイエッーナツの穴はダイエッーからの残りのとってものがある。	ミリーへ倖せ色の風が

ないない	大阪市 本 間 満津子良心の呵責をのぞく三面鏡 大阪市 本 間 満津子八十の手習い肩こることばかり スー人友の訃を聞く雪もよい という はいり はいかい まましま はい はいかい ままま しょう ひょうしょ しょう ひょうしょ しょう ひょうしょ しょう ひょうしょ しょう ひょうしょ しょう はいかい はいかい はいかい はいかい はいかい はいかい はいかい はいか	である り市 河田 井 庸	方 江 城 修	浪人の娘が美しい時代劇
かん煙草もあかん胃潰瘍切れと医者簡単に片付け胃潰瘍	うれしいね春順調におとずれる 奈良市 宮 口 笛 生 入魂の墓に序列などはない 奈良市 宮 口 笛 生 入魂の墓に序列などはない 奈良市 宮 口 笛 生 は	人弟子まだなじめないと、人弟子まだなじめないと、これの記事でいまっているというでは、これの記事では、これの記書では、これの記述をは、これの記述をは、これの記書では、これの記述をは、これののには、これのには、これのには、これのには、これのには、これのには、これのには、これのには、これのには、これのには、これのには、こ	母の白髪抜いた日想い白髪に見えぬ所に妻の潤滑油酒一杯極楽の音奏でたり酒一杯極楽の音奏でたり	大阪市 神夏磯 典 子

和歌山市 福 本 英 子	平身低頭女代理で薔薇の花	春雨は嬉し七つ道具の傘にする	吉兆へ毎日手相を聞きに来る	本音洩らして風に吹かれた女郎花	ワープロに出たよ私はCランク	京都市 山 本 規不風	電柱のことなら犬に聞いてくれ	お酢が良いよいからと無季の胡瓜もみ	男料理味はその日の出来次第	まだ早い言うたやろがな沈丁花	いいことがあって大きな月昇る	京都市都倉求芽	唄程でなかった海峡冬景色 (津軽海峡の旅に)	べんがらの格子が好きで冬の旅	啓蟄や逢いたい人が一人いる	花屋さんも知らない花を売っている	祖母達者四季を着物で未だ過ごす	京都市 松 川 杜 的	日にやけた声で流れるオケサ節	晩年は棚ボタですと易者言い	価値観を変えると虹が見えて来た	一億が同じ方向に走りすぎ	「こちらも嘘つけないなあ」アイロンかけながら	奈良市 天 正 千 梢
水ぬるむ春を紬いで人を恋う	和歌山市 福 井 桂 香	あなたも私も明日は星に流れ着く	真っ黒い鳥が心の中を舞う	生き方に迷って覗く古い井戸	よろけても視線は外さない野犬	あてもなく歩きたくなる父の墓	和歌山市 神 平 狂 虎	啓蟄や弾みのついた万歩計	君見たまえ車にだってある遊び	幾つになっても美人に逢うと上がる癖	母さんがお百度踏んでくれている	ほどほどを忘れたときがピンチです	和歌山市 堀 端 三 男	たぶらかす知恵のないのも幸のうち	山桜一本がよし丘の春	火葬場に古い桜の咲きっぷり	花吹雪避けて通れぬ霊柩車	散り果てる芸は造花の身に付かぬ	和歌山市 若 宮 武 雄	心臓のリズムが怖い落椿	掃除機の音が戻った全快日	姑からの芸は確かな隠し味	早よ逝かな亡夫に浮気の虫がつく	早とちり引返すには橋がない

まできた還暦の塩かの水に掟を教わりに	水鏡古都は昔のままながら 先輩との素敵な出遭い無人駅 地固まる雨なら強く強く降れ 地固まる雨なら強く強く降れ 地間まる雨なら強く強く降れ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	考える葦でなくなる日を怖れ をくら餅言いたいことは明日にする この先も野良着に勝る晴着なし この先も野良着に勝る晴着なし れ歌山県 寺 田 裕 美	棚にあげ時効になる日待っている か怖じをしない鼠が居て困る ヘマじゃない地金出て来ただけのこと タネ尽きたことは口外せぬように 和歌山市 桜 井 千 秀	本物になろうなろうと言い聞かせ鉛筆で書いた過去なら消せるのに花束のような微笑に包まれてモンローと呼ばれ洋蘭の奢り
ā ±	米子市 石 垣 花 子に引法も筆のあやまり」救急車を開のエゴペットを去勢すると、大間のエゴペットを去勢すると、大間のエゴペットを去勢すると、「弘法も筆のあやまり」救急車を開か過ぎても心配な勇足	要うつになると亡母恋う花手桶 小楽 鶴 丸小酒辞せぬ時代もあったコップ酒山茶花へ跡継ぐ話もめている いん屈な父に居どころ悪い虫 教列のうしろで出荷した話	精神は貴族になろう柳誌読む 特神は貴族になろう柳誌読む 特神は貴族になろう柳誌読む を航の泡立草は寒がりや	二階から月へ昔の嘘を詫び 唐津市 久 保 正 敏大空を君カンバスに借り給え 糧道を断つぞと父の長電話

うぬぼれた凧で龍とも向い合う	石捨てに行くなら水のある川へ	故郷も弱い男は受け入れぬ	時として男は風に男は花に	米子市 政	ピカピカのロビーで昔話する	こころだけは衰えみせぬ数え歌	実がたわわ銀杏の花にまだ逢わぬ	米研いでともかく息を整える	ひと握りの土へ仙人掌むつまじい	米子市 寺	ホテルから見ればお客の質がおち	ゆらゆらと蓑虫馬鹿になっている	逆ってやがて深みにはまりこむ	長い目でみるとなんでもない話	種袋ふくらみ春は酣に	米子市 青	だんだんにスリルに慣れる恐しさ	我慢は美徳そんな時代も生き抜いて	手作りの花を待つのはほとけたち	心にも咲かす小さな花一つ	誕生日わたしの旅の第一歩	米子市 野	大詰めの顔は今から考える	大詰めの幕はあわてずさわがずに
				岡						沢						戸						坂		
				日						み						田						な		
				枝子						ど里						鶴						み		
悲鳴殺して貨車黙々と稼ぐのみ	政治家の欲は神様聞き飽きた	陛下ふと小草へ試歩の足を止め	枕木の悲鳴でレール目を覚ます	野晒しの貨車も無欲の訳がない	鳥取県	言うなればこれも余生か薄化粧	葛の葉が嘘だ嘘だと裏返る	大根の湯気ありがたし京の冬	湯豆腐の湯気で埋めたい隙間風	挨拶が上手で隙のない女	寝屋川市	その日から僕の引出し開けぬ母	消ゴムで消した部分がいのちかも	陽炎のこころ変りも出来ぬまま	率直な意見を嫁が言うてくれ	この街に息子存在位置がある	寝屋川市	地価を見た土筆もあきれぐいと伸び	耳栓をして言い訳を聞いてやる	オーバーをしまえば雪が降ってくる	病む母の涙は言葉灯油つぐ	沈丁花じっとがまんの冬でした	寝屋川市	聞きながすことも覚えて餅を焼く
					両						岸						稲						江	
					Щ						野						葉							
					洋						あや						冬							

々

葉

度

島根県	不自由だろうと雀が問うたかごの鳥	みんな家にいて大阪の叔父が来る	精いっぱい働きましたと愚痴を言う	和やかなお人ですよとお仲人	裏話そっとコケシが耳をたて	島根県	椿の花は一輪ざしがよく似合う	明日も生きる目じるしの花を活け	真心にふれて寒さも苦にならず	もひとりの俺に笑われないように	ウォッチングあれは確かにほととぎす	鳥取県	子供の日だけでは断絶もどらない	職の無いむなしさ妻にも言い負ける	どなたとも握手が出来るカスミ草	職持たぬうしろ姿は隙だらけ	なごり雪心の捻子を巻直し	鳥取県	塩つぼを満たす人間らしゅうなる	頼らねばたよらにゃ哀し蔦かずら	鯛焼ひとつ買いそびれている勇気	ほっかほかの弁当屋がある9号線	病院の七階で見る春の街	鳥取県
堀						西						土						松						Щ
江						村						橋						下						崎
芳						早												たつ						秋
子						苗						螢						み						女
仕合わせは老いて我儘仕放題		瀬戸大橋滞留客を持って行き	生き抜くぞこの世に美人いるかぎり	顔も知らぬ孫もいる十七回忌	禁煙をして妻楊子はなせない	手術成功桜前線北上中	倉敷市 野 田 素身郎	制限時間ギリギリまでの迷いかな	分離課税笑いとばしてやりましょう	ホワイトデー無視することに決めました	珈琲よ葦は揺れてるほうがよい	みどりみどり一年生になる緑	竹原市 小 島 蘭 幸	さわさわと絵筆を洗う春の水	切り札をもたぬ姑嫁で包みあう	この器一期一会の語らいに	花一輪心やさしい子の机	春を待つプランあれこれ旅カバン	島根県栂みどり	見えぬとて男一匹引かぬ性	本心は手の鳴る方へ行きたがり	相づちが上手になった年の功	お位牌へ仲よく並ぶ居士・大姉	ご飯粒こぼす夫へ拾う幸

離婚した友が我慢をせよと言う 離婚した友が我慢をせよと言う	近中の相手は年金かも知れぬ ・中の相手は年金かも知れぬ ・中の相手は年金かも知れぬ ・中の相手は年金かも知れぬ ・中の相手は年金かも知れぬ ・中の相手は年金かも知れぬ ・中の相手は年金かも知れぬ	方まそうな匂いも欲しいコマーシャル 英度住足りても愚痴は言い足りぬ 大食住足りても愚痴は言い足りぬ 三文の損は承知でまだ起きぬ 三文の損は承知でまだ起きぬ 浜田市 中 川 幸 一	貧しくてせめて万両庭に植え正論を吐いて皆んなに煙がられ仏壇の妻後添いに拝まれる苦労した甲斐を育てた子が呉れる
寒い日のぐちは言わない梅の花 題病の彼よりひ弱になる心 避り場で噂のふたり見てしまう 逃げ出せる隙間をいつも開けてある 適まわりしても行きたい好きな道 意まわりしても行きたい好きな道	孤老の身守るがんこを押し通す 職人の誇り生きてる太い指 仲間だという安心感に出た本音 化粧っ気のないおふくろの笑い声	東大阪市 で来になりました なと祈る日々 なと祈る日々	悪位無冠平凡という幸を知る 生れ出る孫ヘビデオを買うて待ち
田	藤	崎	森
形	田	Ш	下
美	泰	美	愛

子

論

子

緒

· 岩	の方ところう窓の雲の方ところ	と共に去りぬ帰省の子の余韻に優しくわるい冗談だと思う配なひとがこのごろ元気すぎ配なひとがこのごろ元気すぎ	長い眼で見てとは寿命持つかしら遺伝とは三代つづくアレルギー貫覚しを胸に入れるも聾なれや健康と暇と財産どれも無い	ī
宮	小	佐	٦t	
崎	池	藤	野	
シ マ 子	しげお	藤	<i>9</i>	
子	お	子	子	÷
子供名儀を祖母に変え 今治市へああ晩酌の量も減りへああ晩酌の量も減り できれから素直にものを言うのそれから素直にものを言うが、コートひとつへまた迷い	Eと兄うが日く寒皮长ら 均寿命にこれから余命老いの日々 十九若死にという世相 まれ口閻魔の前で言えるかね まれ口閻魔の前で言えるかね	まあまあの後から自慢聞かされる悪人のいない喧嘩がおさまらず悪人のいない喧嘩がおさまらずでしたがある部下も居ります回り椅子にかぶる部下も居ります回り椅子で隠居と話はずんだ松葉杖	羽頸の友を失う保証印を明明立場は異常なし、大十のハッスルヨガに草臥れる。大十のハッスルヨガに草臥れる。	手及 CIE できょう 八尾市衛するふれれば丸くなる虫も上りの匂いの母も春の顔
越	佐		榎	鷲
智	野		本	見
	白		吐来	章

口下手に出番わずかなアルコールもう六時の時計を持った夢の国もう六時の時計を持った夢の国めないので長寿といきましょかいないのよりにあがいない。	は、 は、 は、 できれぬ野菜を作る老いの鍬 のできれぬ野菜を作る老いの鍬 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、	355	治市	筆不精桜の花はいつか散る
	端本	וון	野	
	柳	滋	佳	
	子 三	雀	雲	
戸を開ける音ざわざわと春めぐる 可に親しく般若心経真似ている なえの艶聞罪を空にする	風呂敷もきものもなじむ皺がよい風呂敷もきものもなじむ皺がよい風呂敷もきものもなじむ皺がよい風呂敷もきものもなじむ皺がよい風呂敷もきものもなじむ皺がよい配崎市風呂敷もきものもなじむ皺がよい配崎市風呂敷もきものもなじむ皺がよい配崎市風呂敷もきものもなじむ皺がよいに崎市風呂敷もきものもなじむ皺がよい	業を待って老舗の羽繕泉という名のついた奥いらくの恋をポストへいた人のでをがれたり	新のパンチにハングリー世も貴方相手じゃ肩が凝っている長さの分を惚れっている長さの分を惚れ	藤井寺市
奥	春	KK	渡	吉
田	城	原	辺	岡
みつ	年	静	独	美
つ子	代	歩	歩	房

花暦哀しい愛がゆれている 花暦哀しい愛がゆれている 本様の立ったのに有難く無い話 夢に逢う亡母は妻より若かりし 生駒市	原市	れが一る雲子ル市	編目数える愛を数える春の窓中身まで変えられはせぬ着道楽中身まで変えられはせぬ着道楽無銭旅行若さの何と素晴らしき
森 西	· 岩		
田	#	治	
カ ズ エ	蔭	ちかし	
主しかしてそんな話に夢もやす 正論を二つ並べて右派と左派	妻の前でも入歯外さない君で言えないことで誤解されている人歯外さないるとの説をして過れているのがでも入歯外さないのがあれているのがでも入歯外さない。	大の地域を算えて上る足の老いり白く白足袋を履くめでり白く白足袋を履くめでりたるばかりの齢にないりのかにない。	で が で が が が が の を が の を が の を が の を が の を が る に の は の は の は の も に の に に る に る に る に に る 。 に る 。 に る 。 に る 。 に 。 に る 。 に 。 に 。 に 。 に る に る に る に る に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 。
松	小	Ш	片
高	谷	村	上
秀	仙	映	明
峰	山	輝	水

かけ声に押されて動く重い腰	一桁ぼつぼつ鬼籍の友	ぎこちない包丁の音妻の風邪	岸和田市 島 崎	肩パット女のいくさまだ続く	悪人の汚名に耐えた義人伝	円舞曲輪の中にいるブルータス	走馬灯すぐ涙ぐむ父の老い	武者人形ぼくの先祖は素町人	豊中市 田 中	あるドラマすべてみていたシクラメン	裏切りを許すゆとりの冬のバラ	ただそれだけで終りたくない福寿草	むつかしく話す息子は父ゆずり	ムードあるレストランよし港の灯	箕面市 坪 田	幼稚園流行る病気を又貰い	東大出誉めても嫁には欲しくない	殺伐な活字で埋まるスポーツ紙	コンパスで書いては月の画にならず	時雨来て信号待ちの長いこと	大和高田市 岸 本	口数が過ぎて男の嫌われる	人生の限界を知る通夜の席	耳栓で丸く暮すも祖母の知恵
			富						正						紅						豊			
			志子						坊						葉						平次			
定退へ未だ不惑になり切れず		最新の悪事がつづく夕刊紙	しけた時ふとパチンコのあわよくば	毛皮付セーターおもわず挙手の礼	すぐ行ける近くで行ったことがない	大阪市	老人会次々トイレへ立ち上り	孫がくれたチューインガムを持て余し	オイあれが死んだよと電話口	まだボケていません算盤合っている	柳井市	押さえた本音が出て来る酔い機嫌	一粒の種も祈りを込めて播き	内心は嫌いですねと言いそびれ	仲直りするきっかけを孫がくれ	大田市	原発の亀裂を埋める選挙戦	宅配で届いた過疎の村興し	毎日が日曜ですと友も老い	鏡台が治外法権主張する	花束が父の涙を盗見する	高知県	あせらずに余白きれいな色に塗る	双羽黒三重県人の夢やぶる
	吐					藤		L			弘					藤						中		
	田					田					津					田						内		
	公					頂					柳					軒						朱		
	_					留子					慶					太楼						坊		

割切れる頭が欲しい過去は過去	大阪市 町 日	誇るものないが自慢の子が五人	国庫金借りる担保につきあたる	ばら寿司の愛だんらんの灯がぬくい	その先を読んだ一人が怖くなる	大阪市 松 豆	桃桜菖蒲へとんだ松屋町	花だより今年も母の忌近し	乗り継ぎに持ち重りする土産物	ひなまつり菱形にしたハンバーグ	大阪市 大 岩	腹立ちへ一寸間を置く深呼吸	乗れるのにわざと歩いた万歩計	ほんとうのことを言うたら叱られる	合槌を打つのに困る愚痴を聞き	大阪市 北	ご自由にワタシの日記卓上に	区役所の法務局のと妻せわし	一滴を落す生命が彩りに	柩には従軍記章もいれておく	大阪市 大 昭	死にたいと言う口裏にある未練	伸びる芽を摘んだ誤算の花鋏	自分の色に染まる相手を娘は選び
	田					尾坑					塚					nsk					野小			
	達					柳右子					節					勝					武			
	子					子					子					美					太			
友は美女私はそばで道化役	姫路市	亡夫よりも生き過ぎました十三忌	ルンルンにさせる列島陸つづき	掌の中のペットがいつか爪立てる	世捨人でも煩悩は人並で	姫路市	法要で父側母側の顔並ぶ	カスミ草どんな花でも引き立てる	馥郁と風渡り来る黄水仙	沈思黙考昔の事のみ走馬灯	姫路市	合掌をすれば血圧まで下がり	長寿国日本その谷底で病める人	車椅子の高さで世間見て回る	老い先の事には触れず笑っとく	姫路市	吾が家のドラマ観客になりきれず	生花や獄門台に似て悲し	ごまかすな人生貸借対照表	グリコ森永菓子か事件かややこしく	大阪市	ささやきは甘い言葉と限らない	彼岸寺姑に告げたい事があり	もう少し娑婆におりたいお雛さま
	都					丁					人					大					塩			
	里					坪					見					原					田			
	遊					サワ子					翠					葉					新			
	光					子					記					香					郎			

行く先は誰も知らない流し雛	和歌山市	願いましては御破算に出来るか誤算	本当の恋は知らない赤い口	私だったからよかったもののあの場合	そこで一献そんなこんなのお友達	和歌山市	幾久しく鏡に向けておく笑顔	秒読みが聴こえる焦らないことだ	春なのに思い違いをしてる椅子	ひい・ふう・みい紙風船を囃す春	和歌山市	娘が嫁ぎ覚悟以上の寒い部屋	哀しさも春の息吹きへ癒えてくる	来て欲しい来てはいらない見舞客	満たされている事すらも知らぬらし	和歌山市	マンションの谷間の渦に巻かれとく	白蓮の主張聞いてる闇の中	変身の前の気楽を語る蝶	天平の温もりがあり雛の席	和歌山市	嫁が来て息子麻雀してくれず	きさらぎの旅も又よしねこ柳	マル優もあきらめました懐手
	青					Щ					後					内					垂			
	枝					Щ					藤					芝					井			
	鉄					克					正					登志					千寿子			
	治					子					子					代					子			
スー		h																						
パーで会う先生は主婦の顔	岸和田市	久し振りきっちり友も老いている	その愛を信じてからはよく眠れ		優勝の涙にきっと秘話がある	岸和田市	よい出来と自慢も上げる自家野菜	拡声器今日も一人の死を告げる	ランドセル親の期待がつめ込まれ	合格通知家族の肩の荷もおりる	岸和田市	どじょうより蛭が気になる安来節	噂をすれば影とやらの電話口	心易い仲にも欲しい車間距離	優柔不断へぴりりと効かす唐がらし	兵庫県	も一人のわたしが覗くネオン街	つなる個	買う	袖裏の紅で女のする演技	兵庫県	芸のある男転勤免れる	私語	今日からは広く寝られる雛納め
パーで会う先生は主婦	\mathbf{H}	振りきっちり友も老いてい	愛を信じてからはよく眠	ドが高くて恋を見失う	勝の涙にきっと秘話が	和田田	い出来と自慢も上げる自家野	声器今日も一人の	ドセル親の期待が	格通知家族の肩の荷もお	和田		噂をすれば影とやらの電話口	い車間距	柔不断へびりりと効かす唐	兵庫県 脇	一人のわたしが覗くネオン	いびつなる個	燃えて明日買う	裏の紅で女のする演	庫	のある男転勤免れる	度末道路の私語が洩れてく	く寝られる雛納
パーで会う先生は主婦	田市原	振りきっちり友も老いてい	愛を信じてからはよく眠	ドが高くて恋を見失う	勝の涙にきっと秘話が	和田市	い出来と自慢も上げる自家野	声器今日も一人の	ドセル親の期待が	格通知家族の肩の荷もお	和田市		噂をすれば影とやらの電話口	い車間距	柔不断へびりりと効かす唐	県	一人のわたしが覗くネオン	いびつなる個	燃えて明日買う	裏の紅で女のする演	庫県	のある男転勤免れる	度末道路の私語が洩れてく	く寝られる雛納
パーで会う先生は主婦	田市	振りきっちり友も老いてい	愛を信じてからはよく眠	ドが高くて恋を見失う	勝の涙にきっと秘話が	和田市古	い出来と自慢も上げる自家野	声器今日も一人の	ドセル親の期待が	格通知家族の肩の荷もお	和田市清		噂をすれば影とやらの電話口	い車間距	柔不断へびりりと効かす唐	県脇	一人のわたしが覗くネオン街	いびつなる個	燃えて明日買う	裏の紅で女のする演	庫県	のある男転勤免れる	度末道路の私語が洩れてく	く寝られる雛納

再会の人の船待つ春の岸 寝屋川市 堀 江 光 子		短地の窓ちょっぴり生活のぞかせる 鳥の子お前に何の罪があろ 鳥の子お前に何の罪があろ せさんにだんだん似るわと娘がなげく	定型川市 宮 尾 あいき	米子市 沢 田 千 春淋しがりやの金魚で友を買ってくる とせで腹の消化もゆきとどき	風邪ひきをいたわり合って電話口 六十路にも春はときめくものがある主婦業に甘えておれぬ手内職
不倫とや浮気心と何故言わぬ 出雲市 園 山 多賀子	I	野暮天へおんなが世話を焼きたがる 反核の基地へ虚飾の艦が来る 観梅の園で拾った春財布	ボスの家やっぱり嬶天下とか信心はせぬが厄年気にする息子観題を出し始めたぞ足と腰	を とん尻にひく春風邪のしたたかさ を 生肉をかしわに鯛を鰯もまたうまし 生肉をかしわに鯛を鰯もまたうまし	決心がついてことさら広い空揺れ動く心見つめに旅へ出る

花粉症会いたい人を裏返し地場育ち才女で嫁かず気も強い岡山県		茶柱がすし屋の湯呑でやっと立つ	同権の妻が打っても曲がる釘	左遷よしよく陽のあたる庭があり	岡山県	金字塔セールス旅路の夢に見る	セールスのダイヤこなして居酒屋へ	最敬礼セールス出口で感謝する	長靴に傘持ってゆく山陰路	岡山市	中流の自負にもあった上中下	ここまでは誰でも昇るあと難所	ボロ負けの口惜しさよりも諦めへ	餌は死へ飢もまた死へ弱と強	岡山市	花の名を聞いて私の負け戦	あの人の視線の中に細雪	まろやかな仕草もいたに年女	母の逝くその日も白い蝶が舞い	出雲市	舌足らず愚かな嘘に吃る癖	呆けよりも恍惚という雅語もある	娘は母の分身されど女対女
岩	î				荻					行					井					石			
道	Ĺ				野					吉					上					倉			
博	Ī.				鮫虎					照					柳五					芙佐			
友					狼					路					蓈					子			
ライバルが笑ってる日の不整脈死期悟る夫は夜明けの窓開ける患はみをふっ切るための花鋏		誠心誠意貴方の瞳に惚れ直し	ガンバリましたと漬物石座る	夢の中でも男役を演じ切る	鈴付けた靴と少女のおしゃべりと	竹原市 岩 本	底抜けに笑うて借金などはない	プライドを捨てぬ女で紅が好き	節目ふし目に母の厳しい釘の音	ひょっとこの面ははずれぬはずさせぬ	岡山県 山 本	判を捺すまでの話が上手すぎた	最敬礼して税務署を出る演技	七回忌縁者の噂へ亡父還る	浪人のしこ名が重い五月晴れ	岡山県 小 林	吟詠に身の限界をたしなめる	敬遠をされて気づいた老いのこと	七草がゆ自然を守る会でたべ	ここまでとここからがある話聞く	岡山県 二 宗	バックミュージック別れに惜しい曲が鳴り	写経する前の心が続くかな
	博					笑					玉					妻					吟		
	子					子					恵					子					平		

半衿に大正ロマンの夢重ね 島根県 榊 核家族意志の疎通の芋煮会 たしが握る鯨尺 こめかみに梅干はって母達者 倉吉市 淡		帰って来ると迎えてくれる黄水仙 がスいいなあ普段着ばかり乗っている 孫の手も早や四十歳になる を言う がないいながである。 倉吉市 渡
原 路	中	辺
		菩
子 子	前	句
表第近く(一句) 後弟近く(一句)	トレスを無色のたすらにページの座に紫式部の	内需拡大 山脈削り道が出ほこり貯め老舗を守るウイほこり貯め老舗を守るウイ理突のけむりが消えた都市
島はて県い	. さるり ん風	道が出来 島根県 島根県
島て	さんか 島 県 の 私	来ン砂 島 根 し 根
島 根 収 り る	り さんか 島根県	来ンドラ島根県
島根県・藤	さんか 島根県 松	来ンドー 島根県 北
	大正ロマンの夢重ね 島根県 榊 原 秀 子 義弟逝歩わたしが握る鯨尺 明るくて金みに梅干はって母達者 倉吉市 淡 路 ゆり子 いつまでも	食吉市 野 中 御 前 壺の座に紫式部の大正ロマンの夢重ね 島根県 榊 原 秀 子 養弟逝く(一句) 大正ロマンの夢重ね 島根県 榊 原 秀 子 養弟逝く(一句) 大正ロマンの夢重ね 島根県 榊 原 秀 子 養弟逝く(一句)

静岡市 、 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	春が来た来たみつばちも忙しいおはようが素直に弾むランドセルの列へシグナル青となりいまなようが素直に弾むランドセル	す取	罰として人間の子に生まれしか 照れくさい言葉で妻を弾ませる 照れくさい言葉で妻を弾ませる どじょっこのいない小川はまだ冬か	裁判の是非はとも角長すぎる明眸をあたら少女のサングラス明眸をあたら少女のサングラスで回してゆっくり渡る歩道橋に見直されがトンボ飛ばして孫に見直され
	渥 君		新	林
	美田	- ""	家	
僕	弧	とみ	完	路
Щ	秀 生		司	杖
ヤホンの補聴器外すまるどりくる春待たるると老後十時以後一人なり肌寒	深紅の花びら競ってシクラメン合格へ温泉旅行おごらされ合格へ温泉旅行おごらされた事色のセーターを買い春を待つ	の無い時計がひとつ欲 の無い時計がひとつ欲	雑草はふまれた靴を忘れない独り居が好きで嫌いで独り住む 独り居が好きで嫌いで独り住む	正論を吐いて左遷の的にされ日寿まで生きて自慢をして見せむりまで生きて自慢をして見せむー言が足りず誤解の渦に居る
中	土	行	Щ	赤
村	岐	天	島	Щ
優	ト ク 子	千	渢 云	菊

一隅に座り真相見えてくる ボスターは落選しても笑ってる 焼闘をしたい相手に仕えてる 海南市 三	イバルに成長すれば叩かれる校の都合で学生蚊帳の外由主義育み過ぎて持て余しまま義育み過ぎて持て余しまま		弘ら せき り 村市 ば 市 ば	第日本市 は 毎日が和解で暮れる夫婦仲 駅の名は縁起をかつぐ入場券 駅の名は縁起をかつぐ入場券 無人駅観梅の人はき出され 奈良県 宮
宅	井	j	藤	岡 川
保	やすお		対力	古都
自画像に嫌いな傷を消しておく	で、Tebsonで、OXE の丸に反対も出るPTA 大阪市の丸に反対も出るPTA	年生ランドセルも傘も重くないさんと大学の子の甘い声	百円玉小銭となって重くなる 朝みする善人の手が小さい 堺 市頼みする善人の手が小さい 場 市	東面目だがスナック通いも真面目過ぎ 生が一杯味わうビールに春うらら を達仏墨絵となりて春の雨 を上であるとなりで春の雨 を上である。 は島市 本 は島市 本
寺	板	中	柿	藤 枢
井	東	西	花	解 并
東	倫	兼治	紀美	静かな
雲	子	郎	女	風め

熱いお茶ポケットの噂何時出そか 半額が七割引となる気温 半額が七割引となる気温 出雲市	かたり や 思いざい のまたが沈む約束ひとつくれながら 出雲市 出雲市	流し雛 乗船超過してますよ (淡島の流しためらわぬ年になったよ ふぐ料理ためらわぬ年になったよ ふぐ料理 守口市 は支関の前でひそひそ声になる	高うだけは言うてコンパクトを覗き小遣いをやっても貯金ばかりする中口市地げ腰を羞恥心だと見た誤算	抑えてた心が炎えるレモンティ肚据えて聞けばなんでも無い話大阪市若者に問えばはっきり出す答	花だより日を繰り夫婦とも出好きしだれ桜女の中のおんな見せ大阪市大阪市
小 園	吉	維 赤古	森	井	渡
玉 山	岡	城	Л	上	部
満 良	きみえ	君	まさお	白	さ と 美
江 子	え	子	お	峰	美
意う事へ頷くだけの母となり 言う事へ頷くだけの母となり 時間病 (二句) 宇部市 日間病 (二句)	来外に素直なバラの棘でした にの先も律義な夫に従いてゆく を対に素直なバラの棘でした	有線放送ご不幸つづく雪が降る休肝日明日へ延ばして今日は酌む山陰路暖冬返上雪景色	この街も辛い想い出落ちていた 善人をだましてしまう春の雨 自己暗示かけて哀しい春となり	不仲でも猫は隣を行き戻りオートバイ風切る嫁のサングラス一言が多い女の仲違い	出雲市小寺合所おかめインコがなぐさめる眼科医はとても無口で不安ですましゃべりは冷めたコーヒー気にしない
平	金	光	城	松	2.102
田	Щ	井	角	本	白 金
実	夕	玲	鶏	文	房
男	子	子	生	子	子
		— 27 -	→ 7,		

寿なお高砂を舞う白い足丁花匂うあたりに机置くルバムの米寿の母は若か	青春の回顧笑みあり毎吾あり 一人旅解放感と孤独感 豊中市 上はしご酒最後の店は決めてある 豊中市 上シクラメンまだ炎えつきません長い冬	片づけた物にも影がついて行き思いきり泣いてしまって出る欠伸 吹田市 栗	咳払いあれが合図であったのか名ばかりの春に旅する花の冷え 吹田市 茂	やる気なら禁煙タイム守れます一ヶ月遅れで地下へ春の風 藤井寺市 中二人きりなのに話は政治だけ	隊だらけですわとスリが説教す 刑事から見ればスリにも隙があり 三ツ揃い着るといかつい農夫の手 を持ち市 福
で	田	谷	見	原	元
慶子	登志実	春子	よ志子	比呂志	みのる
しく交錯 とく交錯	妻という指定席なら欲しがらぬ 竹人形と話す今宵もみじめだな そよ風と約束がある白い靴 和歌山市 **	通知がわたし宛にくる言うまい春の陽が温いて片道切符にぎるひと	転身に戻る目盆栽木に	呑みはやす阿呆に呑めるみにこにも渋滞	駱駝瘤まだまだ砂漠遙かなり 若き汗大地へ浸みて黍は萌ゆ アフリカの熱砂井戸掘る老気骨 唐津市
瀬	木	3	広	北	曽 筒
尾	本	さえき	本	Щ	我井
六	朱	や	文	竹	部朴
郎太	夏	え	子	萌	裕 竜

って鶴の一声天をつくスの色を流して河染ま	シャボン玉夢が見たくて垣根越え建売りの隙間の風も春めいて	が今頃になって欠け出に乗りすぎる僕に妻が	らがながと	さまるがる	人妻の哀しい過去へ疼く雨まっ白な髪で私でないわたしまっ白な髪で私でないわたし 徳島市 宮	らがり を なり を を を を を を を を を を を を を
瀬	Щ	下	山	内	违	本
福	為	٢	悟	澄	まっ	た だ し
	子	L	郎	子	つ女	ĩ
かれてて掏摸に遭いの季を愛でて老い	122	竹の間に	歌山県でかわれ	特合室に寂しがり屋の時刻表窓際に次の辞令が置いてある東京都 吉	黒リボン仕残しありと男の目あの素振りやはり知られているようねあの素振りやはり知られているようね山吹の花に不妊の悩みあり	漢字なら大学生にまだ負けぬ ポケットの底に小さい玉手箱 鳥取県 羽津縄目きつい日は歎異鈔の一頁
原	中	原	3 谷	田 川		津 川 上
七	綾	淑 5	忠	高 一	良	公よ
面山	珠	子	召 ラ	夫 郎	江	公 り 乃

自

千森般年不 病落 維趣猜 年の若輪協 人ち 魚味疑 心経重 を励 に心 の樹 和 経ぐい 子で雑れ ドラか 音 ます ta 0 0 マ鳥 ら世 ま ま を崩り らまで の子守歌うたう Ŀ ま E 魚の 10 の持たぬ片え 痛みを知って が地を見せ 知って すブル 老骨生きて を蓄 とけと友が 1 # 言う 3 10 る 金 月 井 原 文 宵 秋 明

温左釘下ひ

世美総いお

路五

H を茫然自

亡

妻

0

11

のちを浅くして

デーの日に妻死す

昭和二十三年

郎 月

師

た朝の小さい

13

鳥

似るず

藤

村

女

ちの 12 0

下戸乱

故女

長が

0

4

1

もれ

和

浴槽に桧が匂うな

訳をしてしまう

. はか句う宿でよして ない訳をして

芝居で

上ずし母の好みな おわれ右してかな おりまりの傾く 手が抜な 手な言 事 かい 言う 足 b 然勝ちを知りなと部長 X がら視野がせな がら視野がせな 夫婦 0 慣 手が 喋る

児 島 5 몸

やつ 馴 らされり 沈 默 れたまま花の 0 てる いき Ħ 3

黒 III 紫

せまくなる

本 水

IE.

ŋ

出し

おま

1

げ

傾憎

n

< L

0 2 を見 忘

てる

\$ 54\$54\$54\$54\$54\$5	******	54854854854854854854	•
大器晩成だよとゆうゆうこせつかず大胆妻と小胆亭主で平和ですを福を追いかけ過ぎてけつまづき本田 恵 二 朗 恵 二 朗	^	藤 川 甲 鈴	
27,			
気短かな方 心電図をかけましょか 夢太く夢が小さくなって老い 夢太く夢が小さくなって老い かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゃ かんしゅう かんしょう かんしゃく かんしん しんしゃく かんしゃく かんしゃく かんしゃく かんしゃく しんしゃく しんしゃく しんしゃく しんしゃく しんしゃく しんしゃく しんしゃく しんしん	下である。 ないは、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 で	野れる情けを知らぬから泣ける 男たる情けを知らぬから泣ける 男たる情けを知らぬから泣ける では効かぬ腹薬 では効かぬ腹薬	
	井	**	
2	明	太 静 茂	
	成だよとゆうゆうこせつかず 気短かな方 心電図をかけましょかと小胆亭主で平和です 就職へうれしわびしさ子が発つ日くせりふで同情押し売られ ユーモアの実がしぼんでいる世相追いかけ過ぎてけつまづき 夢太く夢が小さくなって老い 事大の書き後進へゆずらねば	たよとゆうゆうこせつかず 気短かな方 心電図をかけましょかいりふで同情押し売られ 本 田 恵 二 朗 仕事持つ幸せ後進へゆずらねばりふで同情押し売られ かけ過ぎてけつまづき 本 田 恵 二 朗 仕事持つ幸せ後進へゆずらねばりふで同情押し売られ カル胆亭主で平和です	市川鈴魚 玉石混淆磨けば光る玉幾つ 下村 川 鈴魚 玉石混淆磨けば光る玉幾つ 大におりすぎて騙される 二 藤 甲 吉 満ち足りた窓で眺める楠若葉 山 内ではがと伏せ字の怖い妻 古 ボケットに半分のぞいている財布 とよマリヤを読みつかれ とた靴へ靴へら恭しく出されんで立小便をする エ 藤 甲 吉 ポケットに半分のぞいている財布 とた靴へを立い便をする

どなら n る声 0 は に逝くなんて X < 43 もの 米

捨 大 日善 日くばせへもう行動に苦人かこんないい日に 日様を赤く塗 てられてならぬ涙で嘘をつく に移る妻

る子へホッとする

八 木

Ŧ.

代

澤

暁

明

出 智

小

子

薫

橘

高

寺の娘は寺へお嫁に行ったそ瞳が合ったとこで誤解はとけ押入れでまだすねている旅鞄

たとこで誤解はとけてい

る

たそな

風

会

林 由多香句集 さり火』

1/1

発 刊記念川柳大会

昭和63年5月15日 (日) 正午開場

ح

鳥取駅前

ホテルナショナル二階

ホ

ル

電話〇八五七 (二四) 七五一一

豐 か

月うかつ

傾

くと男も輪をつくる

恋魚た

0) Va

から つに

#

菜切 弱い魚が出

ŋ

庖

1

研 てきたよ

40

で朝

猫

むいて小さい釜に水が出てゆく音をきい

釜に水を張

てい

3

が腹か

空春

心で設

つ口

に は あ

港 愁

れて二十 玉

年

経 n

ち

西尾

火 <u>n</u>

嘉将・黒川 小林由多香選

岩本雀踊子選 濱野 奇童選

八木

締切13時

各題

一句

海

投句拝辞

席題なし

大会と祝賀会五、〇〇〇円(句集含む) 大会のみ三、〇〇〇円(句集含む

◇お問合せ先(昼)○八五七88三三○五(JR湖山 夜)〇八五七旬八四一六

(自宅

Ш 洋 77

両

句

・集『いさり火』発刊実行委員

幟

0 0

人ひとり

が鹿之助

鷹地天

臥すは眠るにあらず風を聞き

仰

ぐは星

の雫を受けるべ

<

(獅子舞

山神社

匠 に な

稚

児に

して鷹も眼

のやさし

-33 -



と思う。従って生活は豊かで、国民の性格は 日本は恐らく(中略)未曽有の黄金時代を現 訪れることを信じる僕は(中略)五十年後の 出して好景気の波に乗っているのではないか てきた世界の覇権が、必ず近い将来、日本を 干字近い長文なので、そのエキスだけを抄録 に『五十年後の柳界を語る』という興味深い 文を書いている。全文を載せるといいが一 東洋樹は昭和12年1月発行の 「イギリス、アメリカと地球を西漸し 「三味線草

本が戦争に勝っての上の話だが、この前提は 出版も実現している一」とある。これらは日

が開かれた折、

出席されたこの人に

面」を矢つぎ早に出した。今思えば「ふあう

「羽衣」や「覆

終戦直後、愛媛県新居浜市で愛媛川柳大会

盛んに成って(中略)川柳会館、

協会、

陽気で朗らかとなり、笑いの文学が勃興して

いるように思う。そう考えると川柳も非常に

月「ふあうすと」が創刊されこれに合流し、 月らと「覆面」を創刊。このあと昭和4年5 大正14年「柳太刀」廃刊後、佃嶺月、 月の柳名で活躍し、十代の作家と注目された。 東洋樹は峰月を捨て昭和初期東洋鬼と改めて 同社創立同人で重きをなした。同誌雑詠欄 なっていた「柳太刀」に十四歳のときから峰 正12年暮までの12年間、神戸柳壇のかなめと でも全文剃刀東洋樹の面目充分だろう。 軍国日本の時代のあふりからきている。 る。 明鏡府。は東洋樹の命名である。この頃、 東洋樹は明治45年「つばめ」を改題し、 藤村契 それ

> こととは知りませんでしたよ、と笑ったこの 初対面のこの人に挨拶した。ちっともそんな で、鬼とは中国では、もののけ、 知って、いい得て妙と笑った遠い日が懐しい。 でしきりに文通を交した。若い連中が「先生 人と、爾今親しくおつき合いを得て、晩年ま の意味です。東洋樹と改められてよかった」と 条衣料店などがあり、地元で誰言うとなく三 家は薪炭商、 のニックネームは、お公卿さん」というのを 東洋樹は明治39年4月21日神戸生れで、生 東洋鬼は、東洋鬼という中国民衆の蔑称 親戚に手広く商いをしていた三 番 語

せず、大正の末から昭和にかけ 句力の旺盛だった彼は「柳太刀」だけで満足 い時から心得ている人であった。 つするにしても落語のおちのようなものを若 た私はついていく事ができなかった。猥談 立ち何かにつけて老成した人で、発育の遅れ の先輩である。中学生の頃から彼は白髪が目 が、同級生の九葉は東洋樹についてこう語る。 木九葉・小池鯉生がいたことは前稿で述べた 東洋樹の出身校県立神戸商業の同級生に鈴 東洋樹さんは同級生だが一つ齢上の川 (中略)

条財閥と呼ばれていたそうである。

動きであったといえる。

東洋樹作品は常に私の身近にあっただけに、 東洋樹作品は常に私の身近にあっただけに、 見やすかった。青年東洋樹の作品は、今思い 見やすかった。青年東洋樹の作品は、今思い 出しても謄写版のインクの匂いが強くする。 その匂いには現代の東洋樹さんとの年齢の差 だけで片付けることの出来ないものがあるよ うだ。その匂いが何から来るものであるかは 断定する事は困難だとしても、現状不満から 何ものかを強く求めてやまない作家精神の激 しさから来ていたものと、私は自分なりに解 釈している。当時の東洋樹作品の持つ格調の 高さを私は高く買い、自分の作句の糧ともし ていた。(「川柳雑誌」昭39・5 『三条東洋樹 ていた。(「川柳雑誌」昭39・5 『三条東洋樹 でいた。(「川柳雑誌」昭39・5 『三条東洋樹

ものの筆者は詳しくは知らない。 東洋樹はふあうすと社創立の古参同人とし東洋樹はふあうすと社の地壇(朝日新聞神材の行動の動機は『あさひ柳壇』(朝日新聞神材の行動の動機は『あさひ柳壇』(朝日新聞神材の行動の動機は『あさひ柳壇』(朝日新聞神神の行動の動機は『あさひ柳壇』(朝日新聞神神の行動の動機は『あさひ柳垣』(朝日本)としまれる。

東洋樹の「時の川柳」は、やがて謄写刷り

ていたであろうか」(「時の川柳」No.324 ″三条

を持ち、東洋樹が路郎の川柳生活に共鳴した 郎と相通じるものがあると思うのは私だけで はあるまい。路郎が番傘の前身である短詩社 はあるまい。路郎が番傘の前身である短詩社 はあるまい。路郎が番傘の前身である短詩社 はあるまい。路郎が番傘の前身である短詩社 はあるまい。路郎が番傘の前身である短詩社 はあるまい。路郎が番傘の前身である短詩社 はあるまい。路郎が番傘の前身である短詩社 はあるまい。路郎が番傘の前身である短詩社 はあるまい。路郎が番傘と川柳雑郎とのは私だけで郎と相通じるものがあると思うのは私だけで郎と相通じるものがあると思うのは私だけで郎と相通じるものがあると思うのは私だけで郎と相通じるものがあると思うのは私だけで はあるまい。

作品が増えて行くことにどんな感慨を持たれてあろうことは容易に想像出来ることだ。 東洋樹は、日本の伝統文芸である短詩を真であった。それ故、和歌・俳句はさしおいる・ 大工柳一つ研究理解せずして、西洋詩の筆法をもって、それを真似事での生半可なの筆法をもって、それを真似事での生半可なの筆法をもって、それを真似事での生半可ない。

東洋樹追悼、橘高薫風)

「東洋樹さんは「あさひ柳壇」「兵庫県警」「工芸も川柳会」等を通じて、川柳の社会進いの為に一役買い柳誌「時の川柳」を発刊して新人指導に力をつくし、柳界における地位で新人指導に力をつくし、柳界における地位で新人指導に力をつくし、柳界における地位で新人指導に力をつくし、柳界における地位で新人指導に力をつくし、柳界における地位で新の「川柳雑誌」の「東洋樹さんへの注すったのは人間の常だとはいえ大切なものを失ってしまって惜しまれてならない」 大ってしまって惜しまれてならない。 実作者東洋樹に寄托した夢と、一誌の主宰者 たる東洋樹の二面性への批判がそこにある。 こびとすじの春は竜子の破れから、東洋樹

大家で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最も親文。で九葉はこう前置きし竹馬の友も最初を表している。

★次回は「高橋散二」

誹 風柳多留 廿六篇研究(111+41)~11+公

石 田 南 得

本 多 正 範 石 田 成 佳

木

黄

大

屋 六 真

郎 光

野

多 田

故

出

田

604 御表のおふじハ高い顔をする

石田晋 = 何かの用で御表にでた富士額の御殿

るとか、立派な姿であるとかの解がありそう る。たとえば富士山は表富士が一番高く見え 意か。ただ、もう一つ何かありそうな気がす にも思える。 女中が高慢な顔をして、武士と接しているの

南=礎稿にある表富士と裏富士と較べて、表 富士が高く見えるということを擬人化した句

本多―「御表」は奥と対比させての表現で、 鈴木―妾と本妻との対比か。 妾をさしていると考えております。

> 多田—不明 糸ゆふのたつ日ハ娵の帽子針

め外出することになるの意 糸遊(陽炎)の立つ頃に嫁は綿帽子を針にと 石田晋―嫁の礼の句。嫁の礼は遅れるもの。 綿ほうし風をおさへて長はなし

っていた。年礼は街中だが、野掛けは郊外だ **多田**―私も八木さんのように「野掛け」とと 日に焼けないように、

八木=嫁の礼と野掛けを考えていた。

43

606 間ィ紙か足らず献立引へかし

石田晋―間紙は皿・小鉢・重箱など食器類を

らなくなり、 大屋=「台所掃いて片付けて、椀を拭いたら 石田成―単なる宴会の後始末でしょうか。 いるの意 合紙して、Ⅲを破さぬ様にしや」(関東小六昔 献立書をやぶって間にあわせて

多田一賛

舞台)とする。

江の嶋ハうい物といふ旅てなし

こまで江戸から往復三日の旅だから、 名だが、江戸時代でも同様だった。 石田晋―「江の島はいまでも行楽地として有 レクレ

紙。宴終わり翌日かたづけるとき、間紙が足 重ねるとき、傷をつけないように間にはさむ

ーションとしても好適地だ」とは、岡田甫先 『川柳東海道』に記されている文章。

もの辛いもの」を入れて知的面を強調したと という句もあるが、この句に成句「旅は憂い 江の島ハなごりをおしむ旅でなし 九25

への旅はそんなたいそうなものではないの意 ここでは、旅は憂いものというが、江の島

旅はういもの女房をぬすまれる

安六仁6

多田―賛

花よめハ歯にきぬきせて笑ふ也

うが、嫁のたしなみとして笑う時も袖で口を おおったり を袖にて被うて、但歯に絹きせぬといふ俚諺 のうち」とする。これで句解は必要ないと思 石田晋―『風俗志』はこの句に注して、

するのがよいだろう。それを諺「歯に衣着せ ぬ」をひっかけて句としたもの みんな顔かくすが娵の大笑ひ 笑ふたび娵手の甲を口へあて また大笑いするときも 九 40

多田=賛。「小いやらしく密男があるから御

口から何ぞ出るやうに嫁笑ひ

天六桜2

想程度に一口なぶられるのは悪くないのも女

ごころ

色梅児誉美・三編巻之八 勘弁ものだと歯に衣きせざる一言に……」(春

三十六丁

609 看板に日月を出し星をさし

日・月・星と易と縁語の天体を並べた趣向の し」は図星をあてること。易者が日月の画か れた看板を出し、客の図星をあてるとのこと。 ─「日月の看板」は易者のもの。「星をさ

大屋——賛。

多田一ご名解。 手の筋を見ると一ト筋けちをつけ <u>-</u>

610

愛想に娵ハートロなぶられる

げ腰になる。 い、また「赤ちゃんはいつですか」などとか艶やかになった」とか、下がかった冗談もい らかうと、「アラ」とか「マア」といって逃 南=まだういういしい花嫁、娘時代の延長で 一寸なぶってみたくなるのが人情、 無視されれば却って淋しく、ほん軽く御愛 一段と

あいそうに諏は一トロなぶられる

多田―賛

三尺の剣キ四百の元ト手也

れをもって本句の解にあてる。 提げ漢朝四百年の基をひらき」とあるが、こ る大蛇を三尺の剣で斬った故事を詠んだ句 南=沛公(漢高祖)が芒蕩山に白帝の子であ 『風流志道軒伝巻一』に「高祖は三尺の剣を

百年」の意であろう。 いるのか知れないが、礎説の通り、おもに「四 八木=賛。四百は四百年と四百余州を掛けて 三尺の剣で四百切りしづめ

612 いけしわい女めたなともふえんじゆ

えって「四百年」の方も考えたかもしれない かり解していたが、この時代の人々の方がか 多田―賛。「四百」は「四百余州」の方とば

罵ったであろうということ ある。句意は、王昭君が賄賂をしないので、 南=漢元帝の時、王昭君の故事を詠んだ句で 「いけしわい、どけちな女めだ」と毛延寿は 世事の無いやつだとなぐる毛延寿

多田一赞



黒

III

選

する H 市 中 尾 ま WD

振荒ブわり波ーた

L

0

句

2

0 け

7

13

时

メラン答かえらぬまま暮れ

る

K

0

せ

て贈ろうメ

"

セー

肩

0

力をぬく週末のレモンテー向けば人恋う捻子がゆる

フティ

1 か

取

市

小

む 3

6

2

谷

もう守

備

美 千

0

逆らの

中

To

あ

か

Vi

0

てば

かりい ぐら

る

から てる

わが

れ私

る

こころの

火とも

して走る

人夜

生

八

+

半分生きてド

.7

コ 0 小 嫌 0

ーイショ

名古屋市

藤

井

は鳴き蕎

一麦受験地

獄

は

10

終るよ

深呼

して作 失意空気

戦

を考える

風正

を

吐

V

7

を播 7

気がもと

n 種

11

る <

船

0

受話器掌に笑ってば

0

1 11

n

話ば

か り気の

高

子

さが役をはず

Ĺ

てもら

えなな

42

尾

市

高

杉

T.

歩

の中で蝶とけへぎ が今 夜も 小す 0 11 笛を吹

n

罪 み B

II II 面 途

帳開賛い

め

言葉だけを聞

V

てる赤いバラ ノッ

13

ことが

あ

りそう

S

b

ŋ

雲が

浮く

尻か

0

あたりにいつも

母

椅子 7

オケで舞わねばなら

ぬ花吹雪 0 れる扉

と思うか

6

々と交わす私語 嬉しいことば ぼけ な愛捧 げ か ます

て足音探る春 過去が無 に 視 82 女に泣 転 野 じた 12 П 踏 春の刑 夢で色褪 いみ た 込 寒椿 め な せ V 11 る る で

泳繕

せ

えぬ が

手 誤

の解

切生

れむ

静 岡 市 片

平

静

代

市 児 玉 歌

尼崎

子

熊本市 宇 野 昭 代	申告の列に毛皮を着た女	革靴がチュウインガムを嚙んでいた 繋がれていたばっかりに焼死した 繋がれていたばっかりに焼死した 鳥取県 土 橋 はるお	整形をしてから陽気でおしゃべりで、出生し、一緒になりましょうとはいい台詞、いい子ばかりではつまらない公園、の返球からもあなどられ、までは、一様本市、水、田、俊、子手に握る運命線に妥協する。 熊本市、永 田、俊 子	ちます バメ 等 中 三 枝	女狐の髪もすっかり薄らいで 熊本県 大川 幸子 でなげしの咲かねば散らされないものを かなげしの咲かねば散らされないものを かながしの咲かねば散らされないものを かながしの咲かねば散らされないものを かんがった かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう は本県 大川 幸子 でんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう は本県 大川 幸子 でんしゅう かんしゅう かんしゅう はんしゅう はんしゅう かんしゅう かんしゅう はんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう はんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう しゅう かんしゅう さんしゅう かんしゅう かんしゅん かんしゅう かんしゅん かんしゃ かんしゅん かんしん かんし
一筋の大きな道は我を通す	長岡京市 木 本 如 洲	友達のうしろでお辞儀して帰る仏と同行鬼と遊んでみたくなる好飾にわたしの声が捨ててあるな同行鬼と遊んでみたくなるない。	に関かすっしり重いしたれ権 は何かすっしり重いしたれ権 広島市 流 奈 美 子 そして春恋のゲームをする小指 で足る洗濯に彩がない	いらぬ日誌はウソで埋めいらぬ日誌はウソで埋めいらぬ日誌はウソで埋め	ストーブにおしめが下がる降りつづき ストーブにおしめが下がる降りつづき ストーブにおしめが下がる降りつづき

イメージの通りやさしい義姉が好き怨みつらみみんな忘れる花へんろ	久留米市 鶴	顔見知りになって露店で値切れない	バスツアーにしよう切符がややこしい	紅拭いて夜の鏡に負う引け目	ひとすじの道しか知らぬ振り子です	口論にお国訛りが出て負ける	大阪市 上	断りの電話へ夫をだしにする	切り札を持って笑顔を絶やさない	他人の目気にして道を変えてみる	尻馬に乗った連絡船の旅	母の目にまだ日の丸は褪せていず	京都市 松	翔び立った娘の視野に置く父と母	花嫁人形あれから母の泣き黒子	あれやこれやと詮索好きな覗き窓	役に立つ顔ではないが数のうち	許さねば渡られぬ橋一つあり	高槻市 笠	海鳴りの窓風鈴に罪がある	風船になりたく虹を信じ切る	八十を生きて極楽甘くみる	明日の道さぐる言葉を選っている
	久						田						Щ						嶋				
	百万両						柳影						芳子						恵美子				
風船明け	砕氷船春をみつけに北の果て	吹田市	引越しの釆配を振る若い妻	もう一球スローカーブで遊ぼうか	烏一群森へ帰って今日の章	数珠を持つ片方の手で子を叱る	お父さんあなたの胸は泣き易い	静岡県	こだわりが過ぎて息子に叱られる	かあさんが張り切ってゆくバス旅行	窓からの風に誘われ旅に出る	ポスターがうれしい旅に呼んでいる	さわやかな朝さわやかな人に会う	岐阜市	守備範囲広い男で恐妻家	さしかける男の傘のあたたかさ	運鈍根根がちょっぴり不足する	苔むした道しるべ みぎこうやみち	火祭りの男の肌が美しい	西宮市	長い髪なびかせ春は自転車で	もし妻が逝けばぼんやりできますか	特訓の甲斐なく祝辞どもりだす
		井						薗						渡						秋			
		上						田						辺						本			
		照						獏						杏						て			

村

る

沓

子

末席をけがすどころか気炎あげ 薬立つ子に空は無限の青さなり 連絡船やがて記憶も消えるだろ が家は点としか見えず 静岡市 小 幡 芳 男 意見した手紙にそっと札を入れ	出雲市 金 村 青 湖女三人食べてしゃべってこれも芸一呼吸おいて摩擦を避けているまじまじと見詰めて別れが言いだせぬ	藤井寺市 高 田 美代子同じこと考えて居た僕と妻 自治会の世話役が待つ定年後 毎日の自由気ままにある不安	雑草の苦労は土が知っている 西宮市 松 本 一 郎騙されてから褌をしめている 二浪目にやっとパスして花の下	冬眠がさめて穴からのぞく春 自我埋めて余生の坂をのんびりと
根回しに走って補佐の役どころ 枚方市 中 山 おさむ かんのんと暮す夢見ている時計 があれてる髭だお風呂へ先ずどうぞ 枚方市 中 山 おさむ 別れる時の笑顔が男離さない	寒餅を焼いて故郷の春炬燵 梅林に誘われて来た詩心 輝いた石に粗忽を笑われる	東予市 小 山 悠 泉書京着つけて家計を切りもりす春うらら旅は気ままに足まかせを夫婦笑い袋を買って行く	ではの単に通せんぼうの網張られた粉症今年はマスク二つ買う でおに乗せと思う夫婦の口喧嘩 でいよりぬ悔いを日記へ足して書き	を やールスの苦労知ってる靴の底 運暦の旅のプランは子が作り

手 婚 良始新線め築 階 娘春 婆さん 複 元 深爪を悔んでい 言 ぜんざい 自 春 痛 お 僕 料理の 品 旦 のバイト客の一人になりす 風 約 段 6 雑 0 愁やまだブランコ 12 も子 師よりもっと早くにゼニ消える より のおみくじ達磨二 ての給与見せあう更衣室 0 車 分はわたし ほど愛し な足どりで定 力 ヒー 出窓に にはずみが 0 ル テに 外 供 つ昇って春とする クイッククイックスロ の餅がひねもす胃に 分析され そばにお宿をとりました の靴 玉 ルも少うし 洒落 旅 夫婦 何 ノンコがゆればいます春小袖 行先に が干してある にもある冬苺 か つい の欠け た花がある てるお 退 仰 やっ Ш する 一つ買う 高い目 て春を呼 書 茶碗 弁当 てくる か やま は KK に ま 座 0 大阪市 尼 电 尼 3: ーで皺が伸 82 野 n 本県 崎 崎 市 市 市 Ш 尾 Ш 高 び 田 宮 Ш 野 \mathbb{H} 保 弘 妙 弄 杳 治 蔵 子 美 草 花も実も 啓蟄 ケー 弱 井 汚 栄転も左遷も同 花 編 福 逢 特 コンパクトの中で女は若返る 工 凸 筋書を追うとポケットから逃げる へしぶり 怒哀楽出 Vi 面 n プ 窓を開けると仏 柄 棒 寿草対でしぼんでゆく 10 + 鏡 た 場買 0 D 0 0 0 てるガラスをたたく春の詩 ^ 手が進 だけが素顔を知っている 屋でケー ンをキュ ふとんに 底から見上げてる顔 京で花追う春 未練な冬が舞 V り休みなさいと雨が見わなきゃ損の気に 村の資 と思う心 な せるあなたが ぜ まな か じ段ボ 源 明日 キに迷う男 ッと結 冷 0 い外は 0 8 手に 梅 0 た H 12 背 ール 狂う 絵をもらう 永 をむ Va どころ h 羡 で主 出 風 雪 嫉妬 が 大阪狭 に会う させる ま ば 0 逢う it 降 和 新発田 かり 3 歌山 瞳 婦となり 京 山 都 賀 市 市 市 市 県 Ŀ Ш 桜 木 安 鈴 木 П 井 村 田 三千 荘 志 春 た

枝

津

子

次

言葉尻取られ笑えぬ独り言涙吸う砂漠ひろがりそうな空	能	来客に趣味一杯の飾り棚	仮装した今日は社長が平の役	三人も寄れば振袖賑々し	研修という名目の旅に出る	熊	独り身の淋しさ賛成ばかりする	波風を立ててはならぬ春の絵馬	老妻が守りの座に居て恙なく	地下街を出ると世間が光りだす	尼	うどん屋に出前するかと聞いてみる	良いことは内緒にしても顔に出る	単身赴任下戸も寝酒の味覚え	仁丹を嚙んで老臭一つ消す	尼	玄関の花へ話が脱線し	拾い物やっぱりお礼を期待する	満開の桜の下へバスが着く	電子レンジタベの喧嘩あたためる	杏	背を向けてからは心に風の音	子離れの淋しさ小犬もろてくる
	本市					本市					尼崎市	みる	る			崎市				る	奈良県		
	黒					北					的					鈴					横		
	田					Щ					場					木					井		
	緑					進					十四郎					良征					都姫子		
まっすぐに歩けぬ今日の向い風老いた日のことには触れぬ若い地図		ふるさとはやっぱり近いほうがよい	通りゃんせうたって恐い帰り道	菩提寺の土の香いが好きになる	未来像紅く染めたりぼかしたり	米子市 大 田 み	忍従の涙がたまる北の部屋	好き好き好きセーターの針はずんでる	京菓子へひとり緑の茶をたてる	家族みな達者で好きなことができ	大阪市 今 西 静	早春の風に遅れをとらぬよう	言いたいだけ言わせておこう俄雨	ダイヤルを回しそびれて戻る道	ご近所の噂が溜まる角の店	和歌山市 田 中 輝	花影や人それぞれの胸のうち (彼岸詣で)	美人キャスター隙間は見せぬインタビュー	鶯も不倫に疲れ春惜しむ	マイペース春の潮にささやかれ	貝塚市 池 田 寿	自らをいつしか許す妥協癖	マジックの種がどこかにある政治
	貴					さと															美		

付き合ってみたら安口ぐせに別れましょ まっ 何自線 水 7 盆 石 小空 春半 平 雑 2 流 子 引 -凡で陳 草の 育て 飴 1 0 画 栽 畳 春 港に着いて重たいウイスキ 0 0 額 n 15 が 陽 先 像 矢に とうに生きた証しの太い指 0 ホ 4 H 0) が一 よう て貴 を告白 が障 が読 1 " K 趣 和 赤 本性手を抜 1 ジか 省 味 孫 札 腐 亡夫のことばを杖とする 4 番 7 第と長 略 子に でつきあ 0 0 かい 80 0 番似合う妻が好な 大婦の間柄 れましょうと妻! する心 n 後生大事に父は 出 視 て 7 けて売り 布 来ぬ 光る母 多弁 から 団 聴 消 える 43 も干してや くのを狙 冰 お友達 ホ -稼ぎ 7 43 を聞き流 クロ にく の部屋 7 まくる 影 は 法 留 L 強 12 13 師 藤 つけ n 1 る 守になり I L 古 歌 # 今治 伊 高 石市 Ш 寺 丹 市 市 市 市 H 楠 宮 1 渡 中 H 邊 能 2 昭 純 伊 江 津 ta 子 美 志 豪雨 アン 気が ポ出 近頃 なん 白 た 千 退 あ 酢 タウンペー 満 笑 窓開けて春の足音聞 一の朝 院 鳥 る なただけあなただけ 4 衣着たとたんに医者の顔となり か 4 b + ットで 0 足 釖 今憎き気持を洗っ 蒡 ケー せ 付 0 用 0 となく は ぞみ 笑顔ふりまき皆 な絵 に妻を偲 る 夫を私 笑 お 11 は 猫 けばこんな長生きし さん 打 初 15 1 孫 顔 天神 - ジを繰 タ臭 ば 片 た 筆 白 に 知 かい 手温 n 已採 らずに 揃う か でカメラ持 iz 生 ic る事を n 梅 通 3: V 甲 1 顔 L 老父の目 n 8 0 2 点 斐 n 朝 て返 香 てい ば V 7 抜 0 か 拾 た 0) よと てよ 知 17 握 が句 て居 Va か 甘 け 義 膳 0 る忘 て居 る 事 た 0 2 n 13 13 すする 舞 7 7 疃 う 3 た 7 年 扇 出 42 飛 私 ル 3 n 0 尼 堺 堺 る 3 傘 数 崎 35 本 岡 県 市 市 市 市 宮 木 岩 桜 杉 本 下 切 沢 Ш か 義 康 あ n か 嗣 h 子 里

白い鳩自由に生きる風に向くガンですと開き直って素直です		言葉じり上げて眦下げてみる	お膳立てできたらいつも現われる	臆病な人かも知れぬやさしい目	正装へ少し靴下たるませて	和歌山市 森	膝小僧抱いて出番待つ補欠	趣味の花男が育てる平和かな	早く寝た分早く起き庭掃除	生き死ににかかわる音で救急車	羽曳野市 麻	手作りの味引き立てる白いⅢ	好きですと書いてはにかむ赤いペン	想い出を手提げに詰めてひとり旅	ふり返る過去をドラマにする涙	兵庫県 森	お茶位入れてやります僕の手で	何を思ってついて来るのか影ぼうし	名刺入れに怪しい影がひそんでる	終点が分からないから走ってる	鳥取県西	ひまあればなどと上手に逃げられるセールスの熱意に負けた荷が一つ
	林										野					脇					Ш	
	英										幽					和					和	
	子					茜					玄					子					子	
真夜中に扉の中をたしかめる淋しさは雨の音きく車椅子	豊中市		ヘルメットとれば可愛い少女です	喜びがつづいて財布かるくなり	川西市 田	単身赴任という赤紙が来てしまう	漫画読み易い眼鏡に買い替える	手を挙げたままロボットの昼休み	河内長野市 十	今日だけは人形でいる角かくし	ワープロの愛がお芝居じみてくる	さよならで帰るに惜しいおぼろ月	兵庫県 東	旅帰り土産が家で待っていた	お菓子を肴に飲んでいる二刀流	両手杖軽い帽子で逢いに行く	尼崎市 古	機械さえスイッチ一つで動くのに	石仏を彫る人の顔ほとけなり	雨に発ち雨で帰った古都巡り	八尾市 #	父の唄涙は見せぬ"お立ち酒』たそがれに女の虹を抱きしめる
	=				田				大				東				吉				椎	
									.11.				1				i					
	宅				中				西				浦				永				尾	
	宅 つえ子				中喜				四文				砥				小 伊三				 公	

黙ってる人を思うて黙ってる 童謡の声よく合いし姉いもうと るからB BからCへと試練の春寝屋川市 宮 崎 菜 月	それぞれの立場で廻る独楽の芯耳よりな話に鈴が鳴り止まず消えてゆく連絡船に孫をのせ 岡山市 中 嶋 千恵子	均衡上香典相談して決める電柱の上の仕事に雪が舞い平均寿命延びて私も先がある 岡山県 池 田 半 仙	風邪気味にくず湯で亡母をなつかしみ冬五輪参加の出来る国に住み 神戸市 高 吉 恭 子 神戸市 高 吉 恭 子	なんとなく嫁った娘の部屋開けて見る 隠居部屋建てて孤独が深くなり ちょっと芽が出るとやれ水やれ肥料 相川市 朝 倉 大 柏	五月晴すみれたんぽぽもう咲いた女の城磨く日課が嬉しくてセットして母は女に化けてくる鳥取県 田 村 きみ子	三面鏡に言いすぎたかと問いかける
高取県 黒 田 くに孝行の不足仏間の膳にこめ露雪の衣がもどかしく	手相でも見てもらおうか春の街地に不利のある薬局で茶をもらう愛嬌のある野良犬で太りすぎ	ひとり居てひとり酒のむたのしさよことしの風邪に参りましたよたまご酒少し抜けてる方がみんなに好かれます	不器用で誤算の靴をいつも穿く 家ぐ娘へ帆柱ゆれる父の舟 敵になり味方にもなる妻の椅子	我が身より子に一途です親の馬鹿孫増えて編棒休む暇もなし あかない仔犬四匹と生きてます	大阪市 亀 井 円そんなはずないと親子で背くらべ猫の子はいりませんかと伝言板悪習も習慣ですと押し切られ	寝屋川市 太 田 藍

老いの足犬が散歩につれて行く 静岡市 久 保 き ぬ	聞き馴れたお世辞次第に腹が立ち教育論妻が意外や強気見せ	黙に気を揉む冬のサル	寝屋川市 井 上 すみれ	小遣いが溜った頃に狙われる	直ぐばれる嘘の心を覗かれる	人の子も我が子も叱る強い母	尼崎市 明 壁 敏 之	仲人はとても素敵な人と言う	里の駅遠廻りする馴れた道	ハイハイと返事ばかりで重い腰	尼崎市 中 澤 向 西	気のきいた猫が主人を出迎える	信号を意識してから渡る犬	一病を後生大事に守ってる	京都市 山 脇 正 之	風化した姑の心を的にして	旅に出る春の陽射しよシャボン玉	春なのに膝関節が痛みます	鳥取県 太 田 幸 枝	の橋	若き日を惜しむ夜長よ古日記淋しがりやで赤いセーター着るくせに
義理でない見舞笑いを提げてくる白内障宣告された日の書斎	古像が移く了幸に降りず	算を秘めた自信の薄	燃えそうな子感の人で距離をおく	静岡市 青 柳 金 吾		うらぶれた男静かに目刺し焼く	封筒の重さに愛の証し込め	岡山県 千 原 理 恵		な子	丁寧にお辞儀をしたら人ちがい	佐賀市 江 口 万亀子		病院で少女の長い髪に会う	ふくれ面しても美人はかわいいな	鳥取県 西 浦 小 鹿		の風	見送って海の彼方の夢を見る	堺市近藤豊子	ネクタイと別れ気儘な無精髭控え目に生きて幸せ見えて来る

謝礼金チャッカリ税金引いてある	聞き流すコツ平穏に老夫婦	ちょっぴりの倖せ下さい福袋	出雲市 金 森 知恵子	財産の一つに妻の社交性	遅いのを伝言板に叱られる	筆置いた満足感へ煙草の輪	寝屋川市 立 床 晴 風	雑草と思えぬ可愛い花をつけ	健康のあかしか友はよく喋り	紙カブト太刀振り廻した日の記憶	京都市 森 川 春 子	長電話女ばかりと限らない	天神さまの御目にとまった受験票	パートの母を追い抜いてゆく受験料	高槻市 津 田 スミ子	年寄りも一寸流行にのってみる	落し穴あるとは知らず近い道	梅干もむかし可憐な花でした	富田林市 大 澤 三四子	そんなこんなで月日が容赦なく過ぎる	シンデレラの話が好きな孫三つ	澄みきれぬ春の水面へ浮かぶ月	岡山県 松 本 元 江	よろめきの姿態へ声が狼狽える
和歌山市	くなる亡母	足音をも一度聞きたい車椅子	知恵袋残してほしい母は逝き	大阪市	久々の休日大事に寝ています	一日の疲れ流して窓の月	恋猫に春の来たのを教えられ	青森県	戦争の傷跡孤児の顔の皺	生きている証しに今日も句をひねる	子の個展しているような部屋の壁	静岡市	蝶ふたつひらひら舞って好きと書く	川下は話しやすいか雑魚ばかり	小雪降る中で強気の梅の花	鳥取県	人並にベストセラーに感心し	暗記した祝辞を先にしゃべられる	神様へどれだけ届く絵馬がある	新潟県	一行詩の中に春が踊ってる	お隣の犬にも話したいうれしい日	合格の声に受話器踊ってる	青森県
丸				吐				福				浅				山				高				波
岩				田				±:				子				根				野				
				純				ŀ				ま				八				不				た
晏				子				+				つゑ				重				Ξ				だお
				88								~								-				45

こだわりが溶けて朝日が温かい	高槻市 芦 田 静 江	片減りの靴は不満をぶちまける	立食の乾盃からが我慢会	スケート場整骨院の案内図	黒石市 相 馬 英 一	体調をくずし宿題気にかかり	球根の眠りをさます春の雨	井戸水の茶の味ほめて庭もほめ	静岡市諏訪志	ペンペン草時の流れを気にしない	地上げ屋を憎み都会が住みにくい	鳶の輪が高くて本音読みとれぬ	倉敷市 田 辺 灸 土	誕生日八十路の坂に生を謝す	啓蟄にサイクリングの足かろし	タバコ吸いつづけて元気八十歳	熊本市 鶴 田 謹 4	隙のない女で誰も寄りつかず	決断がつかずカードに賭けてみる	雪降る夜少女のような女が逝き	奈良市 米 田 恭 日	好きですと告白をしたボールペン	せめて電話ください凍えています	言い訳の脚本を書く終電車
	江				Ξ.				げ				六				爾				昌			
忘れもの		結	各	育																				
のはないかと傘をまた忘れ	久留米市	婚の話飛び込む春の風	各駅で方言拾う旅の窓	育児書と違った子供が育ち出し	山口県	二度の職椅子が固くて肘がない	口喧嘩津軽弁にてまくしたて	戦友会ラバウル小唄でしめくくる	十和田市	修羅いくつ生き抜いて来た静かな死	路地裏の情けに咲いた母子草	目立たないまま春を待つこぼれ種	兵庫県	階段へ同行二人の杖をつく	四国路の旅	耳よりな話があると輪が出来る	元気だけ取得無欲の母の背	和歌山県	サングラスにかくれんぼする杉花粉	陽だまりのつくしに春の息吹する	まる裸の木々にもつぼみの息吹する	和歌山市	キンカンの小粒が相談弾ませる	京舞の誇り椿に覗かせる
いかと傘をまた忘	留米	の話飛び込む春の	で方言拾う旅の	書と違った子供が育ち	П	の職椅子が固くて肘がな	喧嘩津軽弁にてまくした	友会ラバウル小唄でしめくく	和田田	羅いくつ生き抜いて来た静かな	地裏の情けに咲いた母子	立たないまま春を待つこぼれ	庫	段へ同行二人の杖をつ	四国路の旅	よりな話があると輪が出来	気だけ取得無欲の母の	歌山	ングラスにかくれんぼする杉花	だまりのつくしに春の息	裸の木々にもつぼみの息吹す	歌山	ンカンの小粒が相談弾ま	舞の誇り椿に覗か
いかと傘をまた忘	留米市	の話飛び込む春の	で方言拾う旅の	書と違った子供が育ち	口県	の職椅子が固くて肘がな	喧嘩津軽弁にてまくした	友会ラバウル小唄でしめくく	和田市	羅いくつ生き抜いて来た静かな	地裏の情けに咲いた母子	立たないまま春を待つこぼれ	庫県・	段へ同行二人の杖をつ	四国路の旅	よりな話があると輪が出来	気だけ取得無欲の母の	歌山県森	ングラスにかくれんぼする杉花	だまりのつくしに春の息	裸の木々にもつぼみの息吹す	歌山市	ンカンの小粒が相談弾ま	舞の誇り椿に覗か
いかと傘をまた忘	留米市 中	の話飛び込む春の	で方言拾う旅の	書と違った子供が育ち	口県高	の職椅子が固くて肘がな	喧嘩津軽弁にてまくした	友会ラバウル小唄でしめくく	和田市 阿	羅いくつ生き抜いて来た静かな	地裏の情けに咲いた母子	立たないまま春を待つこぼれ	庫県奥	段へ同行二人の杖をつ	四国路の旅	よりな話があると輪が出来	気だけ取得無欲の母の	歌山県	ングラスにかくれんぼする杉花	だまりのつくしに春の息	裸の木々にもつぼみの息吹す	歌山市 前	ンカンの小粒が相談弾ま	舞の誇り椿に覗か

日山男 名 ジ レ	別ノ刑事が認ったノ刑屋	近人形長が秀う	バス停のベンチにかける老夫婦	高槻市 孝 久 彰 一	二杯なら安いみかんのバケツ売り	旅暮れてパッと灯の点く通過駅	伊丹市 猪 原 石 荘	手を叩くあっちの方にエサがある	おとなしい夫が好きなボクシング	米子市 新 正 子	春の花活けて私も春になる	縁あってこの世の客となってます	兵庫県 西 脇 冨 美	父酔うて母との話面白く	なるようになろうとみんな嫁にやる	川西市 野 村 静 雄	花吹雪通りぬけてる無人駅	休耕田アワダチ草と昼寝中	和歌山県 岩 崎 瑞 穂	負けた振りして作戦を練る男	紙風船手に乗るたびに弾み出す	静岡市 三 井 三津子	銀婚式ふしのある手をいとおしむ	遅咲の梅と心が通じ合い	退院の母に陽ざしがやわらかい	
を対すとして 書きる いお & を	対方式 イ 木 でし	米子市 小 村 てパ子	ストレスを溜めております松のコブ	洞窟の深さにランプゆれるのみ	島根県岩田三和	手袋を片方拾うた町の辻	店先で今夜のおかず考える	岡山県 伏 見 すみれ	ロビーだけ使って客の顔でいる	ゴミ箱の底で的から外される	鳥取県 鈴 木 芙 美	青春をびゅんびゅん飛ばすヘルメット	先輩が後片づけまでして帰り	島根県 菅 田 かつ子	出しゃばりがいつもの席に来て座り	逢えそうな気がして一汽車早く乗る	静岡市 西 村 千 代	紙のひなせめて娘のないわが家	末っ子も無口となって反抗期	寝屋川市 内 本 さかえ	ゆっくりとしたが佗しい姑の留守	嫁の知恵素直に借りて夢を追う	寝屋川市 北 岡 波留吉	他愛ない話も二人の友情あり	母さんの子育て通りにやってます	

イメージチェンジ美容院を浮気する海外旅行してる娘の留守居する	放方市 森 本 節 子	無駄な皺羅漢の顔に見当らぬ	母さんの笑顔で朝が明けてくる	鳥取県 伊 吹 富 恵	停年で単身赴任も済みました	気にとめて呉れてる人が居てうれし	島根県 小田川 智重子	息子から届いた本のバラエティ	ポケットの底で一円ほっとかれ	吹田市 山 田 里 子	胃カメラの検査で癌ときめている	出さぬのに便り待ってる筆不精	奈良県 和 田 萬 里	猫踏んだばかり弾いてる独りっ子	内緒の話聞きに来る放送局	大阪市 神 保 拓 生	煩悩へ月もぼんやりしてるだけ	新しい帽子風切る音がする	鳥取県 山 田 草 人	疑問氷解愛の証しが点いてくる	人間の脆さを思う絵馬の数	佐賀市 古 川 一 徳	方言で木箱のリンゴ売って去に
風邪の神乾布摩擦で追い出され	大役を果した後に来る虚脱	唐津市	講演が終る頃来て拍手する	グループと別れた歌手が知る落ち目	佐賀県	土井さんの明眸ほどに党冴えず	鬱憤は海に向いて吼えて断つ	泉南市	放たれて昔にかえるクラス会	エプロンにかくし裾分けする近所	島根県	不況とは言えぬバーゲンの人だかり	空想の自由は不倫の恋もする	橿原市	幸せに馴れて蓋とる玉手箱	雑用のすき間をつなぐ毛糸玉	堺市	ジーパンの新婚ハワイから帰り	晩の街は大股で歩くべし	寝屋川市	自堕落にあくびしている定年後	法螺吹いて話題を少し盛り上げる	岸和田市
木		野			石			坂			小皿			西			Ш			豊			Ξ
下		田			田			根			田川			本			本			福			輪
芙		旭			源			流			昭			保			*			路			通

物干場鼻唄も出る冬日和 「新岡市」	ij i	す	静岡市 柳	沈丁花ようやく蕾匂いそめ	春の雪蜜柑の皮を蹴ってみる	唐津市 福	誰が為にするか化粧の念の入り	夫婦仲壊す他人の減らず口	唐津市 入	生涯の伴侶は顔で決められぬ	道草が過ぎると亀に先越され	岡山県 土	カルガリーの凍てる空気を裂く戦果	辰の春新酒に燃える杜氏の汗	泉佐野市 真	夢だからいつもやさしい亡母の声	喜寿過ぎて子離れ出来ぬ母が逝き	奈良県 米	裸体画にしみじみ触れた指の幸	押入れにみんな入らぬ不意の客	静岡市 中	喜びと悲しみの孤児祖国去る	後髪ひかれ泣き泣き孤児は去る
71			沢			島			江			一居			· 崎			田田			川		
喜			た			紀			喜久			ひで			浪速			芳			み		
4	4		ま			_			夫			0			子			子			つ		
小さい春見つけたすみれ石垣にこうこうと名の瀬音の春を呼ふ	う真旨のまごと	知らぬ間に口答えする子に育ち	単純に答えてくれる自動ドア	静岡市	旅の宿枕変って寝つかれず	淋しいよ喧嘩相手も無い寡婦	静岡市	生きている証しのように課税され	コマーシャル宣伝ほどに効きめなし	静岡市	年金が合格祝に行きました	玄関で散らばる靴の温かさ	岡山県	酒が好きカラオケが好きあんた好き	親しさを深めるためにカモになる	吹田市	馬耳東風今日も矢張り午前様	めし粒がついているのも気付かずに	豊中市	春めくや畑に上着置き忘れ	冷凍の鯛一匹にも味の自負	岡山県	来年を信じ指切りして別れ
	児			Ξ			大			丹			富			西			玉			福	
	玉			浦			石			羽			坂			岡			井			原	
	幸			つ			た			定			志						房			悦	
	子			ħ			き			次			重			豊			子			子	

治・にく 一ラ くれ日	日留りこくつろぐ且母の爪を切る夕焼の縄電車には家の孫	岡山県 平 田 たけよ	ときどきは曲った針にだまされる	お隣と肩を張らないお付き合い	米子市 服 部 朗 子	旗はまだ振って見せるぞ老いの意気	鶯の声聞かせたい鉢の梅	岡山県 杉 本 伊久栄	砂をかむ思いできょうもニュース聴く	まっとうに生きててしたい銭儲け	八尾市 片 上 英 一	春闘を他人事だと屋台曳く	旅馴れはチョットそこまでアフリカへ	藤井寺市 菊 地 繁 男	また同じ話はじめる老いの坂	想い出に夢を咲かせて八十路の坂	呉 市 岡 田 寿美礼	通院がたのしみという女房どの	ビーフカレーここは名代の自由軒	大阪市 堀 口 欣 一	風音が止むのを泣く子待っている	老けこまぬように揃いの派手を着る	島根県加本義良
3	この声を壊さぬように受話器置く	自己陶酔した句に出合うクエッション	出雲市 岸 桂 子	御大の英語は島根の訛あり	海渡る列車ごらんよお父さん	奈良市 井 上 大	鏡見て見て欲しくなる晴姿	人生の曲がり角には厄が待ち	東大阪市 大 平 太一郎	恋人を終バスで待つ春一番	紙ひなが上手に出来て一人笑み	富田林市 加 藤 ミツエ	寒そうで寒くない子の膝小僧	ゴキブリが来たよに煙草嫌われる	大阪市 山 北 三三三	中流の意識で捨てるゴミの山	ヘソくりを出して払いの足しにする	出雲市 高 橋 きよし	旅先でチンチン電車のうれしさよ	サングラスとれば可愛い娘じゃないか	大阪市 桝 本 蕗 児	足棒にして勧誘に女来る	ぶきっちょの男が朝の葱きざむ

表札を覗けば背すじしゃんとする 実婦という別名があり春の雪 兵庫県 倉 垣 恵 美二人静世にも豪華な袖しぼり	核という玩具与えて試す神 人尾市 向 井 しづ子知恵の輪を磨けと鬼の伝言板	癬でお年齢を聞きたがる 鳥取市 西 村 黙戻ると弱い疵がある	鳥取市 武 田 帆 雀あばら家へ健康器具のおきどころ - 屋切りつけたる朝のさわやかさ - 島根県 松 本 聖 子	流れ矢の刺さらぬ森の中に住む 鼻る日に今日のいくさの鍬にぎる 鳥取県 久 野 野 草	晒し者にする気音痴に来るマイク 制服を身に付け客に逆らえず 愛媛県 石 手 武	害虫を殺し尽して恙なし 豊中市 小 林 一 夫	トンネルと橋が追い出す連絡船
宿題をどさっと出されいやになる (小たん生日孫に囲まれおばあちゃん 大阪市 福 西 範ますらおの体をちょっとさわったよ	合格の知らせまだかと梅が言う にいるしさは小ビンにつめて川へ流す (1)	ニアの部 尼崎市 新 井 朋	マラソンにかげろう燃ゆる琵琶湖畔もどかしく口下手悔いる長話 豊中市 額 田 明赤い実を鳥が来訪食べ尽す	連休を独り机に反抗期 大和郡山市 渡 部 ト新緑に乳離れした仔犬来る	寒稽古厳しさゆるむ梅一輪 奈良県 田 中 紀童謡の文句はしっかり覚えてる	よきのとう春の淡雪つめたかろ 濡れ縁で猫の親子の日向ばこ	島根県今川三
小四子 生	子	子	吉	キワ	紀 美 代	子	三津江

秀句鑑賞

前月号から一

江津 柳 廳

ハナハトマメマス同窓の友が減り

スットントンで終る人生なら楽しかろ

歌ったものだった。無欲で生きたいものですで通わせぬ、スットントン、スットントンと更嫌とは胴欲な(中略)、言えばスットントンとので通わせな、ヘスットントン・スットントンで通わせて、今私の子供の頃、スットントン節が流行した。

テネシーワルツ亡夫もチエミも遠くなる

も、主人も、遠い昔の人になって終った。好きで、いつも口ずさんでいた。そのチエミ好きで、いつも口ずさんでいた。そのチエミーでは大いでは、一番では大いでは、一番では、一番では、一番では、一番では、一番では、

ケセラセラそうでなければ出来ぬ恋

た。 こうできるさい。 おいましているようになるさと、深く考える必要ない。 なるようになるさと、深く考える必要ない。 ロー・リー・デート

靴すべりひと言今夜帰らない

高橋千万子朝食も無口、カバンを受け取ってウンと言朝食も無口、カバンを受け取ってウンと言明なる方に。それを奥さんは、黙って頭を下げて、らん。それを奥さんは、黙って頭を下げて、らん。それを奥さんは、黙って頭を下げて、らん。それを奥さんは、黙って頭を下げて、らん。それを奥さんは、黙って頭を下げて、らん。それを奥さんは、黙っているだろう。

言い訳をしない男を信じよう

平仮名の小言が強く胸を打ち

おやじが「馬鹿野郎」と叱りつけるより、春 城 武庫坊

祖母が「アラアラ、オベベがベトベトネ」とはいけませんよと、論されるほうが骨身にこはいけませんよと、論されるほうが骨身にこたえる。

生きていく音から生きる欲もらう

いないでしょう。静かに世間の生きる息は生れないでしょう。静かに世間の生きる息は生れないでしょう。静かに世間の生きる息は生れないでしょう。

席決めるのも幹事の腕の見せどころ

東席の座る場所にも幹事は気を配る。 あいように心掛ける。しんどい事ですえ。 はまりに心掛ける。しんどい事ですえ。 は気を配る。あの

はうに心掛ける。しんどい事ですえ。 耳打ちに察しています名幹事 まれは酒ぐせが悪いからとか、あれとあれ は気が合わないから、別々に席を取った方が とか、幹事にそっと耳打ちしてくれる人がい とか、ウンウン心得ているよ、わかっている るが、ウンウン心得ているよ、わかっている と、さすが名幹事

道順を正確に行く梯子酒

原田メイシュン 原田メイシュン 原田メイシュン 原田メイシュン 原田 かと、奥さんに聞く有様。

橘 高 風 選

おいしいね季節失くした味をほめ 記念日を失くし軍歌も風呂の中 喜寿喜寿とまさか点字で書こうとは 江 īF. 朗

あ

過去を捲るどの頁にも象がいる 哀しみの家に浮輪をひとつおく

島根県江

原

とみお

大丈夫天道さまは照っている

宵

明

仏さんの顔で居睡る花筵 少年の頃から既に迷路好き 今治市 原

外人の驚き鯛の目をすする

明日の朝も小鳥が鳴いてくれますよう 米子市 木 Ŧ 代

朝までを壺の椿はどう過ごす

赤いポストは私をせかしてばかりいる 鉛筆でトンネルを掘る長い夜 米子市 小 村 てい子

おさいせん神様までは届かない

一人から一匹になる銭の音

岡山県

泰

子

旅人へ夕日は海の音も消し 言い過ぎた自分を洗う皿洗う 青森市

のんのんと降る雪泊る羽目となる 甲

大雪の予報外れぬ僧らしさ

移り香をひたすら陳謝するばかり 代記放恣な酒もありと書く

いつまでも生きるつもりで縫い直し 河内長野市 村

の母がこんなに弱く嫁の前

その先が不透明靴の紐締める ねじ伏せた思いが首を擡げだし

青い鳥探す紙ヒコーキ飛ばす 尼崎市

釘を打つ藁人形が血を流す 米子市 林

パイプオルガンに風の道がある 人と別れて水の流れが速くなる

もつ二度と踏まぬ土俵に塩を撒き ふぐを食う男の顔に隙がある 箕面市

髭を剃る事もあるまい田寄り合い 葱坊主お前も布施がほしそうな

岡山県

居

耕

花

むらさきにとても優しいこぬか雨 岡山県 松

ポッと炎のともる気がする温かさ 本

元

江

有

朗

緋毛氈の小さな塵を拾いけり

I. 藤

西

いわる

吉

弘前市 波多野 五楽庵

喜 代

和歌山市 桜 # Ŧ 秀

城 武庫坊

ピエロだということを忘れたピエロ

和歌山市

足が地になかなかつかぬ春の夢

心して嫌いになろう裏切ろう

大阪市

部

荒 介

ジャンプ傘この春雨が分からんの 空びんになればラベルも他愛なし

豊中市 辻

111

慶

江 清 芳

頬杖を解いて出ましょう春の街

立読みの背のあたりに矢がささる

唐津市 H 虹

汀

この駻馬傘寿の鞭じゃ馭しかねる 微温湯のような女房で永持ちし

生徒から教えて貰う新知識 和泉市 井 やすお

ポスターになって黒子が目立つ美女

城 君 子

58

夫婦の部屋のサンソが薄くなっている 植えるとこないのに植木貰てくる トンネルを南へぬける雪柳 老猫に小花もようの皿おろす 温い雨今日三月になりました 昇る日の音が聞える里の朝 七十の手習捨てたものでなし 寝屋川市 大阪市 堀

度

良

II

出不精にあっけらかんと春は逝く 智

子.

ずぶ濡れになって向うの空を見る 米子市 戸 H 鶴

幸

さと美 子.

人間の脱ざしみじみ殊と権	(月) (1) 高田林市 藤 田 泰 子	子	吹田市 園 田 文 子	花屋から笑い転げたさくら草	尼崎市 春 城 年 代	ぶすぶすとたこ焼を刺す叱った日	門真市 土 屋 百合子	沈む陽へ鱗一枚炎え残る	北海道 府栄野 香 京	春風に帽子は乗って遙か彼方	米子市 川 上 より子	ああ老いたるかな自分に甘すぎる	大阪市 稲 本 凡 子	暫くは静かな酒を花の下	川西市 野 村 静 雄	塀ぎわに残雪があるさようなら	伊丹市 猪 原 石 荘	啓蟄の日を心ブラの二人連れ	大阪市島路太郎	競走馬私の姿かも知れぬ	大阪市 神夏磯 典 子	黒人の疾走終る指輪かな	町田市竹内紫錆	合戦の準備をしよう鉛筆よ	和歌山市 神 平 狂 虎	本心を小さい紙にちさく書き	岡山県山本玉恵	戦友会下士官はまだ働きぬ	松原市 小 池 しげお	みな何かなやみあるらし十七字
唐津市 山 口 高 明	i i	唐津市 久 保 正 敏	筍もヨイショと春を持ち上げて	島根県堀江芳子	あら不思議赤い花へは赤い雨	大洲市 米 澤 暁 明	故あって手順が狂う春疾風	羽曳野市 吉 川 寿 美	かげろうが伸びてわたしをそそのかす	鳥取市 広 本 文 子	紅梅に囲まれ白梅狐を守る	枚方市 宮 川 珠 笑	晩酌へ齢は遂に亡父を超え	熊本県高野宵草	還暦はシーソーゲームの支点かも	兵庫県 脇 田 米 朝	還暦でプレーバックだ竜の春	唐津市 筒 井 朴 竜	麻酔から覚めぬ夫との口づけよ	鳥取県さえきやえ	都市砂漠に生きて轍が残らない	海南市 三 宅 保	花屋の花に深い情けは見付からぬ	名古屋市 越 村 枯 梢	ピストルが重そう春のおまわりさん	鳥取県 新 家 完 司	何時からか妻の手紙の裏を見ず	兵庫県 樫 谷 寿 馬	味噌汁の味が可もなし不可もなし	
しゃしゃり出るわたしを許せおじぎ草		プライドを百円ライターで燃やされる	和歌山市 古久保 和 子	蘊蓄を傾けて飲む雑学士	八尾市片上英一	本物の花で潤う春の部屋	愛媛県 石 手 武	子供等の夢に夫婦でつける色	和歌山市 牛 尾 緑 良	落葉焚くひとりの憩いのひとときを	岡山県 清 水 悠貴女	日にいちど姉妹を思う年となり	寝屋川市 平 松 かすみ	ワープロに愛のことばは打たせない	和歌山県 染 道 佳 明	澄んだ目で物売り淋し露天商	鳥取県 西浦 小 鹿	吊り橋が長くて人間恐怖症	鳥取市 小 谷 美っ千	わたくしが死ぬのを待っているおんな	鳥取県 土 橋 螢	迷うのも幸せだった乙女の日	大阪市 亀 井 円 女	春の虹土筆で描けば楽しかろ	大阪市 北 勝 美		兵庫県 東 浦 砥 代	紙漉きの里であねさま人形買う	守口市 森川 まさお	笑い袋を持って砂丘へ来てしまう

		(V)	ウェイトレスはミニ珈琲がうまい	稔	元	福	藤井寺市
午育1時でラカ♪	晏	岩	和歌山市			L	決心がついたら来いと温かし
5 7 65		Î		光子	江	堀	寝屋川市
Ę		北	大阪市 山			1	冒険をする子しない子私の子
ジオセンター。川柳係		1	山の湯でまぐろの刺身海老フライ	柳右子	尾	松	大阪市
NHK大阪放送局 ″ふ	英子	本	和歌山市 福			7	新しい空気を吸って春の椅子
投句先 大阪市東区馬場町3―43			父上の語録忘れず父の歳	明	田	吉	兵庫県
(ハガキに三句以内)	優	村	羽曳野市 中		まで	少くす	歯医者さんもといた会社の近くまで
締切 5月15日			沈丁花薫ればかなし自我の像	正雄	井	藤	茨木市
- Friday	路子	福	寝屋川市 豊				豪傑の医者案外に早逝す
Ē,		5	パンのみに生くるにあらぬ雛飾る	昭治	田	島	八戸市
NHK川柳募集	あやめ	野	寝屋川市 岸			な	金婚式忘れていたがまだかいな
		(嚙み合わぬままに歯車さびていく	抜智	Щ	森	広島県
	三千子	П	和歌山市 山			,	キッチンと変わり男も皿洗う
橘高薫風宛(ハガキに3句)			仏壇のおこし大阪からの客	みつ子	田	奥	西宮市
投句先 一50 豊中市中桜塚三丁目13—15	明水	Ŀ.	西条市 片			田	さきがけて咲く一輪へ春の雷
*			ゆらゆらと古井戸のぼる影法師	正子	藤	後	和歌山市
風花で終る今年の冬の空	瑞枝		鳥取県 林			T	春の声もつれた糸もほぐれ出し
声屋市 竹 中 綾 珠		15	税制はくもりガラスを拭くように	妙子	田	Ш	大阪市
	大	Ŀ	奈良市 井				春夫の忌岩波文庫古びたり
羽曳野市 麻 野 幽 玄			宝石も子宝も同じ持ち重り	正坊	中	田	豊中市
良き嫁は俺と息子の仲に居る	ちょ	本	唐津市 浜				銀紙の中で思い出香を放つ
大阪市 大 福 留 吉		ŋ	尺取虫の歩幅が欲しいカタツムリ	柳子	端	Щ	岡山市
母さんの匂いを知らぬ哺乳ビン	富恵	吹	鳥取県 伊				顛末は知る人ぞ知る今静か
佐賀市 石 田 源 吉			お水取り善男善女の国訛り	理恵	原	千	岡山県
	美緒	形	富田林市 田			赤十	夫病人で姉が気になる血の絆
有田市 松 井 かなめ			拾われて又捨てられた粗大ゴミ	寛子	村	北	茨木市
ŋ	あか里	沢	堺市 桜				わらべ唄弾み影法師も弾む
富田林市 片 岡 智恵子		63	彼のむすめ鼻輪貫しているらしい	弧秀	美	渥	静岡市
疵口の一つと花の下あるく	隆風		鳥取県 乾		0	れる	沈丁にときめくものを伝染される
**子市 光 井 玲 子			執念は持つべきものよ残り福	白汀	砂	小	島根県

暴集

者 森中恵美子

水 抄

前月号から

まさに春風駘蕩、巻頭吟の秀句。 れてきました。女の春は楽しいものですね。 ひきかえすにはあまりに遠い道しるべ 故郷は遠くにありて思うもの、よい噂をつ 故郷の噂を連れて春の風 奈美子

在の幸福の道しるべ。自省の一句。 美人にはめっぽう弱い生れつき 過ぎ去った青春の訣別。歓喜の思い出は現

酒と美人には男はみんな弱い。男に好かれ

相槌がおそくなると嫌われる。男と女はちょ っと相槌の間があるのかも知れない る男は女も好きになるそうな。 相槌を打って共犯者にされる 笠嶋恵美子 人間関係に妥協の相槌は必要なことですね。

陽の当る場所で居眠りしておこう

美しい居眠りをしてください。働きすぎない 太陽のふところで眠ったら愉快ですね

> が仏前にも供えられる。せめて春の花を。 ように。 追う影法師、悲しくない美しい影絵です。 二月四日立春から八十八夜五月一日まで春 意地張った肩が悲しい影法師 千原 仏前に春を知らせる花を買う 堀端 女の意地の肩パット、春のファッションを 四季の花の区別がつかない市場競争 理恵

こされますよ。 わせにお休みください。そのうち奥さんが起 テレビの音響を子守唄に春眠の夢、 テレビ又つけっ放しの高鼾 北川 おしあ 一進

踏まれた草が春を覚えていてくれた

明日のふたりのエネルギーを計算してみよう。 時もある。絶えず栄養補給を怠らないように。 すね。まさに萌えてくる緑をとらえた実感句。 寺町の風にときどき会いに行く ガス欠ではないのにエンジンがかからない ガス欠にならぬ程度の夫婦仲 鈴木 芙美 俳句歳時記に「踏青」「青き踏む」がありま

再発見ではないと思う。 を小さく光る指輪に焦点をしぼった句。恋の 散策は人生の嗜みだろう。やがてお寺の門を くぐり煩悩を滅却して悟りの境地に入らんか。 この世の地獄から抜けだして寺町あたりの 春愁はほのかな恋の誘いへ(螢)純粋な恋 春雷に小さく光るくすり指 古川 吉永伊三郎

> リ勉」しています。「北斗七星見える」着想に の百姓の姿。二十一世紀を狙う彼女はいま「ガ 釘を打つ音のまんまのお父さん

相談をされると決って金が要る カン、カンカンカンかな、父親観。

したたかに生きた同士でお茶を飲み 金で済むことなら相談にのってあげて下さい。

の人が確か来る。湯がわいたかな。 いま生かされていることを大事にしましょう。 茶花の佗助が一輪、思いおもわれているあ 佗助が開くあの人がよこぎる 三宅つえ子 憎まれ児世に憚る。私も特攻の生き残り。

正直に言うてやっぱり叱られる

直に生きたいものです。 正直者は馬鹿をみる。でも、「やっぱり」正

、間らしくなる。悲しいことは忘れましょう。 嬉しくて悲しくて女ですもの 玉井 房子 人生流転、悲喜交々、その回転数が多いほど

お早ようと言えぬしこりが未だ残り

りしています。早く言ったほうが勝ち。 父と母のうしろ姿をみて育つたくましさ。 「しこり」が残っていると思ったときは仲直 父と母ケンカの後の仲のよさ 二宮

ほんとうに心におにがいるのかな

人を憎むとき腹がたつとき顔を出しますね。

朝に月を夕に星をいただく。忙しい農繁期 校門を出ると北斗七星見える 田村 千絵



ガ ス漏れ器つけて死ぬ気のさらに無し が恥かしい。つらくても死ぬほどの事もなく、 今となっては、 死ぬの生きるのと呼吸を乱していた 西宮 林 は 0 絵

にわたしを遠くとおく置 2 で正直なこと。抒情に流れやすい女性句の中では目立 ほどの悪い日々でないと。はつ絵さんのまあしたたか でもないのに不注意のための事故でさよならなどする てさわやかで、実に気散じな詠みかたでした。 取 広本

のじぶん。それを手元に引きよせて句にしたとて、なばんの姿勢ではないでしょうか。甘えたがる私、弱虫 の中の位置に存在する私を、じぶんの目で、しっかり ほどのものが得られましょう。風景の中に置き、全 この自分を遠い距離につきはなすことが川柳のいち

と見て書こうと。懸命はいのちがけとも読めませんか。

恋人

のまねごとしてよ影法

出会いだけ信じる春がやって来る

信号はとつぜん赤に 米をとぐときは明日し 木に桃の花 ソー る人 0 り胸 かけらを一つ持っ 咲く に 小 つねならむ ならぬ筈 3 か考えぬ 10 てい る 羽曳野 和歌山 大阪 米子 大阪 本 JI 吉 坂 西 間 Ŀ 部 出 JII 満津子 より子 紀久子 寿美 楓楽

水くれ

藁沓にまだまだ遠い

ない もうー

種

0

赤

い糸

のゆくえを聞きたが

る

大阪 田

鍛 藤

原

T

林

H

泰子

かくれんぼ

ほそぼそと幸せ食べて生きるべく

春うらら赤い

ポストにまっしぐら

おぼろげに影の姿が見えてくる

和歌山 米子

春のバトンを貰う

ひたすら走ら

ねば

風に自縄自縛のほぐれゆく

逆立ちしてみれば人生甘ったれ 何事もなかったように妥協する

大田

みさと

まない毬をみつけて好きになる

七色の 交差点 今日も 磨き続けてビ どの また試 しんなが 主張に 行 錯 玉 誤 も芯があ 渡るから 0) # 鍋焦が 界 私 1

た日

のテニ

ス

I 駄

0

た

松原

が

時に

b

た

を コ

B トは広

K

す

3 か

思い どうにでも 十二時を打っても変りない 違 バ ルが静 V 0 剝 割符だいじに持ってい かにお茶を飲 けるキウイをてのひらに んでい 私 3 3

> 佐賀 歌山

寺

中三枝子 川

V くの

寝屋川

稲 流 政 鈴 佐

葉

冬葉

広島

奈美子

岡 木 藤

日枝子

松江 竹内寿美子 堀

雛さんに少しやきもち焼いてあげ 3 名古屋 藤井 寺沢 みど里

高子

明日 振り出しに起って自信の矢をはじく 決れることになんの手間ひまなど要ろう 可能性 からは 18 ーセントに押し もう入れない 父の傘 一黙る 和歌山 和泉

和歌山 高機 松原 河瀬

八尾 宮西

和歌山 米子 金山 木本 夕子 朱夏

田辺 染道 城 年代 佳明

どうしてここでくしゃみでる 和歌山 米子 福 小 森 士 村 7 トキ 10

和 歌山 田 田 中 みつ子

62

桜井 中川

干秀

歩道 お人好 花 n 向き変えてあ 大切な人生 0 お U マンションの節 上暮 2 せない 2 ŋ 0 船 に 0 空 憶とぎれ んげ草みつけて下りる縄 か n 替えた 冬の 中 か 咲きの 0 橋 なれ 以 す WD ぎて まり ひとつお は らしランチタイムは鳩と 後 b に やさし しの家系どの子もうどん とけ Ø 風 くえを想う風 b ば消える夢でもたのしくて は一人では たし せ 2 大手を振って歩こうよ たしが h 夢 次 花ことさら は だから苦 め 少 た辺りに浮 より小 な Ĺ が 無口 なたの愛を取りもどす は て J' 0 10 0 電役を自負してい 花 風に はぐ 過 素顔 きっつ 4 青まで待 残 かい ひょ 0 L K 去 咲い て皿 を栽 恩 に n 酔 人 て さな今 らう傘の うて に気付 12 てもと か 0 10 火 たありがとう 洗う 30 音 と顔を出 K 0 2 10 か 電 なる C P 7 62 白 n かい かな とりる 6 好 0 Va 車 花 欲 か る + 3

寝屋川 藤井寺 羽曳 藤井寺 宝塚 鳥取 根 Ш 取 嶋村美 澤田 福田 平松 青戸 松本 高 丸 高 杉 山 田 崎 水 村 坂 よ 満洲 か きみ 津 貴 千 L 昭

> 老 恋 長

10

0 噂 眼 円

殼

お脱ぎよ外

で また愉

遊

でぼう

ぎる

春

1

誇

りを縛

6

n

3

0 10 団

事

実無根

B

L

てる 久子

で見

た 0)

10

が寿命

持 お

0

か

富 和 田 貝 歌山 圖 取 Ш 林 さえ 池田 千 後 岡 藤 原 智 寿 き 美子 恵子 やえ 理恵 子 春 步 津

母

さん

0 ず

投

げ

"

ブテ

は

り 暖

ひか

感

春

0 3

電

話

かい

鳴 10

> UF ba

1 ラ

11

ねえ今年も

咲

た庭の

15

10 1

1

人

0 H は

道

な

n 10

終点 嫁上 少うし 神様は おそす

走りつ もう

づ

る白

道 L

位

逆

転

む

ず

か

13

褪 我

せ 慢

た紙

人

形

に紅

を差 てる

す

をさせて忘

n

美代子 すみ 子 子 子 女

出票 石 倉 芙 佐子

和

歌

門真

土

百

合

原

通 C 0 T > n 9 n かい 1 型 たと 辛 > 娘 済 思 8 40 0) ば 人 なん 母 B T た U す だ 2 思

12

歌

東

to ない か 思 n 10 は 10 天と地 な声で早 E 春賦か でもない二人 す

桜沢

あ あ

朗 か P

子 n 野

昔

き

昔

言

華胸

K

6 和 歌 北野 内芝登志代 田 中 部

河 内長 和 岡 歌 Ш 取 Ш 植村 宮武 高 Ш 吹 橋 坪 中 本 ま + ワ子 喜代 0 富 万 恵 ta 子 恵 女

富 田 \mathbb{H} 石 垣

投句 ガキに Ŧ 雑 詠 3 米子市 句 毎 月 花 園 10 町 H 木 14 d 切

T 代

大 小 春 矢 砂 城 + 年 白

汀

代

郎

橘 高 薫 風

前月号から

結ばれた二人の間柄が偲ばれる。 のだと感じた。年代さんの発言の下五につい 表現されている。馬と騎手とは緊密さにおい を例にとったのが作者の手腕で、馬上人なく が生かされたので、心にしみる作品になった 人下馬を意識せぬほどの一体感は、たしかに それ以上のものがないと思う一般の概念 馬と騎手と

花

か」と持って廻ったような表現は不要で「ま は思うが、それなら「輪廻とや」「生まれる を読み取るものだという勉強をさせて頂いた。 ら考えるなんて力がないと足の竦む思いだっ 私は川柳を知ったのだから。それがこのたび とき胸がどきどきするのを覚えた。その頃に みの浅さを思い知った。馬と騎手から夫婦愛 た。果して先輩方のご意見に接し、 私に廻って来て、人様の句をいろんな角度か **白汀** お二方の説がおおむね妥当な線だと 年代 57年度の句評リレーを初めて読んだ 自分の読

温かい夫婦仲、絆という目に見えぬ強い糸で

十郎さんが触れておられるように、

や、せめて馬場を巡り巡る馬と騎手とに生れ が他の生を継いでゆく。それが(りんね)と

という失望的だが温い夫婦愛をも感じ

批判したところに新鮮なモチーフがある。 とに」のとにが曲者で釈迦の仮説をするどくであろうと、簡単明快な表現だが「馬と騎手 も。だがそうなってもそれが輪廻というもの

十郎 生れ変わり死に変わりしながら霊魂

くいのですが。

白汀 次の生では馬と騎手とが逆転するか

突っ込んだご批判を伺いたい。

れるかが少し表現不足でしょうか。

わかりに

「輪廻とや」が重いので、下五の生 居 耕 輪廻とや馬と騎手とに生まれるか

に押しつける気は毛頭無い。仏教その他で安 があるので、宗教に対する私の考え方を他人 ろで一言付記しておかねば誤解を招くおそれ する懐疑と批判をこの作品の本音と受けとる。 だから「輪廻とや」「生まれるか」に仏教に対 昧な者を懷柔する最良の便法だったと考える。 事ができない。すくなくともこの説は支配者 出す気はないが、「霊魂不滅」は仏教の根底を り鮮明ではなかろうか。今更、宗教論を持ち 心立命の境地を得て居られる方は幸せだと思 前衛作品にはこういう風に悩まされる。とこ が被支配者を御する都合のよい説で、無知蒙 なす仮説(私は科学的証明のないものはすべ たの世も馬と騎手とに生まれたし」の方がよ て仮説と断定する)から出た「輪廻」を信ずる

騎手は、現世の夫婦と同義語、 た。だから、耕花さんにとって、来世の馬と あったら妻よまた逢おう」の句を句碑にされ 愛から架空へ架空から愛へ、素晴しい句だ。 れるか、とした所に善人の呟きを感じさせる。 輪廻「とや」とした所に軽い気持が伺え、生 を本音と受取る、と力説されている。 に尽きると思う。土居耕花さんは「次の世が 十郎 薫風 十郎氏の「善人の呟き」という批評 白汀さんは仏教に対する懐疑と批 同じ次元にあ

64

風花や想い出ごっこしています

中 原 みさ子

白汀 もちろん「風花と」ですが、それでいところですが、少し気になります。「風花いところですが、少し気になります。「風花と」ではいけないでしょうか。

ニュアンスが変ってくるようですね。私は、ニュアンスが変ってくるようですね。 私ば、の方がより深い味があるように思う。での楽しい一日、それは風花の舞う日でありでの楽しい一日、それは風花の舞う日であり、 かまり適切だと思う。

心されたであろう。「や」と「と」とでは少しはあまりにも散文的で、何んとかしょうと苦

年代 この作者を存じ上げているので「想

さわしくとても好ましいと思います。い出ごっこ」の句は若くてやさしい作者にふ

→郎 風花や、風花と、何回も読んだが、
 →中郎 風花や、風花と、にすると一転して成功しているが、風花と、にすると一転して成功しているが、風花と、にするとの記さい。
 ★風 「風花や」なが大きな変わりはない。にしても見解の相違だが大きな変わりはない。にしても見解の相違だが大きな変わりはない。
 ★園 「風花と」なら十郎氏の発言にもある、例えば、故郷での楽しい一日の回想と受る、例えば、故郷での楽しい一日の回想と受る、例えば、故郷での楽しい一日の回想とで見ながら、恋人同士で想い出ごっこをしてませい。

春一番誰かの絵馬の落ちる音

て春一番と対照的。これでは救いがない。 たい。 絵馬が落ちるが、不合格を暗示していたい。 絵馬が落ちるが、不合格を暗示していた。 を一番と絵馬だから合格祈願の絵馬

とも作者にとってかかわりのない音だ。 十郎 淋しく面白い句だ。入学、入社、試験のこの時季、神社の境内には合格祈願の絵験のこの時季、神社の境内には合格祈願の絵験の上の突き放したような文体では。

★風 絵馬はさまざまの願いを込めて神様 本でいたところにある。

年代 自分にわからないのを表現不足だと 年代 自分にわからないのだが、まだ「誰か 一イントを置いたのなら「誰かの」でよいので | 65 にこだわっている。絵馬が落ちた音にポ | 65 にしょうか。

白汀 突き放したような構成で、冷たいと いやりがこめられているようにもとれて、ちいやりがこめられているようにもとれて、ち書いたが、あらためて「落ちる音」を吟味し書いたが、あらためて「落ちる音」を吟味し

十郎 この句、想像の音ではあるが見事な出来映えである。強風を春一番とした所に受出来映えである。強風を春一番とした所に受出来映えである。強風を春一番とした所に受出を表わし、落ちる音、とした下五に合格

験不首尾の大雪崩の音を思わせる。「誰かの」 薫風 諧謔の味。小さな絵馬の音から、試

新しい顔で出てくる陽が好きだ

田中亜

年代 「新しい顔で出てくる」がよい見つ はだと思う。下五の、陽が好きだはもっと思いの深い言葉がいるのではないでしょうか。 はつ 特に海から出てくる太陽は水も滴るような美しい顔だが、どこかで読んだことのような美しい顔だが、どこかで読んだことのような美しい顔だが、どこかで読んだことのあるような気がする句想を、ここまで昇華された力量は相当なものだと思う。ところで座れた力量は相当なものだと思う。ところで座れた力量は相当なものだと思う。ところで座れた力量は相当なものだと思う。というによりではないではないであります。

十郎 もぎたての夏みかんのような美しい十郎 もぎたての夏みかんのような楽に現場の出であろう。新しい顔、という飛躍はど

★風 日の出の輝やかしい光を「新しい顔」

白汀 下五を「陽に見惚れ」とやってみるもっと重いものをと考えてしまうのですが。ない点で敬服しています。だから余計下五にない点で敬服しています。だから余計下五にわれたのを学びたいと思う。私のとても出来われたのを学びたいと思う。

とけっこういけそうだがこれは差し出がましたけっこういけそうだがこれは差し合ってために時と所があればお会いして話し合ってために時と所があればお会いして話し合ってために時と所があればお会いして話し合ってためにいる。好きだ、というとどめから赤い太陽である。好きだ、というとどめから赤い太陽である。好きだ、というとどめから赤い太陽である。好きだ、というとどめから赤い大陽である。好きだ、というとがあればおきした一日が始まることだろう。

薫風 児童画の趣から、白汀氏の発言の下 を感じます。

かろうか。

徳利を中に右利き左利き

井上森生

年代 お酒のことなら何でもと気負ったの ですが、右利き左利きとは両刀遣いのことで しょうか。

白汀 仲の良い吞み仲間、気のおけぬ二人 **白汀** 仲の良い吞み仲間、気のおけぬ二人 す笑いがこみ上げる。これを見ている作者の ず笑いがこみ上げる。これを見ている作者の うれしそうな目が感じられる。ほわ

> 手勝手悪く、会話もぎこちなくなるのではなが、右利き左利き、と優しく表現されている。 薫風 「徳利を中に」の上半句を深く吟味 を交わしている情景と思える。右利きが右に を交わしている情景と思える。右利きが右に が、右利きが左に位置を占めると酌もス ムーズに運ぶのだ。これが逆に座ったときは と下戸との暫くの間の悪さを捉えた句と見た

年代 みな様のいろいろなご意見を拝読し ませんが、酌み交すうちに相反する意見も行て「徳利を中に」して少し飛躍するかも知れて「徳利を中に」して少し飛躍するかも知れ

白汀 よく読んでみると道具立てがあまり がったかも。それにしてもそれ程のリフィクションで拵えものの構成も時には面白 りっかかったかも。それにしてもそれ程のリアリティを持たせたこの作者は只者ではない が。しかも有りそうなことだからつい四人共い。しかも有りそうなことだからつい四人共い。しかも有りそうなことだからつい四人共い。

十郎 右利き左利き、どう判断しようか。 中郎 右利き左利き、単なる右利き左利きのだが、此の句の場合、単なる右利き左利きのぎたろうか?右利きは当然だから右利きとは事だろうか?右利きは当然だから右利きとは

から理に適った句が散見される。それで句の薫風 句主の森生氏は工学博士、科学者だ

はない。動かぬ徳利と、ゆききせぬ杯、上言

に右利きと左利き リズム的に「と」を入れ くり)(とっくり)の二様がある。 意味をこのように取ったわけだ。 て変化させる形もある とくりを中 徳利は、(と

宮仕え背中で呼吸ととのえる

ながら妻子を守らねばならぬ。尊敬もするが 緊張感の中へ身を曝さねばならぬ立場であり すところなく捉えている。彼等は終日、この 吸ととのえるの中七・下五で痛い程わかる。 同情も禁じ得ない。 マンの辛さを「背中で呼吸ととのえる」が余 いなァと一読して感じいった。現代サラリー **白汀** これはまた年季の入った句で、 宮仕えの窮屈さや辛さが、背中で呼 うま

が無ければ、ほんの平凡な句になっただろう。 の効果、両者に感銘を深くする。背中の二字 次会へついて行き 豆秋」を頭に浮かべた。 させる深呼吸だが、背中で呼吸ととのえる、 る情景が伺える。こんな時の心の衝撃を沈静 顔を繕っていても腹の中は煮えくり返ってい とした所が哀れさを感じさせる着眼である。 2、豆秋のユーモアの味付け、この句の一語 宮仕えの悲哀が両方の句に共通したものだ 薫風 この句を一読して、「骨立てたまま」 耐える事のみ多い宮仕えである。笑

「宮仕え」の句は男性の方達にとっ

めきれぬ心をあれは夢だったとおのれに言い 程の歓喜、だがそうは行かぬのが現実だ。諦 だったかも…。このまま時計よ止まれと思う きっかけで実現した。あるいは異性への思慕

及びます。巧みな句だと感服します。 リーマンの妻であった私にも夫の一生に思い てずきんと応えるものだと思いますし、 **白汀** 「宮仕え」がちょっと古い語に思え サラ

てきたので「サラリーマン」と入れ替えてみ

るときはポーカーフェイスで…。 実感出来ぬことですが、ポーカーでもしてい 社に勤めた人なら痛い程わかる句である。 が社長、長男が専務、次男が常務、こんな会 みが知る宮仕えの哀れさが如実である。父親 く、しきたりは永遠のものである。宮仕えの を探してみようと、今後の課題 たら、やっぱり重量不足、とうてい宮仕えの 目方にはかなわないので、もっと適切な言葉 十郎 宮仕えは古い言葉だが如何ともし難 背中にコントローラーのない私など

思いきり顔を洗ってあれは夢

聞かせてほしい。あれは夢、と結ばれたのは ってゆかれると思います。 右さでしょうが、歳月とともにまた表現が変 白汀 実現しそうにもない願望がふとした 年代 よくわかります。どんな夢だったか

聞かせる苦しさよ。

が如実に伺える であろう。あれは夢という下五に、心の転換 思いきり洗い流しているのは、心に残る迷い 明け方迄続いた鮮明な夢であった。顔と共に 十郎思いも寄らぬ夢の目覚めであろう。

たのだと。 のだと自分に納得させる。あれは夢、夢だっ い水で顔を洗う。そして、その出来事を夢な ことを体験した。思いをふっ切るように冷た 薫風 現実には起りそうにない仕合わせな

期待しています。 感じます。これからのびてゆかれる作家だと 「思いきり顔を洗って」で断ちがたい未練を 年代 「あれは夢」で切ない甘さを思い、

こまで光るか測り知れない魅力を秘めていて を忘れず精進して欲しい。 その成長を楽しみにしている一人が居ること その配列の見事さは凡手ではない。磨けばど 白汀単語のおきどころがまことに巧みで、

を迎えにゆくだろう。然し此の句は思い切り 洗うのは、まだ概念的だといえる。白汀氏が 顔を洗って悪夢を断ち切らんとしている。 夢なら目覚めてからも、うとうと夢に浸り夢 薫風 「あれは夢」と言い聞かすのに等顔を 十郎 夢なら覚めずにいて欲しい。こんな

大きな影響を与えるものですから。 びる人です。グループの零囲気は作句活動に 励ましておられるが、グループがいいので伸

顔を

塚

施 幸 子

布

せこましい場所である。 大阪市立都島小学校に近く、 たずねたずねて、やっと鵺塚にたどりついた。 自宅を出て雨中を歩くこと四十分。 商店街の裏のせ 夫婦で

と彫られている。 を四つ重ねた塚があった。上の石に つそうに小さな祠が立ち、 自転車やら空箱やらに囲まれて、 変った形の自然石 きゅうく 『鵺塚』

とはトラツグミの異称という。

図鑑を

はこの鳴声を聞くと身近な人が死ぬという迷 黒い斑点、くちばしはまっすぐ、全長三十セ に「ヒーツ、ピョー」と陰気に鳴き、 し西日本で冬を越す。淋しい夕暮れとか深夜 ンチの鳥である。東北地方の暗い森林で繁殖 見ると、背中は黄ばんだ褐色、 胸は白い中に 九州に

は一味違っている。なにしろ頭はサル、 信があるほどネクラな鳥らしい。 **麹塚に眠る鵺は並のトラツグミと** 胴は

を左大臣藤原頼長がとりついで紫宸殿の階段

を下りてくると、ほととぎすが鳴くのが聞こ

宸殿の上空で「ヒュー、 な鳴き声だけはトラツグミに似ていたという。 タヌキ、尾はヘビ、手足はトラといった、 るで動物園のシンボルみたいな怪獣で、陰気 近衛天皇の御代、午前二時ごろになると紫 ピーツ」と気味のわ

めよ」との勅命が下った。 る。きっと上空の怪物のしわざに違いないと、 屋をうかがうなど妙なできごとも起こってい る日々が続いた。そういえば近頃、見なれぬ るい声がする。と同時に帝のご気分が悪くな 女官が御所の廊下を歩いていたり、帝のお部 「源三位頼政に御殿上空に現れる怪物を射止

の姿あり』と平家物語に描かれている。 頼政きっと見上げたれば、雲の中にあしき物 むら立ち来たって、御殿の上にたなびきたり、 ん年十四歳、 『刻限に及んで、東三条の森の方より、 ときに仁平年間の一一五三年四月、 頼政は四十九歳であった。 帝の 黒雲 お

がかけ寄って九回刺し殺した、とある。 のがかの猿頭蛇尾の鵺だった。家来の井早太 があって、空からまっさかさまに落ちてきた をつがえてヒョウと放った。みごとに手応え 帝はお喜びになって御剣を賜わった。 南無八幡大菩薩と念じつつ、 頼政は弓に矢

88 文芸大会川柳部門募集要項 第3回国民文化祭ひょうご

(1)作 2題と第 一次選者 未発表作品

宿題10句·各題1句

『爽やか』 白

大野

礒野いさむ

島 民

田口

麦彦 大雄 風柳

斉藤

本 城

『踊る』

『彫る』

レベンコ

広瀬 西尾 時実 田中 好啓

、〇〇〇円(郵便小為替を作品に 渡辺

4応募方法 同封)但し海外投句は無料

(3)応募料

(5)応募先 400字詰原稿用紙 〒60神戸市中央区下山手通4− 話番号と大会当日の出欠を明記 住所氏名・年齢・性別・職業・電 1枚に題と作品 1枚に郵便番号

第3回国民文化祭文芸大会川柳部

3

財兵庫県文化協会内

それ

(6)締

切

昭和63年7月31日(日)当日消印有 但し海外投句は7月31日必着

68

ほととぎす名をも

雲居にあぐ

と讃えると頼政は、

弓はり月の射るにまかせて

ていることが多い。 人で、頼政にまつわる話には和歌が添えられ人で、頼政にまつわる話には和歌が添えられ

まり、三年後に平治の乱が起こっている。この鵺騒ぎより三十年ほど前、近衛天皇が大二歳で早世、つづいて鳥羽法皇が逝かられると、とたんに保元の乱がはじ皇が逝かられると、とたんに保元の乱がはじ皇が逝かられると、とたんに保元の乱がはじ皇が逝かられると、とたんに保元の乱がはじ皇が逝かられると、とたんに保元の乱が起こっている。

ところが頼政は安らかな老後を選ばず、七ところが頼政は安らかな老後を選ばず、七門とされ、清盛の厚い信任がうかがえる。例とされ、清盛の厚い信任がうかがえる。晩年、に加担し、以来ずっと平家に従った。晩年、

政情不安定な時代、紫宸殿上空で不気味に中六歳にして以仁王を奉じ平家打倒をはかっている。 計りが積もりに積もっていたのだろうか? 計明に大敗し、宇治で自殺という波乱の人生を断じている。

オマケにはさらにオマケが加わった。退治政鶴退治のオマケを生んだという見方がある。鳴くトラツグミが妖怪伝説を創りあげ、源頼

は大阪へ行きますやろ。やれやれ一安心」となれた鵺は都中を引きまわされ、京都の話題された鵺は都中を引きまわされ、京都の話題とた。「きっと鵺の崇りどっせ。丸木舟に積んで流しまひょ」ということで、屍を積んだんで流しまひょ」ということで、屍を積んだんで流しまひょ」ということで、屍を積んだんで流しまひょうというにはさんにオマケが加わった。退治

明治になると、なにわ人、の心情も変って養塚を建てたのが鵺塚だといわれている。養塚を建てたのが鵺塚だといわれている。書訴訟になりかねないが、昔の、なにわ人、書訴訟になりかねないが、昔の、なにわ人、ないの心情も変って

きて、「こんな塚、とりこわそうやおまへんか」との話も出たようだ。が、とたんに崇りが現との話も出たようだ。が、とたんに崇りが現との話も出たようだ。が、とたんに崇りが現との話も出たようだ。が、とかたなく大阪府れたというから恐ろしい。しかたなく大阪府れたというから恐ろしい。しかたなく大阪府れたというから恐ろしい。

(7) 賞 文部大臣奨励賞ほか

一次選者選出の秀句各10句計100 (1975年) 第一次選者選出、第二次選は第一次選者により各題秀句10句

第二次選者 去来川巨城 奥田白虎 橘高薫句から賞を決める

選び発表紙に掲載 全応募者に配布※入選句および応募作品より一人一句を森中恵美子

発表大会

は手前勝手なやり方である。

会場 神戸国際会議場(メインホール) 会場 神戸国際会議場(メインホール)

句拝辞」
句拝辞」
句拝辞」

締切12時 選者交渉中

灯、火。

笛

校のそばにあるこの鵺塚、子供の病気封じに

近所めいわくな遺跡とも思われるが、

ふしぎなご利益があるといわれている。

七七調の実作

錆

方に集中できる。夜なべとは言えないわけだ。 時は、前夜から仕事場を暖める時刻を決めて で句を思いつくこともあるし、難しい翻訳は時 おかなくてはならない。朝型人間なので寝床 さて折句というのは、ふつう五・七・五の この辰年も内職を始めたが、注文があった タイマー暖房つけて副業

> き緊まっている、と感じたものだ。 きある。「抜いた大根で道を教える」の方が 「ひんぬいた大根で道を教えられ」よりも引 その後、麻生路郎の句集に点在する七七調

などの実例に接して、「では私も」と考えた 畳も匂ひ初刷も匂ひ 二階を降りてどこへ行く身ぞ

みたい、と思ったわけである 字に親しみを覚え、そんな七七調で現代を詠 多摩川を渡ってゆく。なんとなく武玉川の文 蔵の国だし、玉川学園駅で乗る通勤電車は、 のが十年ほど前だった。私の住む町も昔の武

の味をもたせている様子もある。例えば、 た例がある。それぞれに含蓄とかパロディー ろはかるた」のような短い句の形で、教訓・安 まぜて出した。直原七面山氏の存在も心強か で、川柳塔同人の「試み」として十七音句に 道記事の見出しが歯ぎれよい12―14音になっ 全標語・名所案内などがあるほか、単なる報 った。そのうちに気が付いたが、世間には「い は、注目されていた大関の不運をスポーツ 七七調の投句は全没になるおそれがあるの けいこ仲間が断つ綱の夢

正月に「ひつじ」の三字を入れた折句が、私に

いではないか――と私は考えている。

合せ風の句を作ろうとも思わずに過ぎた。 十二支の残りは二字か一字なので、特に語呂 は川柳への助走のような働きをした。しかし、

一方、そんな話と無関係に『武玉川』の解

ているが、その句が鑑賞に値すればそれでよ

三か所に指定の文字を入れる遊戯句といわれ

説を読み、その七七調に肯いたことはときど 欄の見出しにしたものだし、放送の中でも が紹介され、実物がズームアップされた。 まわしの汚れが力士の値打ち

詠んだことがある。丑年の少し前で、そのモ には遠いが「ウイットあふれ白髪の講義」と 句はかなり作れそうにも思った。私も、詩境 容から俳味柳味を区別できそうだし、七七調 し」だな、と気がついた。そして、一句の内 連句で十四音を練習する人もある。いや、思 い切って破調の世界に没入すれば、山頭火の 俳句では、大体五七五調が守られてきたが、 があるではないか。何年も経ってから「う うしろ姿のしぐれてゆくか

ら、お世辞であろうが、七七調川柳は調子が デルは玉川大学のY教授であった。 いいね、と関心を示した。 そんな拙句三十ほどを俳句の友達に見せた

ナ抜きという)が曲数はあり、覚えやすい。七 ラッパのふしの数ほども出来ない。ドレミソ ャイムで旋律を考えたことはあるが、軍隊の 機がある。私は「ドミソド」の三音だけのチ 階が多い)がかなり作られている点と似た動 るのはなぜか、というと、唱歌や演歌(五音音 ラドの五音なら、ピアノの鍵盤より少ない(ヨ 「試み」から脱して、いま本気で十四音に凝

も思った。

私は、類句を気にしすぎる方かもしれない が、次のように考える。初めのうち、五七五 が、次のように考える。初めのうち、五七五 記憶できた句も相当ある。そういう勉強をす 記憶できた句も相当ある。そういう勉強をす にくい。課題吟などは持に、類想の展示会の にくい。課題吟などは持に、類想の展示会の

で家の業績を大いに讃えたい。 たいよりも、過去の秀句を書棚の中に整理 大の名作を、作者名をつけて解説する仕事は 人の名作を、作者名をつけて解説する仕事は なってよいはずで、川柳の紹介に力を入れる なってよいはずで、川柳の紹介に力を入れる で家の業績を大いに讃えたい。

JU,

もう一度、音楽の話に戻ろう。唱歌・校歌事歌の類を、我々高年者はよく覚えているが、あることを読者は意識しておられよう。あることを読者は意識しておられよう。あることを読者は意識しておられよう。

都の西北 早稲田の森に相馬御風の早稲田大学校歌は、

で始まり、一貫して八・七調。そして結びの

我等が母校の 名をば高めん

夏がくれば 思い出す では、下段は七音を厳しく守る努力(明治時と、下段は七音を厳しく守る努力(明治時

向気にかけない。 をリズムで仕立ててしまうから、唱う人は一と、これは六・五調である。作曲家は正確

遙かな尾瀬 遠い空

議論は進まなくなりそうだ。 議論は進まなくなりそうだ。

ただ記憶というのは不思議なもので、短命ただ記憶というのは、「をば」の使い方が妙に頭というのを私が忘れずにいるのは、定型のせ戦後の風刺句「女体をば斜めに写すのが文化」というのを私が忘れずにいるのは、定型のせに残った例であった。

E.

音の過不足はどうあれ、十四音以下の短

のらしい。幼稚園や宗教団体が呉れるのもあのらしい。幼稚園や宗教団体が呉れるのもあれてきた。風刺に主眼異種類が混然と伝承されてきた。風刺に主眼異種類が混然と伝承されてきた。風刺に主眼異種類が混然と伝承されてきた。風刺に主眼異種類が混然と伝承されてきた。風刺に主眼異種類が混然と伝承されてきた。風刺に主眼異種類が混然と伝承されてきた。風刺に主眼異種類が混然と伝承されてきた。風刺に主眼と置けば「いろはかるた」の類は、子供に判らなくてもおもちゃ屋が売るもは、子供に判らなくてもおもちゃ屋が売るもは、子供に判らなくてもおもちゃ屋が売るもは、子供に判らなくてもおもちゃ屋が長れるのもあのらしい。幼稚園や宗教団体が呉れるのもあります。

俳句にも、発音にからませた話はある。「古 池やかわずとびこむ水の音」は「ふかみ」の 池ちろん、後世の人の脚色なのであろうが。 しかし大抵の句は、上中下の三つの字を拾 っても、無意味な言葉である。歳時記の秀句 で試みに調べても、有意語が出る率は百句中 で試みに調べても、有意語が出る率は百句中

難しいラ行の句もそろっている。
がある。芭蕉の句を、伊丹万作氏が「いろはがある。芭蕉の句を、伊丹万作氏が「いろはがある。芭蕉の句を、伊丹万作氏が「いろはがある。

けがなく 用できる。 視点で二次選抜することは可能だろう。 記してあるが、 とが私の正月ごとの夢想であるが、 機に頼らずとも、 後の仮名づかいでは四十四音)の数だけそろ 大勢の作品を元に、川柳の秀句を五十音 『川柳でんでん太鼓』の索引が利 六四六句を、 は一句、 そんなことを寝床で考えるこ 引用句中 数万句の母集団から個人の ŋ 巻末で五十音別に再 「る」で始まる句だ が 一句あること 電子計算

> 句から公平に厳選するのは、 るが、それで一応はそろってくる。 %)ある。 の苦笑が目にみえるようだ。 中にはある。ルンペンほか外来語を使って 「る」の句がある句集はないか、 橘高薫風氏の 『愛染』 大変なことだろう。 だが、 多数ある 薫風さん

四

九

○なり一○○なりの句を取上げる話だっ 前節は、十七音句から、 、ある趣向に従って五

わ 土 地 0

辻 H 渓 子

を賞でたい方には最適の場所である。 由に遊ばせている。下戸の方でゆ また、近くの保育園から園児を引率

さらに芥川を上流

へ足を運ぶと、

‡F

中

花

0)

途中に芥川があり、 共に桜の名所としても知られている。 信長の仇を討ちに通った西国街道 私が住んでる高槻は、 門前橋から芥川橋まで 興亡変遷の歴史と

だんらんする程度で、

花見の一

般

的に見

見頃は土手斜面に家族連れがちらほ

枝振りの良さは見事の一

言に尽

る喧騒も混雑もない。

食べ倦

瀬に足をつけてる姿も微笑まし

バンドも協賛して最高の花見の姿になる がある。 名勝 桜公園で撮影会を行うので、 私が所属している8ミリクラブでは 連の踊りの輪 刀神社のお神輿の繰出しや、 で入れたグルー 一間を誘いたいと思っている。 耶馬渓に着くが、 ここは丘全体に桜があって、 カラオケの競演、 プのはしゃぎ、 その入口に桜 今年は川 府警のブラス 加えて阿 三味線 毎年 柳 公園 久 ŧ

約五百米の土手には古木の桜が続き、

のが、昭和五年の『少年倶楽部』 玉川」のセットを作ってみたい。 私としては、十四音以下のささやかな「 は句集」が四つ五つある。 業分野では、 ただ、少年向きの「物識りかるた」という それはここで書いても仕方あるま 作業心得帖の見出し風の 標語に近いもの 実は、

時折活用した、 小学生だった私の頭に焼き付い お音の速さは一 という体験がある

始めるまでの陰の存在だったような気がする 知識の案内役という意味で、 そういう刺激を受けていたので 作者は堀七蔵教授(東京女高師) といった類の十四音か十二音の句だが、 上横浜シャトルニ 一週間 私が七七調句を 柳

は花火で閉会 また会おう いいまが北斗の役をするビル 路面でがんばる塗料の科学 私も精を出すことにした。

そしてやはり「ぬ」の辺りで難航している。 一千句と作り溜めれば、 外来語導入といくつもりであ 困ったら、

悼 市場没食子先生

深 下 愛 論

柳家を育ててくれました。 りよき指導者でありました先生は、多くの川 大阪逓信病院川柳「鳥ヶ辻」の創始者であ 昭和十七年三月~昭和四十八年十二月

私くらいでしょう。 を立春雄先生、若林草右先生、太田良子先生もそうであります。もう先生に指導されて生もそうであります。もう先生に指導されて

成った。 のでし。 代表作で短冊、色紙によく揮毫して下さっ 代表作で短冊、色紙によく揮毫して下さっ

昭和五十四年七月

昭和三十七年三月のおいけど連根鈍で来た余生の没食子がないけど連根鈍で来た余生の没食子川柳句集「夫婦」発刊される。

出入りして遊んでいたものでした。奥さんの悠々自適の暮らしで、近くにいる私などよく自選句集で作品発表されていました。退職後

に勤めていられるので、手術をされた。 前立腺になられて、幸いご子息が病院の薬局 前立腺になられて、幸いご子息が病院の薬局

「袋だけでさっぱりや」とよく笑うていら「袋だけでさっぱりや」とよく笑うていられたが、退院、入院の繰り返しでした。先生い時など、アルコールに苦味チンキを入れてい時など、アルコールに苦味チンキを入れていちなど、アルコールに苦味チンキを入れているい目を一段細められて、チビチビ盃を手いさい目を一段細められて、チビチビ盃を手にしながらうなずいていられます。

合掌

木山遠二氏のご逝去を悼む

松本忠三

おれわれ川柳並木会の生みの親育ての親、 初代会長である木山遠二先生が三月五日二十 三時十分、九十一歳でお亡くなりになりました。 わたくしが六十二年一月十五日「川柳と私」 た。 を題し会員の方々からの寄稿を求めた際の先

> 計、銅メダルを獲得しましたが、これはいず な」を東京の雑誌「新国民」に投句して入選 暦八月十五日夜「鶏も出してやりたる月夜か 帰り昭和二十四年一月、新山公民館川柳クラ 句し、また川上三太郎の教えも多分に受けた。 ら剣花坊主宰の大正川柳の「一家吟」欄へ投 れも賞品欲しさのものでした。こんな経緯か 倖にもスイス製の懐中時計とかセイコウ置時 柳欄(選者井上剣花坊)の募集に数回応じ僥 ものである。それと前後して講談倶楽部の川 したのが川柳の道に踏みこんだ正に第一歩の 人である。ところが大正十二年三月、一身上 剣花坊、三太郎共わたくしには忘れられぬ恩 ブ発足、三十年三月、川柳並木会として柳社 の都合で朝鮮に渡り朝鮮での生活二十数年、 「秋風の村へ還りぬ荷を肩に」と再び故国に 『わたくしが川柳を志したのが大正三年陰 初代会長となりました。

帰国して数年を山陽新聞へ投句をし、特に時事吟を矢継早に投じたその中の一句を麻生路郎氏が川雑第三百十八号の巻頭言に使用して揶揄攻撃された。そうした事から麻生路郎先生に拾いあげられて同人となり川柳塔の現先生に拾いあげられて同人となり川柳塔の現の論、路郎師のお陰であり、句のお陰とも言える。』

すと天国の先生からお叱りをうけると思いま い成績をおさめております。こんなことを記 ている。その他、地方の大会等には数限りな ない父に足音だけが似る」が路郎賞を獲得し て表彰され、また四十三年十月六日「似て居 点数に於ても優秀な成績を収められた故を以 度大萬川柳に於て敢闘賞を受賞、並びに綜合 昭和三十五年三月二十七日、昭和三十四年

も尊敬された田舎の好々爺でありました。 員を愛し指導して頂き、また地区民の誰から となく、ひたすら謙譲の美徳を備え心から会 先生はご自分の柳歴、業績を鼻にかけるこ

た。七日の葬儀も滞りなく済まされ四、五日 今年に入ってからはそれも出来なくなりまし してわたくしがお伺いし奥様といろいろ思い だき、時には選者もお願いしておりましたが 例会にも寝たきりの身でも必ず投句していた 続けます」と力強く申され、またわれわれの 投句は容易でなくなりましたが愛染帖だけは しに「このような身体になっては川柳塔への 病の床に伏すようになりました。直後わたく 五十八年十二月、先生が突然お倒れになり

の透き間から猫が入ってきました。わたくし 話は尽きるところを知りません。そこへ襖 出話をいたしました。

しの側から離れていきました。 寂しそうな訴えるような目で見つめ、 しましたら、「そうですナナです」と。ナナは が「この猫ですね先生の作句の題材は」と申 わたく

作

享年九十一歳でした。 屋で永眠なさいました。哀惜に堪えません。 氏が、三月五日、路郎賞と愛染帖賞のある部 四年余り寝たきり老人でいられた木山遠二

を戴いたので敢えてペンを持ちました。 たのと、一度奥さんから、感激に溢れる電話 ん。が、同氏の川柳には常々心酔していまし 追悼の稿を書くのに相応しい者ではありませ 実のところ、私は遠二氏と一面識もなく、

紙を添えたのでしたが、折り返し奥さんから 載せました。その会報を笠岡市のお宅へ送っ す。昨年の十二月、会報の文芸欄に、遠二氏 た際、無断掲載のお詫びと、病気お見舞の手 耳の聞こえない人達に川柳指導をしておりま の川柳を模範句として掲載しました。無断で 私は県からの依頼で、岡山県難聴者協会の

どく興奮のお声で「お送りいただいた会報と の冬は急に病状が悪くなりまして……」とひ 主人はもう四年寝たきりでいますが、今年 電話があり

うれしい、うれしい……と涙をポトポト落と 電話口で泣かれました。 ました」とおっしゃって、奥さん自身もまた ……と両手を合わし、あなたのお手紙を拝み して、ありがとう、ありがとう、ありがとう お手紙を枕元で読みましたところ、嬉しい、

気の故だろうと考えました。 れるのか、一向に合点がいきません。多分病 をしたに過ぎませんのに、なぜこうも感謝さ 私は驚きました。自分はほんの些細なこと

はそうとしか思えません。 そこへ私の手紙が舞い込んで、嬉しい思いが 受けていられました。おそらく塔社からその 通知があり、病人は感謝と喜びで一杯だった。 直ぐ解けました。遠二氏は第一回愛染帖賞を 時に爆発したのではないでしょうか。私に しかしその謎は、川柳塔の新年号を読んで

地が致します。 おっしゃる遠二氏の声を、私は耳近く聞く心 うございました、ありがとうございましたと こうしてペンを持っている間も、ありがと

寝たきりが目をつむってる師走かな まだ生きて居るよと笑う寝たっきり 寝たきりの天井が暮れ日も暮れる 寝たきりの茶碗を猫がじっと見る 寝たきり千日猫を相手の日が続く " 11

74

草刈堕駄様を悼む

林 は 0 絵



に呼び出しがあり、近くの喫茶店で紹介され やるから」と暇だけある私と杉浦婦美子さん の朝山千世子さんから「北口句会に入れてほ しいという方が川柳のこと聞きたいとおっし 五年ほど前だったと思います。北口川柳会

たのが堕駄様にお逢いした最初でした。 憶力に驚嘆させられたものです。 やら話が弾み、そのうちに思わず堕駄様の記 合うせいか、つい、子どもの頃やら学生の頃 川柳は全く初めてとおっしゃるが、年代が

「いや、もっと。3・1416……」 円周率言えますか」 3 1 4

どれ程数字を並べられたことか。勿論正確だ ったことでしょう。 堕駄様は私の憶えていた3・14の下に、

晴らしい句を作られました。 に一途に趣味の川柳に邁進されました。そし な掛け引き、憶測など微塵もなく少年のよう 戴くことばかりでした。また、世の常のよう て北口句会に出席なさって間もなく、 このほかお逢いする度にその博識に教えて もつ素

見舞を笑わせてくださいました。暖くなった お祈りして止みません。 らと祈っておりましたのに、嗚呼。ご冥福を ご病気になられても、好きなお酒の冗談で 花見酒待つみ仏へ先ずあげて ぜんまいが切れて人形振り向きぬ 堕 はつ絵 駄

天国の堕駄さんへ

田 みつ子

白いお花に埋もれ、川柳塔誌を抱いたお顔は 堕駄さんの胸の上に置かれましたね。 ら……。」と納棺の時に奥様が川柳塔二月号を 川柳塔誌胸に抱きて逝き給う 最期まで川柳川柳と言っていたのですか みつ子

本当に安らかでした。

熱心な生徒さんでしたね。そして一番前の席 た後姿が今でも目に焼きついています。 で薫風先生のお話に真剣に耳を傾けておられ 口のローズカレッジ川柳教室に駆けつける程 したのに、少し良くなるとタクシーで西宮北 入退院を何度も繰り返されるようなお体で

ドの傍には辞書や川柳の本が積まれ、苦しそ 熱を感じました。 お話をされましたね。まるで青年のような情 うな息づかいの中から次々と川柳についての 病院にお見舞いに伺っても、何時でもベッ

らもっと川柳を作って下さい。数ある印象深 ラワーなど数々の研究で活躍をされたとか。 い句の中から大きな声で三句だけ読み上げま 重宝で今でも大切に使わせて頂いております。 考案された多目的に使える特殊な鋏はとても います。専門の化学の分野でもクリスタルフ つか詩と写真の個展を開かれたように聞いて 堕駄さん! 天国で好きなお酒を呑みなが 堕駄さんは確か写真もお上手でしたね。い

人と猿それ程溝は深くない 笑いぐせお面のように外せない 酒やめて真人間とは笑止なり 堕 11 11

題 走 る

30 萬 萬 的

うですね。では走り書きから とだけでは感情に訴えるものが少ないらしく 走り書きとか気が走るという句が多かったよ 走り書き妻あっさりと里帰り 揉めごとで家出の度に走り書き 外出の妻が置いてく走り書き 走り書き残して妻は旅に出る 今月の課題「走る」に対し、本当に走るこ 坂田しず子 成 洋

細書で水茎冴えた走り書き 墨細く美女達筆の走り書き かなくぎ流走り書きだと書き添える かなくぎ流走り書だとわざに書き 走り書きさて追伸の長いこと 三津江 美恵子 はる子

誤字ひとつ伝言板に走り書き 受話器持ちかえて走らすボールペン) 持ちかえて受話器へ走るボールペン 走り書き荷物の中に入れて置く 走り書き誤字は大目に見ておこう 忘れ得ぬよき日の日記に走り書き みね子 る 枝

走り書きの母の手紙がある荷物

走っても影から逃げられないわたし) 化物に追われて走った人生航路 無我夢中突走ってた寡婦街道 走る様に過ぎゆく過去が怖くなる 走っても影は私を追って来る 倖せは私の傍を走り抜け 幸福の日々知らぬ間に走り抜け サワ子 三千子 富 昭 峰 恵

我武者羅にここまで走って来た迂闊 走り去った足跡ばかり庇ってる 走ること俺にも出来るが追い付けぬ 生を走りつづけることで終え

世渡りに走れば躓く石ばかり 噂というものは突っ走るものでして。 人生のマラソンあの世がゴールです 走り続けて喜寿も傘寿も過ぎ去った 八十年のドラマが走る走馬灯 一途までに走る夫も古稀が過ぎ 雄

別居してあらぬ噂が走り出す 別居してうわさが先に走り出す オフレコの噂が走る兜町 ここだけの話したのに突っ走り

当確の噂が走るから不安 小走りにニュースが街を駆けてゆく Œ 走馬灯お金に縁のないわたし とかくこの世は走れば躓く事が多いら 走馬灯金に縁ないこと多し 走ってもお金の方が速く逃げ 昭

化物に追われて走ったような過去

無為無策走りつづけただけの僕

昭喜 秀治志香 久

つえ子

公 子

> 何事も突走る癖親ゆずり 本心と違う言葉が先走り 都市砂漠を駆け抜けて行く事故ニュース)

先走りし過ぎて男に傷がつき 先走り過ぎて傷つくお人好し

由

先走る癖で孤独になる男 先走る癖が他人をふりまわす 三千子

(気の走る娘でジーパン好きという) 気が走るほどには足がついて来ず 気の走る娘でちぐはぐという平衡 気走りの割に身体が従いて来ず 向井しづ子 純 はる子

才走る女の帳場ゆるぎなし 気の走る舅へ言葉選ぶ嫁

光

自然治癒待てずに走る医薬品 これらの走るほかに、こんなのも…。 才走る女で細腕繁昌記 9

男が走れば何か影があるようで…。 血走った相手でゆとり出来てくる 迷信に走り解らぬ水を飲み 公 照

裏切った男が走る曲り角 百合子

感情に走って議論は独り言 **裏切りに走る心が常にある**

花粉症季節を先取りして走り よく走る友の悩みは花粉症 だが走るものには大自然もありました。 出会いがしら虚像の笑みが走り過ぎ 感情に走り独り芝居にいた男 すみれ

三寒四温春が助走を繰り返す 肌をさす寒さが走るお水取り 子

郎

35Kここぞと決めてリードする きれいな月残して走る冬の雲 ファインダーの中でSL追いかける) SL、連絡船、赤い尾灯は郷愁をそそります。 町の中車の凶器が走ってる 飛べもせず家鴨ヨタヨタ走るのみ 走り出た仔犬無数に草じらみ だが走るのは人間だけではありません。 裏口入学に似て瀬古さんのソウル行き) ご迷惑ばかりかけてる瀬古の靴 根性で完走拍手なり止まず) 根性で落伍はせずにしんがりを 完走のビリ場内声援雨嵐 完走へ一位と同じ湧く拍手 冬景色かたまりの雲空走る きれいな月残して走る徒らな雲 名月を時々邪魔な雲走り 月にむら雲、雲は走るものの一つですね。 馳足で春がそこまで蕗の薹 走り去るライト点まで立ち尽す 土手走り撮りに撮る撮る貴婦人号 大安にも走るポンプ車救急車 サイレンが尾をひく夜中の救急車 走るため生まれた馬のやさしい目 マラソンもファッションにするレオタード マラソンもここぞと決める勘どころ ここらで本当に走るマラソンの句を少々。 つくし大合唄春の女神がひた走る 一番目を走って余裕の時計見る 三倉 八重子 富 明 八重子 繁 正之 しんじ 喜与志 サワ子 丰 男 郎 美

> 、サラリーマン駅伝に似て走らされ 走り去る尾灯は赤い点となる バス停へ小走り過疎の村暮れる さす傘に情がかよう走り雨 駅伝を走るに似たりサラリーマン 時刻表に追われて走る朝の靴 時刻表に合わせて走る靴の音 三面記事走り読みして出社前 ダイエット犬も協力して走る 力一杯走ると夜が明けてくる ここらでがらりと変えて人間の朝はとかく 腰かがめ小走りに行くバス停へ 夕焼けにまっすぐ走るランドセル 村祭みこしと共に走る大 故郷の山や川を想うと何かと浮かんで来て 敬老席孫がトップで走り過ぎ 危なげに走る孫等に笑みたたえ 運動会などで孫の走る姿を見て…。 連絡船走る勇姿を消す架橋 一杯のコーヒー今日が走り出す ミツエ 路 都姫子 緑 サワ子 金 都姫子 明 ふさ子 晏 良 吾 子

預かった孫に朝から走らされ 来客で妻小走りに市場篭 指切りの指が走らす雨の駅 紙芝居拍子木合図に走った日 では最後はいつものようにもろもろの句を ちず子 喜代子 百合子

思い出にはこんな事もありまして…。

引受けた孫が朝から走らせる

熱の児を抱えて走る夜の道

子

いということにもなるので残念でした。では又。 た。でも類想の句があるというのは視野が狭 のですが、皆さん上手にこなしておられまし 息切らし合格叫ぶ隣の子 再会に別れた親子走り寄る 叱られに行くのに走ることもない 祭の夜男の匂いと灯が走る そして私の好きな句を…。 親類を皆走らせて持ち直す 信じてるメロスよ走れ友が待つ 仲の好い夫婦も時には口走る 見られたくないのか素顔のまま走る 走り登った人が手を振る梅の茶屋 怖いから走ると月も従いて来る 均等法妻の走りが止められぬ 俄雨にお辞儀も走る車椅子 ヨーイドン兎もいれば亀もいる 口ずさむ軍歌へ白い風走る 渚を蹴って走る若さはおいてある お別れと言うのにペンが走り過ぎ 滑走路不安も乗せて離陸する 赤信号走って孫にとがめられ 走る」という題は面と向えば作りにくいも 向井しづ子 すみれ 紀代志 つえ子 ふさ子 てる

題「砂」 5月10日締切(7月号発表) ハガキに5句以内

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一一九九 6月10日締切 (8月号発表) 阿萬萬的

身軽

足

つ 3

足す来柔幾長子足足足二負大靴馬シ教二 け陸にのべ 訓の売高 たとはたとは 1) 足 足 りな晴 n 合わ + をふむ の足れ を歩 まで 舞 せて 足 1 台 10 た兎 をとんと た足 下 履 で を を と が を と り を と り 断を迫ら 足 を自 ٤ 足 音春 龟 が 慢す 0 n ず知 3 足 3 美可正虹弘 代子住坊汀朗 白雄 倫 渓子々子

走歩帰足足足ア人飾巡反白振休喪 るけし跡音早フ生 つ礼抗いり 目にカしても 夢歩たを ばけく踏 のの足向 を 跡が母ば りく 地 0 跡足 森脇 元大清妻英明正 江柏芳子三水敏

消い鈍背長 足 えて行い 足でい なより の終り く足 0 で足がいたくなり 音 1= ある深

10

闇

足 音 早 を 聞きわ 17 るのも愛だろう

寿

美

か山いにふ

を欲しがるこうでたてないように夏がり春の女神のおそいた足を撫でてやったの足にないように夏

一度聞きたい車椅子に思っていない勇み足間の素足に迫る冷えれてないように夏来るたてないように夏来るかり春の女神のおそい事がいた足を撫でてやるかいた足を撫でてやるかいた足を持つまでないと音を待つ未練でないと音を待つ未練でないと音を持つまるといる。

枯 典 伊 寿 玉 梢 子 志 恵

そ筈い河旅残みば

の土歩い

一にな

負

1+

音 し算り

を

算が出

サワ子

釜

文

たって

大丈夫

2

な

鶴

歩くです To

啓胃開忍勘胃細知宣童同のシ大寺麦胃ポ浮寝小

雀狸三宵正 五 五 日 田 子 村 島 明子

夫な

足

が L

自

犬 は の足には き 敵 n B 10 味 効か 拭 方 いて戻りゃんせ B ぬサロ 通 n ンパ す ス 3 奈美子 章

久

アメリカ任

7

夢が しみてる

母

せ

を包んでく

れる

足

袋

田 隆 = 選

袋けの忍袋工恵伝心居し 致に溜まる私の不発して月給袋に手を合わる袋糸を引いてる電話伝を 客にたのんだ紙にを あれた しょって開ける 標 し袋今日の主役は息子で、サング好きな女の紙和粥今も生きてるお茶面り手提げ袋に 数珠とのしが好きで胃袋丈夫でのしが好きで胃袋丈夫で L 字袋 信いながらして月給袋 がし 良旅星 7 い立座分 勘 子つの は に子らって で胃袋丈 袋 ら私 0) 老 た顔 で ゼ П のて不合電だるをを教行発わ話紙福締 ん 福袋行発わ話紙福締で紙茶とでそぞ とり ント 奈美子 狸 軒千新清太太 秀造芳 義虹鉄源 妻三み通一寿勝幸典 子倉ね彦進美美 江光美汀治吾 子

ョ和詣め袋

2 袋れ

0 n

つは

な

11

文正三五島

借

t

\$

らぬ父

0

諷

云児

もど解と

にも Ł

い紙開れ

ば

開

0

種

1

ルた

袋で

金魚

したり

母

袋 3 路

敏子恵明夫

られ行

正倫玉宵

<

を

陰 0 n

て

る 売

知

袋

チ物テ

な

袋

L る

文

句

を

抱

V

T

3 袋 < 糸 袋

箸

袋

他

人

行

儀

な

顔

を

す

る

雀

踊子

ま三あ人

の中

ま 姉

だと思

と思う真

省 1 情 略 は 0 大き 多 63 6 袋 夫 ~ 婦 詰 0 80 頭 変 える 陀 袋

雄

17

此逆縁縁縁 の縁遠のす

触れているな

の母 貝

男雛舞

女の部でならない

伊

津志

女いよ 縁 - の美

60

ょ

幸

+

な

夫婦

K

な

n

Ł

0

L

袋

良 縁起かついで嫁きおくれ 縁されますなどと言

名ビか袋負知愛袋福袋知学裏親紙

ニく小け恵情ば袋小恵歴見の

落語・

なる

森脇

和子住

可

た

のげ菩

種が落ちてい道ふさぐ袋」

小小

高

し路大袋のかに路袋のせ夢

欲抜し写た詰

を持

ち

緣

恵出て

入れて いけ出す しはい なけた 関 いけた に 数 は の 袋 た

にして母になるで、この袋で鳩を出してる大きな紙袋はいらぬ知恵袋はいらぬ知恵袋はいらぬ知恵袋

高枯た四子梢み郎

ひょっ 血縁越 緣緣 さんざんに して来 縁とい 談 K U とことおかめ 思 まだ家 うし 思ってま がら 無 隣柄 の縁 ウみで b へ歩を合わ 3 前 がまだ続く われ 出 する 濯 す す 正 森 弘 清 子 朗 芳 80

平生釆椿蓮

深

回り舞台のi 無縁黒子の瞳 はい縁がたち!!

中が切の清れ

X

あの清

のに

いろ 回無

n

n

0

縁

n 縁し の白この春もほって仲よくケンカー

L

がなな

V

り指縁の対象を立 り指縁のうすさを思い知るも縁孫が子犬を拾うてくるも縁孫が子犬を拾うてくる は な を 転 げ 出 すにカルテが待ったかけてくる あ妹指の と思う真珠があっさを思い知ったを思い知ったを思い知った。 伊た夢よし 世 代 書 本 と 世 代 低ま 妻 通 七女子彦

良無逆縁赤

縁縁縁あ糸

抜とづ埋た

すけめ

る てれ

風 下 戦

るう車町禍

坂へ

一廻

父

け

< 違

米 寿

朝美

の会

カの

が風

2

いの

ち つ

る城

文高 晏

をつ

0

縁

を

選

金人喝紅木緣〈逆内逆復出兎切縁 あっ さ縁縁 00 n も切っのメル 灯羽 羽のをは根母迫縁 緣 女 12 ダ房も同じことを言うしに揺れる幼な類似をたたんだ息づかい L 房 がなか 子 重に っは き髭が生 忘 生字引き れな 夢 曇 n 3 顔 6 10 Vi み 雀 奈 い 宵 重 白 大 雄 元 英 源 富 枯 瑞 つ 新 美 わ 子 子 子 ゑ 明 人 峰 柏 々 江 三 吾 恵 梢 穂

サワ子 乾 ブランコの縁それから揺れてます 自 寂 分 寥 盃 史 p 0 0 数 切 から n 14 縁 12 は を あ 花 深 る 4-< 緣 す to 0 ŋ 3 数 IE. 可 緑 坊 住 良

79

柳 屈 望

兼題「市民」「街」「部屋 ところ 美作教育会館 とき 読む 「煙」「挙」「竹」「河童 (津山市大手町5の3) 6月5日田 千円 各題2句

宿題 ところ とき 7月17日(日) ★青函博協賛 眺める」「再会」各題2句 海峡親善川柳大会 「乾杯」「大きい」 函館市民会館

13時

第34回愛媛川柳研究大会

5月29日(11)時 投句》切11時30分

★汐風創立40周年記念

集録一敏·武庫坊

特別課題「音」 各題2句 「掟」「残る」「子感」「声」 「ムード」「番号」 投句料 参加料 投区

グ
切

5月15日 ★第11回阪神文芸祭 席題 (三題2句 千五百円 作品募集

ところ

今治中央公民館

3 F大広間

ちば東北子氏が主幹に就任 付で菅原一字主幹が会長に ★川柳宮城野社は三月一日 川西、 西宫、 資格 ている方。 町に本部を置く会に所属し 住・在勤の方または七市一 三田、猪名川)に在 芦屋、伊丹、宝塚、 阪神七市一町(尼崎

会費千円 欠席投句拝辞

動く」「船」「住む」

★第10回記念津山川柳大会 ★NHK学園近畿川柳大会 大阪市東区高麗橋5の50 9月18日13時 朝日生命ホール 16時 郵便番号、住所、氏名(ふ 作品の右側に川柳と朱書し に限る。応募は便箋を使用 雑詠2句、 未発表作 成桜氏) 準賞(八木千代氏) 送局賞を獲得

なお同日、日満賞(森山

参加料 五百円(小為替に

限る

とき 選者 締切 〒60尼崎市東難波町5 〈阪神文芸祭大会〉 8 己之介、紫香 5 月 10 63年6月26日(日 阪神県民局県民課宛 金之助、 H 冬魚 東角 21

大名誉教授杉山平一氏「映 表彰と文化講演・帝塚山短 ところ 西宮市立勤労会館 入選作品発表並びに選評 ホール

原とみお氏がNHK米子放 子氏が米子市教育長賞、 米子市会議長賞、 本社関係では八木千代氏が 句四十七名の盛会であった かれ、出席百三十四名 3月27日皆生温泉会館で開 画と詩と俳句 ★第11回鳥取県川柳大会は 政岡日枝

会(所在地)を記載 りがな)、電話番号、 所属

٢ \$ 五月一日(日)·11時半開場 締切13時

春の川柳大 ところ サンシビック尼崎 三階大会議室 去来川巨城・黒川 阪神電鉄尼崎駅から南西徒歩5分

題と選者 (各題2句) 投句拝辞 池 尾畑

紙 波

春城 坂本須磨代選

智子選 年代選 晴代選

藪 矢

牧郎選

咳

伊東 白虎選

尼崎

主催 尼崎川柳同 好 会

佳作 ★大正9年4月25日創刊の の表彰が行なわれた。 年間賞(新家完司氏 (新家完司、 林瑞枝面 だしぬけに鐘が鳴るのは 『麻生路郎師の額で、

その文中に 員)が自室の紹介をされ、 石曽根民郎氏(元不朽洞会 の「山々の顔」に、主宰の で八百号に!!おめでとう。 ★「川柳しなの」五四○号 川柳きやり」誌が4月号 東上の途次、寄って下さっ 毫を依頼したもの。 を開くことになり、 目に見る。昭和十一年十月 よ風格をあらわすとひいき たので面目をほどこした。 に松本で初めて川柳展覧会 大分古ぼけて来て、いよい たびの事 急遽揮

八〇〇円(発表句報呈

そのとき別に 俺に似よ俺に似るなと

★黒川紫香氏(副主幹) の軸も並べた。」とある ▽同人・誌友消息△

慶の至りです。 三月二十七日、 男のお子さんで御同 初曽孫さん

ている。

★東野大八氏 (美濃加茂市

松江番傘」誌四月号に、

と題して執筆。また「柳宴」 誌四月号に「首斬り浅右衛 に捧ぐ―名句知音に酔う」 柴田午朗句集·空鉄砲

選者をされる。

会の選者をされる。 副理事長)は九月十八日開 門」と題し執筆。 催のNHK学園近畿川柳大 ★野村太茂津氏(和歌山市·

ーで川柳を指導

事)は「川柳京かがみ」誌 ★八木千代氏(米子市・参 任理事)は、 の森公民館で開催の第二期 羽曳野市陵南

念日」と題しエッセイを執 第6号に「私だけの川柳記 川柳教室(10回)を指導。 ★松原寿子氏 (和歌山市· 同人)は宝塚温泉組合百周

旬号で「会釈」の選をされ 事)は「備北新聞」三月下 ★水粉千翁氏(倉敷市・参 入選。 年記念川柳部門作品に佳作 温泉でおんなのいくさ

の世の風」と題して50句発 行「川柳春秋」9号に「こ 任理事)は、NHK学園発 ★高杉鬼遊氏(八尾市・常 執筆。 号に「聖なる夜」と題して 人)は「川柳やお」誌第7 ★西山幸氏 (和歌山市・同 溶きほぐし

NHK学園全国川柳大会の 表。また十月三十日開催の ★石垣花子氏 ▽お便り△ (米子市・本

寝屋川中央老人福祉センタ 任理事)は、約十年前から ★里小路氏(寝屋川市・常 ★塩満敏氏(羽曳野市・常 さわぎます。 内状に、やはり川柳の虫が いのに、春の句会の噂や案 どこの句会にも出席出来な 県大会も近くなりました。

★森井菁居氏

(竹原市・同

病室に。経過良好とのこと

新 同 人 紹 介

池 紫香・〆女・吟平推薦 田だ 仙岩

> ★西村早苗氏 (鳥根県・同

二月にこれという程降雪が ています。 ととたんに降雪の日が続い なかったのに、三月になる

社参事 ★山内静水氏 (竹原市・本

参加者で、いろいろ勉強に なりました。 しました。五百名を越える 大会に、竹原から五名参加 三月六日の番傘80周年記念

任理事) ★宮口笛生氏(奈良市・常

日手術。三月三十一日普通 め半月で五Kも太りました。 手術の予定。三日より好き ラの結果、三月十七日入院 な酒、煙草、コーヒーも止 酒のみの罰当りか、胃カメ (註) 笛生氏は三月二十五

いい春を迎えています。 弟も地元の公立高へパスし を作っていた子ですが、 格しました。小一から川柳 次女が大阪外国語大学に合 分学業に専念するとのこと。 当 うこれ以上は扱いきれない を追って投句者が増え、も です。(編集部 ★両川洋々氏 「湖山駅待合室川柳」 (鳥取市 も月 理

ところまで来て嬉しい悲鳴 をあげております。

社参事 ★小西雄々氏(鳥取県·本

鬼遊、 また各地から祝電とご芳志 十四名、投句者四十七名の 三月二十七日の第11回鳥取 ました。 いただきありがとうござい の御三方のご出席いただき 盛会でした。本社から高杉 県川柳大会は、出席者百三 河内天笑、河内月子

を愛する皆様方のご熱意ご 三月二十一日の五人の句碑 協力のおかげで盛会でした。 除幕記念川柳大会は、 ★堺番傘川柳会

本 社 兀 月 句 会

四月七日(木) 午後六

メンズファッションセンター

やめられるものだ、と三十年前の経験を話さ はない。しかし、やめるときは案外あっさり ち方、条件によるので、画一的な禁煙の方法 タバコをやめる、やめないはその人の気の持 るものが出てきて、喧々囂々になるだろう。 なってきた。そのうち逆に、喫煙権を主張す 権の大合唱で、タバコを喫う人は肩身が狭く のおはなしはそのことに触れられ『今や嫌煙 4 月7日は第1回世界禁煙デー。 賞(田中正坊氏)表彰のあと柳宏子氏 62年度各

初出席は米田恭昌氏(奈良市

今月の月間賞は西出楓楽さんが獲得。 (受付―月子・芳子)

記録―射月芳・月子)

子・杜的・眉水・諷云児・水客・芳子・勝美 路・柳伸・池田寿美子・萬的・千代三・白渓 紫香・〆女・美智子・英壬子・小

天職と割り切り雑用しています

射月芳

カルダンのハンカチならばもっている

杜的

白渓子 はつ絵 射月芳

雑用をさばくジーパン見とれてる 雑用はみんな済ませて墨を摺る 雑用を上手にさばく割烹着 貧乏をしてます雑用しています 雑用の一つ一つにある誠意 恐妻家妻の雑用皆こなし 雑用を避けてホテルで埋める桝 雑用をひとつ済ませて茶がうまい 雑用係を自任していて丸くなる

師の家の雑用をして芸盗む 雑用を片付けて呑む酒の味 雑用にきっちりコーヒー飲む時 雑用をさせられそうで散歩に出 雑用の溜った中であぐらかく 生きてゆく事は雑用かも知れぬ 外は雨少し雑用でもあれば 間

器用さがたたり雑用かかえこみ

正

二郎・柳宏子・重人・東雲・月子・憲太郎・ 狸村・満津子・典子・白峰・達子・頂留子・ 幸・太茂津・凡九郎・三男・英子・悦郎・作 岳人・みね・千秀・史好・鬼遊・恭昌・進・ 文秋・章久・武庫坊・楓楽・度・敏・規不風 清芳・登志実・吸江・一二三・みつ子・冬葉 正坊・いわゑ・はつ絵・智子・美房・柳影・

吐来・雀踊子・庸佑・薫風 藤子・射月芳・寿美・美代子・昭子・寿子・

奥田 みつ子 選

射月芳 憲太郎 憲太郎 美代子 こめかみの辺に雑用ひっかかり 雑用のついでに花を買うてくる 雑用とは違う禅僧砂を掃 雑用が済んだらめだか取りに行く 春風がまた雑用を連れてくる 雑用の中で少うし夢を見る 粗大ゴミいま雑用をしています 押入れを開けると雑用ころげ出る 雑用のなかに埋もれて花が散る 雑用が次次次と妻の留守

席題「リッチ」 山本 規不風 選 花の下雑用などは考えぬ

母の人形リッチな夢をみつづける 老妻も少うしリッチにフルコース パンフレットいつもリッチな夢を抱く 独り身でリッチその上美しい 千代三 柳宏子

白萬紫芳白楓 達 英 的郎 郎

雑用は鞄につめて気儘旅 雑用も好きな事から片付ける 雑用にたんぽぽの絮飛んでくる 雑用は母のものだと決めている 雑用の果てなく続く人生譜 雑用を頼まれて来た万歩計 雑用の一つで金魚の水替える 雑用があるのに長い立話 雑用に疲れて覗く余命表 雑用が貧乏神と仲が良い 雑用が老母を丈夫にしてく

82

チンチラの手ざわりリッチな笑顔する グルメ時代舌もリッチになってくる リッチな店へ下着一枚買いに行く シンビジウム少しリッチな春を買う 朝酒に善人リッチないい気分 単身赴任へ妻訪れた豪華版 一坪の庭にリッチな蘭の花 昔話をめったにしないのがリッチ 連休をリッチに過ごすパスポート 花屋さんの角で別れを言うリッチ 地上げ屋がくれたリッチの遺産分け 生きた金使うリッチな語り草 独身貴族旅もリッチなプランなり 振り出しに立ってリッチな矢をはじく 均等法リッチ気分の女子大生 春夏秋冬リッチな居間で妻の笑み 茶を点てるとてもリッチな気で点てる 仕送りでリッチに暮らす大学生 草だんごリッチな話聞いてあげ リッチにはなれそうもない靴をはく イヤリング揺れてリッチな市場篭 コピーしたリッチが薄い音を出 腹の痛まぬ金を使っているリッチ カード掌にリッチな夢を見てしまう 恋をする娘リッチな春帽子 リッチになろうなろうとおもう泣きぼくろ 三次会になるとリッチな顔で飲み レモンの香リッチな朝にしてくれる はつ絵 諷云児 作一郎 柳宏子 英壬子 いわる Ξ はつ絵 達吐 いわる 雀踊子 みつ子 敏 男

> もよ みなみ リッチな名前ばかり増え 反論をリッチに受ける広い胸 種まきの好きな男でリッチなり 罪深い女のドラマにあるリッチ すこしリッチで木馬の傷を手でかくす シャンゼリゼ少うしリッチに腕を組む 花言葉リッチな夢を持っている 円高のリッチな旅にあった罠 リッチに見えぬ男の下り髭 グラビアのリッチを見てる寒い貌 ッチだと言われて鏡気にしてる 規不風 作一郎 寿美子 郎 久

リッチだと思わせられている政治

美

はつ絵

自己暗示自分に油断させてみる

合鍵をくれた女に油断する 狙うてる方には油断などはない 真直ぐな道で居睡りしてしまい 輪の中の温さに油断してしまう 同窓のよしみでちょっと油断した 成功の一歩手前にある油断 輪の中をみんな味方と見た油断 火葬場の煙油断している春の土手 それからも兎時々油断する 打ち返す浪を忘れていた油断 ブラックコーヒー女に油断のない 満津子 柳宏子 登志実 太茂津 萬 的

高鷲亜鈍傘寿記念川柳大会

川柳ねやがわ五月句会

会 B 寝屋川市民会館 昭和63年5月15日(日)1時開場 京阪寝屋川市駅下車、京阪バス東二番 発車(5分·25分·45分 乗場より31バスに乗車市民会館下車

①住(棲む

高鷲

事前投句

〆女選

3自分 ②めでたい

高杉

(5高い 4青い

⑥鈍い

油断なく構えて寡婦がくたびれる 切り札があって油断をしてしまう 正直な口車だから気を許す ふところがふくらんでいる油断する

花ね

住田英比古選

奥山

晴生選

各題2句

薫風選

※①は5月7日までにハガキで左記 出席子定者に限る

三千円(懇親会費・入選句集含) 寝屋川市三井が丘三丁目五番 七—一〇二 高鷲亜鈍宛

7 572

会

Ш 柳 ta B かい b

作二郎選 鬼遊選

油断のない顔で雛人形箱を出る 底抜けに笑っていても油断せず こも樽の底にひそんでいる油断 八方破れに見せて油断をしてい 悪魔にも油 ライバルのミスを笑った日の油 自惚れている日の油断忘れてる 瞬の油断を鬼は見のがさず 断する日がきっとある いわゑ坊 柳 小柳

私好みの顔で油断をさせられる 雑談に油断は出来ぬ壁の耳 冷蔵庫妻よ油断が過ぎないか 隙だらけの生きざまながら油断せず 寿美子 水客 柳 進 女

引き分けの線で妥協しておこう

雀踊子

坊

油断する方が悪いと掏摸思う 花買うてうっかり傘を置いてくる 振り向いた油断へ毬がはずみ出す 風船の赤がしぼんでゆく油断 一本のレールを敷いて油断する

> 耕智 寿

美智子

錆びているナイフに油断してしまう

泳がせて一網打尽の策を練る

作一郎 満津子 泰子

杯の底に油断がしのび寄る 受け皿のひびになかなか気がつかぬ 道幅がだんだん広くなる油断 油断大敵スパイスが利いている 一大敵されど亀にはなり切れず へ油断のできぬモノローグ は 白 千 吐 太 茂 津 水客

おだてられていると解っている互角 指人形孫と互角にケンカする 二三選 太茂津 智 子

せめて妻とだけは互角に話したい 社を出れば互角で天下論じます

傷ついた翼もまじる北帰行

男性と互角と思う肩パット 互角の将棋指の先から熱くなる あしらわれていたを互角と思いこみ 共稼ぎ妻は互角に口を利 お隣りと同じロースを買いました 互角からいずれ傾くやじろべえ ぼちょぼの成績だから仲 が良 柳宏子 正昭悦

ワンテンポ遅れる妻の居て互角 椅子ひとつ互角がねらう深い闇 ちょぼちょぼの暮らしで向いと仲がよ 互角と知ったか変化球投げてくる 夫婦独楽互角に廻る思いやり 互角だと見られてファン不満持 小憲太郎 杜规不風 智 諷云児 白溪子

均等法女の挑戦状がくる 言い張った互角は負けを意識する 決め球を温存互角というゆとり 嫁はんと互角に喧嘩できます 均等法女互角に飲んでいる プラスアルファで互角にしてもらう 武庫坊

敵に塩送る余裕を持ち互角 縄ノレン互角の顔で飲んでいる 共稼ぎ互角の財布からもつれ 父はまだ互角の積り四股を踏む 頑固さも互角で夫婦仲がよ 諷云児

はつ絵 射月芳 紫吸緑 子 江良

お隣りのしゃべりと妻はいい勝負

互角だが財布は妻が握ってる

近 畿文字放送作品 募集

声 高 風 選

題

ガキに明記の上、 大阪市東区谷町2丁目 3句 近畿文字放送 大手前ウサミビル 左記へご投句下さ 締切 5 月 15 Ш 柳係 3階 百 Va

チョボチョボの暮しを背伸びする団地 竹の子よ明日は互角にきっとなる 互角の敵がいつも鏡の中に居る お隣りと肩を並べている疲れ お隣りと互角になった鯉のぼ 互角とは思えぬ釣書持ってくる 花持たすゆとり互角で引き下がり 椅子深く掛けて互角にわたり合う 自画像と互角の勝負して了う 互角と見せて切札はとってある しげお しげ 客 来的お路

神谷 凡九郎

雀踊子

秀 男

ときどきはカラスの群れに居る私 鳩の群れ平和シンボルから遠い 稚魚の群れみんな尾頭ついている 矢印の道で雑兵群れとなる 流し雛の群れがこころを遠くする 群集心理を知ってた針のない時計 作一郎 介

太茂津

84

群を離れた一羽に赤あか陽が落ちる 善人が群れるとこわくなってくる 一群れのペンペン草にも天がある 人の群れ男の主張見えかくれ の群れこんどはどこにたかるのか いわる 私は私 の群 れを見飽いた檻の猿

群衆という名で人生止めはるの 楽団のどの眼もタクト見逃がさず 斉に右向く群れにある不安 群れから離れよう

高 蕭 風

いる

はつ絵

芳

吾が乳房抱けば熱きこと哀し カナリアの無口卵を抱いてから

太茂津 寿美子 しげお 路 ひと言を大事に抱いて待ちつづけ 救急車しっかりせよと抱きおこし 長寿国八十路の老母も夢を抱き 大志より小志なら抱く新人類 胸に抱く夢の重さに崩れそう 赤ん坊母に抱かれてすぐ寝入る 線に並び闘志を抱いて春

しげお

昌

凡九郎

武庫坊 いわる

好

英壬子

珠

緒

射月芳

群なせば人間蟻に潰される 群がればちょっと悪戯したくなる 迷子にはなりたくなくて群れている 人混みで背中を押されないように 雑兵の群れには温い飯がある 首ひとつ群衆の中から天を見る

t

典

泰

雪洞は桃色少女は夢を抱く 真珠貝人魚の涙抱いている あだし野をさまよう小さな灯を抱いて 孫を抱く顔は他人に見せられ ふるさとの山に抱かれて星に抱かれて ぬいぐるみ抱いて虚ろな子が育ち X

年千鬼正恭

代

忽然と群れから消える日もあろう

太茂津

抱く話何で他人がお節介

路 的 つなぐ掌の強さへ群れの輪が満ちる

群衆にこびずに生きる筆の跡

憲太郎

雑兵の群れで変わった夢を持つ一人 ジョークのない人は群れからはずされる 群がりを覗いてみたい欲の皮 僚船へカモメの群れのいいしら

エリートの群れから落ちた鴉です

思い出を抱いて脱皮がまだ出来ぬ ふるさとの山に抱かれて立ち直る 雛を抱く燕は人を信じきる つからか抱くのを忘れ朝になる れの海に抱かれて修羅を越え

色褪せた栄光を消す人の群れ 故郷の川メダカの群れが見つから 信念も思想も持たず群れている

do

良

の音枕を抱いている私

射月芳

哀しいことに群れに居ないと落ちつか 辺境のおもいが五百羅漢にも 女王蜂一つに群がる蜂のさが ただ酒に群れる男の眼と思う 群星を仰いで人間虫ケラか 群衆を裁くと怖いことになる

X2

登志実

凡九郎的 重

武庫坊 耕

花

大志を抱けとほったらかしにされて居る

水

選 眠るなら山ふところに抱かれ 夫婦岩波抱き寄せて抱き寄せて マンションでたんぽぽの野を抱いて 止り木に爆弾抱いている男 ふきだまりで抱いてる寒い裸ゼニ

どの皺もドラマを抱いていて愛し モナリザが抱いて下さい言うている 子を抱いて人の好意をすぐうける 夢を抱く少年の瞳に揚げ雲雀 神様に抱いていただきたい手術 人類の気儘何時まで抱く地球 気がつくと他人の卵抱いてい 孫の抱く夢を肴に酌み交し 悔いばかり抱いてちょいちょい風邪を引く ノラを抱きマリアを抱いて女なり 看護婦に抱かれておじん固くなり 縦縞横縞みんな約束抱いている 春の陽に溶けぬ思いを抱きつづけ 花の雨お地蔵さんも憂い抱く た

白渓子

鍵っ子よ隣の大は抱かれている 清記

故堕駄氏供養として 西宮市)より

草 XI)

一封拝受いたしまし た 柳

塔 社

85



作品は雅号も含めて20字まで。 締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。 担当·玉置重人

りし日の君の面影したいつつ 北川柳会(前月 分 神夏磯典子報

人肌のお酒で心和みます 肌の色違うが気慨は皆一つ

のよい隣人でほっとする

炉 悔いの無い人生だったは嘘になる

近

盛り場の躍る言葉に酔わされる 温泉の盛り場妻と見るポルノ

智恵子

盛り場のはずれ美人の占い師 盛り場の一円玉は孤独です 盛り場を素通り出来ぬ男です 北風はやさしい音が嫌いらし

今日子

流氷の海も生きてる泣いている

宅配がもう届いてる旅帰り 宅配が夢を届ける旅みやげ

運命のいたずらジャンケンポンで決め 人間に懲りずに古稀の風を吸う 懲りたのは口だけと知る人が居る 失敗に懲りない男明日を見る

過疎の里何時までもつか老齢化 ジェット機もはじめて降りた吉備の国 ジャンケンで負けてばかり節くれ手 理学部を出てジャンケンが弱い人 天の声聞いて悲しい年になり 文 鮫虎狼 佐加恵 健 九 金紫 拓

中国路

桃の道にも国分寺

仙吉郎

よし子

悟

郎 珠

綾

自分捨て人につくす父憎めない 絵を描いて画家は絵筆で遊んでる ほのぼのと春の便りを梅二輪 八十五まだまむし酒飲んでいる ぼやきつつテレビ見ている父である

若き日に遊びし友も腰を曲げ 暖冬の雪スキーヤーに怪我みやげ

聞いて秘湯の月明り

満月に夜逃げの街が明るすぎ 夜警する靴満月にいたわられ 満月の田圃でうなる脱穀機 山の嶺跳ねる満月見る車窓 サラエボの教訓カルガリで甦る

秋吟中柳 万平建郎

鉢の中泳いで金魚恙なし

水族館美醜仲よく泳いでる

魚偏をよく知っているおじいちゃん

遠き過去まるめて投げる雪の玉 コップ酒一杯でこと足る幸せさ 故郷の香りなつかし寒の餅 念入りに頼んどきますポックリさん

忍従の蓋にも限度女翔ぶ 肌を射す寒さへ祈り深くなる 声かけて来るお隣の嫁が好き

純

静典

ら致された海岸散歩が恐くなり 予算委の船頭舵を取り違え

風郎

鳴門鯛の棲みかえ橋の杭がたち

赤道を見たスーパーの冷凍魚

吾峰

テルミ

暖冬にふりまわされた蕗の薹 耳鳴りが眩暈も一緒に連れて来た 食べ残す国あり飢える国もあり ままごとの遊びがばらす嬶天下 寒鰤に日本の味生きている ジソンが子供の遊びみんな変え

峰歩郎

満月が迎えてくれる無人駅 裏切りをするには月が丸すぎる 満月の夜道へ屋台は二月の

灯

月に老いの歩みの背を丸め

サークル檸檬(前月分)

片岡智恵子報

番

三四子

千代女

少しずつ伸びる日足へ気がなごむ 独り住む母の夜なべの灯が赤し 思い出を拾い集めて師を偲ぶ やる気満々過疎にも可愛い嫁が来る

井上柳五郎報 ふさ子 満津子 登志代 右達 倫正公白静

草 水路

進

宅配が今日も隣の戸をたたく

たけ志

花の頃今度は泊りがけでくる 八尾市公民館川柳教室

鬼遊報

能

魚心あるけど水が汚れすぎ 刺身にもできる鰯を売り急ぐ 食卓の雑魚の面目カルシウム

瀬戸大橋できて魚が泣いている おっとりと泳いで金魚十二月 組の鯉に男のロマンかな 大漁を祈る勝手な慰霊祭

重

坡治

暖冬に節分前の初鰹 釣竿も所詮夫の暇つぶし

トシエ

塩水がしまぬか魚目を開けて どの川かお里帰りに迷う鮭 片側の目に言いぶんのあるひらめ 恵以子 春道

シマ子 百公 0

成 86

魚と水水と月にもあるこころ 川柳ねやがわ

甘き香の漂う温室の花盛り 高田

温室のトマト・キュウリに香りな

一人児はメロンの様に育てられ

自腹切る店と社用の店をもち 誘われた方が自腹切っている 折れた矢を拾い未来をあきらめず 真っ先に来て悪友は血をくれる 古里の味宅急便が夕暮れに 飼い猫は温室育ちで肥満ぎみ 創

曲ん手

なつめ 波留吉

領収書要らぬと自腹が胸を張る

温室の中では誰も裏切らぬ

美しい未来が欲しく手を洗う

さかえ

自称未来派仕事はいつも明日にする あやめ おさむ 春

バツ印つき戸籍から子が消える

燃えさかる恋の炎が消せますか

あの人の好きな味なら好きになる

この後は自腹でっせと念押され 根回しの自腹が高いものにつく 味一つ落して長生きしてもらい 時代だと思う娘に負け孫に負け どたん場で温室育ちどじを踏む 日和見へ探りを入れて切る自腹 温室で育ちいちごも器量よし 此の齢でまだよい方と医者が言 温室で虫もつかずに嫁きおくれ

お年玉その手の未来考える

単身でやっと分かった妻の味 シブチンが自腹を切って花を買 うぬぼれも少うし許す未来地図 温室で育って背丈だけ伸びる 接待が済んで自腹の屋台酒

世話好きが土壇場に来て切る自腹 温室のおとこ鼻毛が伸びている 洗濯機のブザーが呼んでる長電話 来世もこの父ちゃんと行くつもり

年暮れる路傍の石になり切れず それからは部下がついてくる自腹 味だけはどこにも負けんという老舗 干柿へ風はきびしく吹き抜ける 一言が折れて夫婦の夜が戻る

白と黒背中合わせでくる未来 生き死にの峠を越した粥の味 筆記具を豊富にそろえ筆不精 未来は未来今はあなたを離れない 相づちを打ったばかりに切る自腹 温室でうその上手な花が媚び

自腹まで切ってセールスそつがない 中西兼治郎報 紫

まさお

てまり

シマ子

亜也子

成

英壬子 礫

柳宏子

味自慢ソースかけたら怒り出し 晩酌で俺の誕生日と気づき

消そうにも消えてくれない過去の罪 恭 昌 さと美 すすむ

即席の味で静かな妻の留守

かすみ

味しめた鬼がくりやの戸をたたく 寺に咲く佗助浄土見えてくる

頂留子

シルバー席マルサの女息をのむ

ケシゴムの跡があちこち老母の文 運命とは消えるほかなし春の雪 嫌われてそれでも生きたい春の朝 割勘の半端黙って出しておく

次の世も添うといけずな妻である

第十九回

贈呈川 東洋樹 柳大会 川柳

ŧ 昭和六十三年五月八日 十時三十分開場 日

۲

ところ 神戸市立福祉センター 湊川神社西門前

Ti

、五〇〇円 (記念品・昼食

発表誌呈

吉之助

酔う

〆 女

凡

遠い 声

山本

哲郎選

長谷川紫光選

晴生選 蘭幸選

深い」

小松原爽介選 梶川雄次郎選

各題二句締切十二時

特別課題

識

食う」

和田

光代選

宴

会 三、〇〇〇円(当日受付)

時の川柳社

身近な人にうそを重ねた夜の悔い 老い一人身近の他人と打ち解けて 友情にささえてもらう曲り角 同病で互いに友情ぬくめてる 危機脱し部屋が明るい千羽鶴 その芸は古いと鏡に教えられ 特別公開身近に拝んでいる秘仏 薬草を身近にあるを知らず買う 友情を考え直す白い風 日溜りに老いの友情温まる 友情をすっからかんになって知 死ぬ話明るい顔でしてくれる よく止まる振り子に無量寺のお灸 母さんの嫌いな道へ子が暴走 嫌われた訳がどうにもわからない じっと耐え七十五日の長いこと 思い出の 消ゴムのマニアが一人うちにいる 太陽がとても明るい春をくれ おてもやん明るい空気にしてくれる 嫌いではないがお金に嫌われる 映画見て 映画見てお茶飲むだけの間柄 人生の振り子はずみのつくときも シネラマの迫力に酔うSの席 嫌な夢窓一ぱいに ゆうゆうと振り子せかせる追っかける 二面鏡今日の笑顔を選っている 十八の鏡六十八となり モロッコ」の話になった輪のひびき 駒つなぎ川柳会 何も言わずに御堂筋 席で涙のリバイバル 叩き出す 小路報 いつを 雲 登志実 覚然坊 頂留子 憲太郎 章眉 みつ子 宏良 緑 章 風 秋 的治美 水 気がつけば身近にあった瑠璃の玉 出世コースに魔女が時々出入りする 友情の枠外にあるお付き合い 残業をねぎらう湯気が立っている 身近にも世話にはならぬ老いの意地 病む妻のまくらの下にある鏡 きな臭い話身近に立ちこめる 愛は静かに友は烈しく手を握る どん底の暮らしへ友の縄梯子 踊り子の絵の明るさがあるめ 明るい町で誰はばからぬ自己主張 鏡掛とるのが怖い病み上り 明るさが部屋に漂う七分粥 稚気満々お好み焼を焼いている 鏡の裏で泣いているのが私です 友情をこわさぬための線を引く カーテンの色も明るい嫁がくる 千枚の鏡を抜けておんな老い 本当の自分を失わない鏡 悲しい日は身近に素焼の壺を置く 身近から出ている噂だと思う 悪友になる程情深くなる 友情に甘えてならぬ棒グラフ うちの鏡いまだ小判は出てこない ほっといてくれる友情ありがたし 昨日の涙今日の鏡が消してくれ 恋したか娘鏡によく座る 大仏の身近で仁王立ちつく 美人でしょ」を聞きあきている鏡 の深さに慣れて来ましたひとり 西宮北口川柳会 し屋 旅 河芳 郎報 武庫坊 壮之助 曲ん手 作一郎 雀踊子 比沙胡 柳宏子 美津枝 千代三 鬼悟新 IE 潔度 公公 信好遊郎造 土器破片パズルのように張り合わ 職退いてコース離れた身の置き場 セールスが我が家を避けて行く平和 税務署の机へ涙置いてくる 黄砂来て春の足音近くなる 握る掌に愛がつたわる青春よ 瘦馬の手綱を握る妻がいる 足音が乱れた男頼れない 小走りに近づく春の足の音 デパートを気軽にひとり小半日 握りやの叔父だが寄付はポンと出 花盗人の足音だけは聞きとれぬ 足音が揃うとラッパ聞こえそう コースから外れることのない夫婦 おぼろ月今日のコースは彼まかせ 足音の孤独ソウルへただ走る 誰とでも気軽にしゃべる春の酒 握らせてから怯えだす法の網 帰ることのない足音を待っている なんとなく 足音敗れて女の掌に帰る しのび足又冷蔵庫開けに来た 雨しとど春の足音聞いている 弱点を握られている花明り 失恋をしたとも知らずばらが咲く 母の日も母は気軽に茶をいれる コースよりまず能力を考える りの砂にも春の詩がある 歩道を一度渡る

師を訪ねたい春日 カードで気軽にされる金 い正保眉 わる坊蔵水 園青 十三工 みち子 美智子 伊三郎美芽 江求よし津 步珠矩 郎 伸影

静

秋

せ

7

子る女的雄子代

英 千世子 諷云児

妻よ老妻杉村春子であって欲し 背を丸め浮世の苦労消してゆく 足音を殺して渡る恋の橋 フェルトのスリッパにかえる見舞籠 足音で今日の機嫌を推しはかる サンダルも春の歩調に合ってくる 粗大ゴミ足音高く家を出る 残り火を握りつぶしている平和 気がつけば妻握ってた主導権 キーポイント握ると踏み絵でも踏むさ 数珠握るその手で遺産数えてる 添え書きが裏まで握っていた力 切札を握って芝目読んでいる 握ってる紐の長さで踊らせる 欲張って握れば抜けぬつかみ取り 真っ直ぐに行きたい愛の曲り角 蹴落して来た足音だ闘魚の瞳 喪の足袋を干してひとりになる女 御曹子カーディガンでやってくる 喪の家を春の足音通り過ぎ 釘抜きの届かぬところ嘘ひとつ 電話まで教えた返事がまだ来ない 妻子あり無念のこぶし持ち帰り 画廊冷え冷え和服の女が立っている 旅先の放言にして言う本音 握る手を握り返して病んでいる 言いにくいことを吐き出す国訛り 一月堂の足音聞いて春が来る ハビリに一声弾みをくれる人 葉は知らないけれど樹を植える 世紀の足音がする幼稚 六紫曲 勝茂 獏 郎 太香手 美 坊 沓 陽露子 御 百万両 善太郎 みつ子 白渓子 三笑子 文み 白俊米 萬 水房定 IF. 前 夫ね仙 朝 的声

> 大胆になった女の坐りよう バス値上げ疲れが残るほど歩く 妻がうしろに居るから歌えない 皿洗いながらスピーチ暗記する 噂の人を皿に盛りつけて夕餉 啓蟄や犬も一緒に小便し セピア色の雪見障子が亡母を恋う ランスを崩したとこにある手摺 堺川柳会(一月分) 河内 夫 月子報

車間距離あけたところへ割り込まれ 母ちゃんの信号無視を子が叱り 旅立ちの抱負を橋は聞かされる 橋渡ししたばっかりにくされ縁 オキナワの心に橋が届かない 爆笑につぐ爆笑で泪拭く

台本にここで爆笑と書いてある

线

花の芽が出たぞぶらぶらしておれぬ

みつ子 はつ絵

年

朱の橋でにっこりポーズする二人 人なさけ橋の名前も消えました 国境の旗に祖国が二つある 郷愁を振り切る橋が揺れている 何の日か知らんが市役所に国旗 私にも真知子の橋があった筈

凡九郎

雀踊子

吊橋の真ん中辺でライバルと気付く 初デートシートベルトの思いやり 火の橋を渡った遠い日を思う 爆笑の渦に年寄りふて寝する 今社長隅で見ている橋渡し ゆれ動く胸をなだめて丸木橋 ゲーム終ると一つの橋が壊される ハンカチに包もうふたりだけの橋

目分量母のたしかな隠し味

与呂志

紀美女

いち日いち日を自分の心に問うてみる

男にリンゴ赤くなる

雀踊子

水

射月芳

万亀子 梢 三枝子 しげお

脇道に飽きて普通の人となる 藪椿の深手は誰も知らんぷり 湖も深ければこそ深い藍

冬の木に揺れているのは過去の貌 不意をつきスローカーブを投げる妻 10 わゑ代

n

月冴えて父が恋しい冬の橋 長生きがしたくて違反などしな 車買う前にマナーを子に教え 吊り橋を扶養家族がついてくる ヨシモトで笑い疲れて無口なり 渦潮のはげ

しき中の 橋渡

浩外完鬼天

郎郎吉司游鳳

西尾栞傘寿祝賀記念句会 月子報

地 10 選 (前月号より 佳 秋

佳句

拍手をしよう少し曲った亡父の釘 弾まなくなった手毬と通じあう 子を五人産んでひとりの米を研ぐ サッカーをまじめにやってけがをした(小五)由 眠っても眠らなくても朝になる 頭陀袋いつか浮世の旅に慣れ 温もりがほしい人形の細い眉 いちばん協力してくれたのはおとし蓋 きく子 狂 菜 智 虎 枝 野 子

柳右子

頂留子

らくがきの傘の仲なる君と僕 不意に来てすまんすまんと飲んで去に 渋滞を縫って疾走したバイク ポストへも車で走るあかんたれ 傘干して昨日の悔いをたたみ込む 着たくないけれども不意に要る喪服 夫とは深いはなしをしておこう 泥沼の深さ知らない方がよい ぶらぶらとしてるが金庫握ってる 蛙の娘やはり蛙を連れてくる 特売の傘を忘れたことがない ぶらぶらを刑事ぶらぶら尾行する 真剣に生きて深爪切りすぎる 蓑虫が悟ったように揺れている 坂いくつ越えて深まる思いやり 水に逢うまで深く深く掘ってい 祈りとおして普通の紙を鶴にする 普通に生きてとうもろこしが美味 深い訳聞くつもりない紙コップ 泥みんな吐いた日眠り深くなる 事故のないように見送る霊柩車 姉弟の話深く大きくうなずいて ぶらぶらと遊んでいても社長とか 不意に出た言葉男を軽くする 地久節重ねて祝う師の傘寿 深いから覗きたくなる故郷の井戸 抜擢という名で不意に飛ばされる かい念の中で薪を割る いて行く V 千智武三 寿 子子雄男 千朱か千日千荒正幸 な 校 秀夏め春子代介坊生 登志代 紀美女 武庫坊 太茂津 登志実 諷云児 ベレー 平凡が好きでモンペの好きな母普通ではあのカラットは買えぬ筈借り傘の情けを妻が干してくれ 咲いたまま落ちる椿の音がする ひょうたんぶらぶら寒い話がまだ続く わが町をぶらぶら歩いたことがない 霧雨に粋な蛇の目が遠くなり 王様も普通列車に乗りたかろう 道草が好きで普通の子が育つ 契り交した後は深い深い闇 もうちょっと普通の声で叱りたし 祭りの裏側がすきで深まりゆく傷だ 深い溝出来てからではもう遅 混んでるかそうかと五十び地下で行く 水中花普通の愛がほしいだけ 普通では目に止まらない杭を打つ ライバルの前ではぶらぶらしておこう 新車が走るローンの音で走ってる ぶらぶらとしてても年金いただける マンホールどこまで落ちるイヤリング 春や春コウモリ傘にある情事 ぶらぶらとぶらぶらが会うパチンコ屋 衰えを知らぬ八十路の男傘 不意の電話もうあの頃に戻れない 普通なら兄が継いでた三代目 カルダンの傘を与作がさしている とび込んでみようか素敵な男 割れは今も深手に泣いている 町その気にさせる蛇の目傘 帽の上には深い天がある 晴間をきらう二人連 あか里 かりん 雀踊子 柳宏子 金三郎 左久良 武美 助 欠け雛の由来 向い合うだけで安らぎある暮 匂い袋まだまだ妻に武器がある 押売のお世辞に負けて鏡みる 風花で終る今年の冬の空 普通にはもう戻れないシンデレラ 老夫婦笑い袋を買って行く 伸びる芽をつんだ誤算の花鋏 おいづるへ朱印をもらう母の旅 喜びを伝えたいからひた走り 亡き母の今も間に合う知恵袋 ふんわりと触れた感触 炎えた日のきものは蘭の香が匂う 痛ましや民話の里のブルドーザー 横車堪忍袋に火をつける 数え唄の様に世の中動かない 八十一稚児に還りて歳忘れ 袋ごと持ちてかけ出す子に負けず 美人から不意討ちされたことがない 不意に声かけてサングラスが笑う だし抜けの電話でお宅坪なんぼ 急停車してタクシーが客拾 ウインドに服ぶらぶらと主義がない 吟詠を重ね傘寿に鞭を打つ 一尺の小布で孤児の謎とける 入学を喜ぶ孫の笑顔かな ぶらぶらとなす事もなく肩がこり 夢千代に逢う宿下駄は腹ごなし 晋通でも酔うても人を叩く 城北川柳会 旧家の重み知る Vi 神夏磯典子報

90

珠郎

ただし 寿美礼

みさ子

千れて東柳笑 万 万 い代雲伸痴

天月

八重子佐津乃

白 峰郎

温正達

ふさ子 公

うたた寝に亡夫の声聞く風の夜 駅に立つ信玄袋の立志伝 馬場選手十六文で座を守り 婆ちゃんの袋に詰まる孫の夢 過去の夢追う日々続く老いの春 淋しさが多弁にさせている電話 趣味の声生甲斐となる老いの坂 骨董屋明治の顔で出してくる 足の爪反抗するように伸びてくる 踏み切りへ助走の距離を確かめる ひとしきり雨を眺めて気をしずめ 大仏と遊ぶ大きなてのひらで ルンルンで足もと軽くフルムー ーゲンに走る女の足かる

> 登志代 トキワ きくる 器用な手村の行事に使われる 話好き器用に蟹を食べている 不器用だが真面目がとりえ金庫 何にでも器用な姉が嫁きおくれ のらくろが好きで器用な儘老

金婚式地球の端で妻と生き 配置替え器用にシェーカー振っている 土器に落書むかし器用なひとが居た

とおる

空部屋に地球儀だけが残されて 航空便地球の裏に友がおり カルガリー地球の裏で滑りっこ

彰

とし江

ひとり旅夜更けに猫の声をきく ぼんやりと見ている雨の辻が好き 地球儀をまわし平和の国さがす 地の虫を閉じこめてゆく槌の音 弱いからすぐ大声を出したがる 日だまりの猫せのびしてあくびする 味噌汁のグルメ煮干で出汁をとり 夢を追う仕掛けは旅と句と酒と あと少しで地球は四月馬鹿になる 飢える子と食べ残す子といる地球

兄にフト異性の臭い感じた日 兄欲しい年頃になる一人っ娘

槻川柳サークル卯の花

河瀬芳子報

秀

細切れで地球を買ったマイホーム

生きてゆく地球に迷路多すぎる

諷云児 多賀子

第十二回全日本川柳大会

会場 千葉ニューパークホテル別館 昭和63年6月12日午前10 時

千葉市港七一三・京葉線千葉港

宿題第一部(事前投句5月10日締め切り 花 志水 白井 剣人選 花戦選

紫苑荘選

※3・5×18センチメートルの句箋に 谷町七丁目一一三九新谷町第二ビルー 枚に一句記入し、一五四二大阪市南区 ○六号「日本川柳協会大会係」あてに

百合子 美智子

スミ子

送って下さい。

宿題第二部(当日出句

曲白森 手李生

書く」 ロビー」

答」

玉野可川人選 良子選 紫香選

あきら

第一部・二部 夜明け 千円(振替口座…大阪七 -三五七五) 共2句吐 猿田 寒坊選

第一部投句料

È 催 日本川柳協 会

— 91 −

兄夫婦と母をどうするかでもめる 四つ辻で犬も信号待っている 四つ辻の地蔵に花がまた増える 墓碑銘の兄の階級むなしすぎ どっしりと座ってみせる兄の意地 エリートの兄貴が一人いてグレる

親ゆずり兄にもあった女癖

発言権なくした兄が忌に戻る

長兄が恙ないので油断する

白渓子 見えかくれする幸せに蕗のとう ジャンケンでおむつ替えてるパパとママ 棄てるのを思い切れない粗大ごみ ネオン街黒い川にも化粧させ

義理チョコを妻にもらって波静か

式服の余韻夫と酌みかわす 酒煙草飲みますカメラも飲んでます

さと美

人生を器用に渡る酒を注ぎ

やき芋屋辻を入った音になり

辻曲るとこで振り向くランドセル 三つ目の辻嚙まれた犬がもついない

四つ辻に佇てばドラマになる女

説いたはず済んだはずのしこりまだ 言うだけは言うておこうと子に説教 そこだけが暖かそうな紅の梅 ストレスも連れて行きます美容院 会いたいと思う人あり途中下車 寒椿真紅に咲いて人を待つ 減量中ケーキ横目で唾を吞む 洗濯機スト始めるか高い音 葬式のレンチャンとうとう風邪を引き 冬の夢蝶も蛍も雪の精 差向い時々欠伸出る湯呑み 定年へマリオネットのひとり言 渡ってはならぬ川だと知っている 春呼びに行って帰らぬ寒鴉 さくらメール届いて我が家に早い春 節分に鬼悠々と豆を食い 七変化沖縄の色海の色 プライドが許しませんと言った嘘 ゴッチャマゼ老幼仲良く凧作り ふる里が包んでくれた国訛り にんげんの汚れを洗う川の水 自分史にテフテフの字が未だ残る 土地売らぬ気性知ってる葱坊主 妥協するその日その日の蒲団敷く テレホンカード偶には嘘もついてくる 自動化で五感の作用狂わせる 焼け残るヨシにやさしい風が吹き 命名の字に願望が込めてある 煮こごりの好きな女の国訛 川柳泉尾 吉川 河芳 寿美報 三千代 三はつ子 武杜求 庫 坊的芽 道 シメ子 鬼 トミ子 しげ お 風邪引かぬようにが老いの合言葉 欲と夢又も梅田へくじ買いに 果てしない夢を叶えてくれる夢 新旧の良否見分ける眼が欲し 靴紐を結び直して夢追わず 保険屋が相手にしない齢となり 夢醒めて汚職の金が怖くなり 夢で見た神のお告げを信じよう 豆撒きや昔なつかし赤鰯 じっとしていようと思う三りんぼう バアちゃんのセンスで旨い茶が入る 中身だけブランドものでないセンス 雪の中梅の紅だけ華やいで 喜びを分けた亡夫の夢を見る 運の良い野良猫家の女王様 梅見では幹事なかなか動かない 自分では果せぬ夢を子に托 立ち居振舞センスの良さを逃がしてる 良いセンス褒められ買い物値切りかね 普段着にアクセサリーでいいセンス 途中から貴男が見えぬかくれんぼ 罠らしいと途中で気づく流れ星 ラッピングセンスがわかる贈り物 まだ途中これから長い夫婦坂 途中にはいばらの道もありました 人居の鍵あける音淋しすぎ 草 和子報 比呂志 ときお 寿 美津子 てつお かな女 きよし 淑白悦

郎

偏差値に削られてゆく僕の夢

ていねいに砂丘に埋めた冬の恋

男とは晴着見ないで顔を見る 冬の冷え女一人の身にこたえ 悪人にしては素敵な夢がある

おなじみの声が流れる回収車 久しぶり皺が疎遠を詫びている 迷わせてくれたお人と久しぶり 久し振り逢うた孫から見おろされ 古包丁なじんでリズム軽くする 久しぶり老母の叱咤を聞く安堵 久しぶりどなたでしたといいそびれ 病み上がり五臓六腑にしみる酒 久しぶり寝こんで夫の愛に触れ 久しぶり渾名で顔を思い出し 一年の沙汰を賀状の筆に聞く 三幸川柳教室

ブロッコリの欠けらが生きるお弁当 千秀報 重延 与本政作正美 志 棒 代 秀 枝 房 久寿男 和雅 みのる つやこ 佐 一枝

新妻の唇あどけなし冬苺

一坪の私の庭にも香る梅

風花にそっと民話がよみがえる

ツずつ小さな春をくれる梅

水槽の海鼠よ何処の夢みてる

夢に見た彼女の便り古稀とある

梅一輪あす廃線の駅に咲き

被写体の梅もそろそろくたびれる合格をさせて神さまほっとかれ

初恋に梅の白さが目に残る 初恋の夢を邪魔する妻の顔 ちぐはぐな夢を追うてる倦怠期

かい

おなじみが揃い酒場の灯が温い 曇りガラスに馴染んでしまう冬の天 白い杖数えきれない恩を負い うつりゆく時代は昔寄せつけず ドラマ程いざという時救われず 母さんの正月お客が去んでから たとう紙を開いて年始の帯を締め 髭の様剃ればなくなれ顔の皺 ウインドーに写して猫背伸ばし行く 大賞の歌だが大分ずれている カラオケのテープも供え通夜の席 夫唱婦随カラオケだけは妻が上 新時代カラオケ上戸も増えました 尻込みを遠慮とマイク突きつける カラオケに酔って日々好日の妻 カラオケがすんでやれやれ拍手する 蛮声の寮歌カラオケなどいらぬ 琴瑟は和すがカラオケ合いかねる カラオケのアルトに合わす猫の恋 血しぶきが見えそう唄う田原坂 カラオケのメロディーみたい冬の風 北の地になじむ根雪が溶ける頃 なじみなど無いがたずねてみたい町 なじまねば孤立していく檻の中 おなじみさん来る頃焼鳥出来ている いつもくる近所の猫と日向ぼこ 一筋に生き手になじむやり鉋 久世川柳クラブ 前田美 福重美 吟平報 かなめ 夏 智水庵 孝治昭高育 幸 英静志江 周 秀

> する気なし平気でおれる子に育ち 流行を遠くながめる年になり 流行にこびぬ備前の渋い色 どの店もテレビゲームは売り切れる 流行を追うたヒールで豆を出し 流行が何んであろうとズボン好き 母心流行着せて風邪をひき 少年が夢を託した流れ星 わ n

> > 千代女

美恵子

寿司折りがずいぶん梯子した形

遺児二人かかえた寡婦の

0

プしたボトル並んで待っ

る

サイレンがうなり平気があわてだし ふところに入れたつもりで献金し 他人のことなじる言葉に平気顔 見せかけの平気の顔にあるかげり 株暴落ニュース平気で見る庶民 平気とは言っても気になる年となり

少年の大志世界の空をとぶ 朝刊のバイクに朝寝笑われる 満点の自信平気の発表日

賛

もろもろを捨てて仏間の灯と生きる

あの人の手にはじけたい鳳仙花

子離れの春へ一輪梅匂う 再婚へ寡婦の自由がまだ迷い 孫が来てばあちゃん自由奪われる 盛装のあでやか競う成人式 赤札を下げて冬物急かされる お見舞いのショック鼻から通す管 定退になって自由をもてあまし

肩で風切ってもどうせ奴凧

功

会社では肩で風切る恐妻家

禅虞 小山 旭 樂 吟 安 人 泉 山 平 さわ恵 子

一浪へ平気な顔の親心

炭なんか古いですよという電化 世界一高い土地です兎小屋 家中が嫁に笑いをうつされる バイブルに涙と夢が詰めてある 歩に生れ飛車と金との夢を追い 夜学生仕事の匂い連れてくる 円高がすすめば寒くなるばかり 弟はやさしい笑顔置いて逝き 松飾りとれば月日が走り出し 初詣追いつ追われつ薬王寺 心にも無いお世辞など言えぬ口 ハンドルへ心通じる救急車 言が人生変えたアドバイス 佐川川柳会

過去帳の歴史が重い父の背 優勝の涙にきっと秘話がある 子に託す夢はいつでもバラの色 ぎこちない包丁の音妻の風邪 岸和田川柳会 植山

松風報 ふさえ

ランドセル親の期待を重く背な 豆撒けば此処までおいでと笑う鬼 出来栄えと別に安らぐ筆を持つ 薄っぺらい女の首に銀ギツネ 厳冬を喜ぶ人と堪える人 暇のない脚に感謝の日が温い 春めいた証拠長い陽陰の昨日今日 富志子 みのる 寿美子 さよ子 U

菊野報 武助報 須磨子 松 かず子 十面子 節 功 夫 花 風

枕だけ下げて飛び出す火事騒ぎ 赤ワイン少女を乙女にかえる色 指だけは私の苦労の味方です 耐えきれぬ苦労刻んだ母の指 喪服ぬぎ指の飾りもそっと捨て 見返りのない愛を積む母の指 切り札も手応えもない凡夫婦 手応えがあって素直に出る主張 ひと言の温い言葉に心解け もつれ糸母は波風立てず解く 地上げ屋へ早う出てこいハングマン 手応えが無くて妬けてる釣の糸 会う度に手応えどうかと打診する わだかまり話せば解けるもつれ糸 方向音痴の妻が切符握ってる 招待の切符はお金の要る話 切符切る音も今日から民営化 フィルハーモニー切符一年前に買い 無愛想な声して自販機切符出す 新人類珍人類になってくる 平凡な時間大事に積み重ね 迷路からやっと抜け出た春の雲 仲間から去る日ボス猿老いている 意地張って何時か仲間に放っとかれ 振り向けば舌出している仲間いた 主婦の座が笑顔たやさぬ温さです 主婦達の会話 一番からの寒さが身にこたえ 川柳ささやま ート女の業はまだ抜けず 一円生きてくる 田 愛論報 米朝報 まさの とみ子 ゆうや はる子 ひか平 金之助 ヒサ子 可 操 浪速子 初太郎 ダン吉 文法 千代子 白光子 希久志 武

したたかに生きて余裕のワイン酌む

爱

章

初舞台幕間も台詞稽古する 幕開けは御祝儀相場でせりの声

喜一郎

松

Ш

華燭の典親に任せた幕があく

肋 カクテルの甘さに女堕ちてゆ 言い寄った甘い言葉の裏は牙 燃えた日の若さも西に日は沈 人妻と燃えたい欲は持っている 若者の燃える瞳に嘘はない 禅寺の修業森下愛に燃える鞭 泡ふいた蟹ならきっとあわててる 重新婚さんの甘い声

柳宏子

海を壊し続け日本何処へ行く 春の窓淋しがりやが鳩と逢う お悔みの欄で名士と肩ならべ

蛍

光苗

しい抱擁に困っている子猫

江原とみお報

栄転の辞令で幕になるドラマ 甘い点たまに付けとく教え方 耐える心に燃えるもの < む

人生の幕引く迄は捨てぬ夢 減反に今年で幕となる田圃 しんじ

頂留子 治 大寒へもうパンジーは春の顔 大切な歯が一本抜けました 弁解はよそう絆の差でも負け 嫁入りの唄乗せて風花舞ってくる 冬眠の首をもたげる川の音 制服の裏から覗く人間味 二万日この道はまだまだつづく

年男心豊かに老いの意志 新年で若くなれたらお目出度い 世が良すぎ医者と薬屋大繁昌 床下の鬼が謀反をそそのかす

とびついた甘さからくりあった利子 森子報 富久一 文 岳 花 枝 骨抜きにされるか夢二の絵の女 よく出来た息子に難儀な親が居る アメリカのわらにも納豆菌が住む 駅員がハッピで送る初詣 寒い時逝った主人に小言言う 正論を孤独の椅子で吐き続け アホになる術を覚えてから気楽 義理立てはいらぬのに来る冬将軍

熱燗じゃなんぼ一気と言われても 蛸壺でないと芯から眠れな 町内で車無いのは私だけ 陰口を聞かぬふりして赤い服 り行きに備えてたたむ貯金帳 川柳塔唐津支部 久保

1

寒に咲く花にもらった心意気

日出子

峰

莊昭

伊庭

勇

花

どん底を助けてくれたのは一人 金利での暮しは夢のまた夢よ 金利など気にするほどの金はなし 貸した金返済聞いてる墓の中 よい金利つられた果てに元も子も 標的のひとつにされた菊人形 困っても見て見ぬふりのアスファル 利食いするつもりをわらう物価高 菊香る秋風頬を撫でて行く 気兼ねする母はポックリ寺が好き 伸び過ぎた寿命低利がおびやかす 慰謝料に金利をつけて払わされ

トシエ 山久

正敏報

とみお

雀た紫雄規 踊つ 子み映々仔 和政帆朗朗泉

94

春

旅行けばテレビ浪曲うなってる まま事のせりふは何時も親の真似 無駄口の中で本音が歩き出す 寄り添ってくれる妻あり試歩の杖 暖冬が季節のページめくり過ぎ 惜しくない齢でも迷う面の皮 無理強いをもみ手に変える面の皮 拾うのを迷う歩道の皮財布 二人だけ分るサインの退社ベル向うから覗かれていた窓を閉め 心の窓開いてぬくい風を知る 後から注ぐ視線に身を切らる 口喧嘩過ぎたか悔いが未だ残る 派手かしら鏡の中で歩いてみ 旅鞄上手に詰めて行っちまい 価値観の違い我が児と遠くなり その辺に 流行がす 仮初の愛の言葉を抱いて老 トンネルを抜けると白髪になっていた 如月や史話になりたる兵に告ぐ 駅弁が土地の歴史を乗せてくる 妹で中身を決める熨斗袋 静岡市川柳塔同好会 園新人類の芽が 句少し拾ってうまく出来 ンが似合う素顔の嫁と居る 春は静かに動き出す れ違う時出る火花 軽い財布は放っとかれ 芳仙報 僕川報 定 紀代志 金弧 アヤ子 久あ朴旭 IE 緑 於於 秀 子進 仙 子 乗 3 夢を追う絵筆とる身は旅の空 水温む少女の胸が厚くなる 六法が出ると会話が行詰る 一次会で理性の鎧ずり落ちる

年寄りの仏まがいの日向ぼこ 外人が使う正しい日本語 コマーシャルすぐに信じる単細胞 女客帰り支度のお手洗い 春の陽にゲートボールの弾む音 薫風にさつきの紫香匂う朝 八起き目は無垢な心で旅立とう、前月分 人を信じ風船花の使者となる 年金の暮しマル優用がない 誘われて行かぬつもりの足が向 職離れ肩書取れて好好爺 焼鳥の匂いに腹の虫が鳴 旅の宿笑いの渦へ無駄話 フルムーン二人寄り添う空の旅 留守番を頼んだ犬が付い)優に老いの頭は始動せず のの顔 ほどに動かぬ手足嘆いてる 川柳塔からつ佐志教室 て来る 0 < 義美報 三枝子 三枝子 喜久夫 三津子 フユ子 紀 まつる 貞 ŧ 代 JII つぬんね

曖昧な男せめない木の芽あえ寒がりを尻眼に芽吹く川柳 茶摘み唄いとおだやかに摘む新芽 芽の出ない連中ばかり飲み仲間 病が新芽の頃にうずきだす 八尾市民川柳会 悦郎報 覚然坊

> もう泣くな明日は必ず虹が出る 難攻不落妻のとりでは子が守る カンバスに何か足りない冬の虹 消えかかる虹へ孤独がつきまとう 虹消えぬうちに本音を打明けよう 老い先の短かい虹を崩すま 攻撃の手をゆるめない癌転移 歩の打てぬ筋を何度も攻められる 白旗をかかげにこにこ攻めてくる 攻める口先に読まれていた不覚 包丁で攻める技術のフグ料理 上品な攻め方をしてくる朝の珈琲 攻めあぐむ奥底知れぬ舌があり もう一度咲きたい欲はもって 返り咲く職場覚えていた鸚鵡 咲く程に蘭の香りに父の笑み 遺伝子をいじると黒い花が咲く 花ごよみバイオが咲かす新品 あでやかに咲いてはかない月下美人 0 いる 欣 鯛牙子 シマ子 アキラ 曲ん手 和砂輝系 Ш

雲成 男

ぽっくり寺へ参るあこがれみな一つ あこがれた廻転椅子は錆びていた あこがれた駅から胸が満ちてくる あこがれをあこがれのまま持つゆかし あこがれた峠のわが家にあるくさり 虹消えて理性をすこし整える 七転びこころの虹はまだ捨てず いの法被でみこしゆく祭り 明朗報 夕信

甘悦しんじ平郎じ しづ子 とみを 頂留子 泰 花治

ち治

先進国日本歯止めを忘れずに 進む世に気ままが一人過疎に住む マイホーム建って嬉しい祝い唄サイコロに祈りをかけてコマ進め 旅からの便り新婚翔んでいる 直進の亥年生れで突走る 進歩した医学が内臓取り替える お神酒受け一年分の幸祈る 王砂利を進みぬかずく初詣 合理化が進んで子らの職せまし 祝い酒酌ぐ娘も明日は嫁にいく 背なの子もお神酒いただく初参り あこがれの思いをつづるペン走る 損な役笑って母は引受ける 損をした胸を埋めるコップ酒 この御縁心がわりのないように 返事には家内一同無事と書き 丸裸損でなかった名を残す 元気かと嬉しい便り娘のぬくみ 来年の見通しいいよとガラス拭く 損すればあわてず次の策を練る 横書きの便りに困る老眼鏡 便り待つ単身赴任の寒い夜 孫からの便り可愛い絵がいっぱい 損得で子育てできぬ親心 心変りか鉄砲玉のような人 綱引きの揃うかけ声にぎる汗 便り待ってる祖母がいる ででも爺さんはお留守番

ふ緑君明芳正久林 み水子朗子的 (一十 カ福竹義 ツ子子乃良 ゆき子 ヤス子 昌梅章 吉 野 粛

> うたた寝を起せば枕に夢のあと 逢える日の空がきれいなコンパクト 沈黙の父をいたわる湯の温み あと味がすっきりしない日のきしみ 春はそこセーター編む手せかされる H 秋祭りお神酒を受けて廻し吞 天皇の平癒祈 めくりがはがれて進む世の進歩

る代

思い出

ベンチを照らす青

い月

中

天才の中味努力が詰まってる

童

公園のベンチ斜めに月が射す 逢えぬ日のベンチがかたい風の

五右衛門も同情してる真由美攻め 和延

叮紅報

川柳塔まつえ

八重子 ふさえ 子朗

> 天才もたまにひそかな大欠伸 天才に冗談話は通じない 天才の親は目だたぬ俗な人

帰巣性は天才的な千鳥足 天才といわれた人がぼけはじめ 天才は隔世遺伝かと聞かれ 算術の初歩を天才間違える

天才が突然女に狂いだし 天才がまたもうけてる株の糸

登美也 天才が名器奏でる音楽会 天才のつむじは少しずれて

びっくり箱抱いた夫婦で長持ちし 救急車近所びっくりさせて着き 荷につめたびっくり箱はおとなしく

17

アルバムを出して自慢の証拠見せ 孫自慢しながら嫁をこきおろす 御自慢の料理をまずいとは言えず びっくりをする程何も無いくらし

たつみ

故郷の自慢に湖の大茜 老人の子供自慢に座も白け 京都塔の会

松川

人生のベンチ苦楽の夫婦愛 蚊にさされながらもベンチ初デート 人生のドラマ聞いてるベンチです 花束を星の子が抱く海の底 花束のかげで別れの顔つくる 花束を届けて呉れた遠い人 花束へ妬心を秘めるときもある 花束がひと役かった開店日 生と死の花束ちゃんと心得る 花束を涙で受けるカムバック 事故現場花束投げて凍る海 郷愁の花束れんげ草を摘む 花束にしあわせの一句添えてあり 花束で泣いた娘も二児の母 花束を抱いて出発点に立

一合がうまいベンチにする桜

友の形見手ざわりぬくい黄八丈 答案紙てきぱき書いてきれいすぎ 唐辛子適当に効き気に入られ

みつこ

島に建つ家で絆があたたかい 儲かった音で店舗が空へ伸び 地鎮祭どうやら団地建つらしい

進学をさせて肩の荷重くなり

花便りベンチも明るく塗り替える 尾を引いて暮れるベンチに人もなく 散歩道おんなじ顔に会うベンチ 公園のベンチのどかな春を告げ 傷口をいやすベンチが夕焼ける

杜的報 美智子 諷云児 坊 女

日出子 鶴風寿美 静清鳳貢蒼桂君友与満翠代 根 江志人範流子江子一江星男 n 舞静清鳳貢蒼桂 長 淡(歩

いる

手間がいる奴だと親切心を出す手間かけた苦労漬物石が知る手間やけど餅はやっぱり家で搗 春の風土の鼓動に手をかせる 足あとを残した土に浄土する 肩書きを外すと故郷の土が呼ぶ ベランダの上でトマトもナスもうれ 鉢植の土が悲しい顔をする 手間暇をかけて作った棚が落ち 手間はぶく術は知らない職かたぎ 比翼塚など面映ゆいこと思うなり 再建の天守に賭ける町おこし 誘われてブラブラ歩く春の土 遠慮せぬ友へ強弱合わす暖房機 梅咲いて手紙書きたくなってくる 東西南北大工の家相で建てた家 裏向けて手間の値打ちをのぞきみる ニュータウン山の上まで登りつめ またビルが建ってる風さんどこ通ろ 人間国宝手間を惜しまぬ土をねる 精魂を注いだ果ての痴呆症 万感の想いを注ぐ女がいる 水注いでくれて居心地よい 仏像へ心血注ぐ窓明り 浮世絵の乱れへ熱い目が注ぐ 黒海へ注ぐスラブの深い念愛情を注ぐと語る人形の瞳 まなざしを感じ点前の手が震え 度だけ笑って今日が暮れていく 川柳塔きゃらぼく わりと皮肉も入れて注ぐお 政岡日枝子報 酒 松芳 三年ただし 日枝子 はつ絵 陽露子 花代子 白渓子 白飛 美正水紫佳杜 武 庫場 坊客香秋的芽 雲行は知ってる母の撥さばき てのひらに受ける涙よ愛日よ ことことと亡母の味しむおとしぶた 湯たんぽの様な女でお人好し 夜鳥にスリルがせまる朝がくるシナリオにない一言が効いている知らぬ間に小さな親切通りすぎ オート 友情の真ん中にある四面楚歌 ほおかむり相手の顔を立ててやる 大寒を尻目に暖冬梅便り コーヒーで語れる雪の春炬燵 小さなスリルドレスアップで出掛よう あこがれの虹が近づく足もつれ 日本の小銭が地軸揺がせる 捨てられた枯葉ページにはさまれる 温室の花でスリルが欲しくなり 嫁姑親切ごっこをしています 今の世は弟子が師匠にひまを出し 洗濯物春よ春よとひるがえり 土となら話が通う泥ぼとけ ポケットに土が乾いてゆく呪縛 土になる心構えで娘は嫁ぐ この土で大物育ててみせまする 安かれと土に返した形見草 百姓に嫁げと土からささやかれ この土の愛を裏切る人間だ 大原川柳社 バイスリルに乗って闇をゆく オを書き上げるまでは生きる かあゆ川柳会 の土になりたい 松本はるみ報 妻子報 みづえ はるみ 白清悦鈴民歳 智恵子 ヒデ子 世 かつ子 7 い子

玉辰宫 子惠江泉惠子 7 三月の雛はとっても冒

暖冬へ 単細胞で悪かったわねと直ぐすねる 人間の仮面は棺の中で脱ぐ 風化する思い出時に呼びよせる 暖冬にゲートの声を弾ませて 頂上を目指す男の太い指 善人の仮面笑ってばかり居る 木枯しの吹く夜故郷の老母 晴天へ再出発の深呼吸 佗び住い老床抜ける隙間風 言い過ぎて叱る言葉も途中止め 病人に見舞いの客が励まされ 同窓会互いの目と歯笑い合い さりげない言葉が刺した風の向き むっつりとふところ寒い冬の月 わだかまり一気に吐き出す吟詠会 朝ぼらけ写経の墨の香が匂う 寒波最後の意地を見せ 添うて生き

似

捨てられたバラの造花に棘を見た 愛涸れて造花の彩があせてくる 三月四日雛を静かに眠らせる 瀬古の足日本中の眼を集め 日曜日どこかでマラソンやっている 別れから理想の像を組み立てる 流し雛水の情に逆らわぬ イメージの明るい方へ傘を干 ペン先に愛のイメージ拡がりぬ ユトリロのイメージで選る春の服 ールしてマラソン女の顔になる 西山 緑 耕朝直 IF.

泉良江

川柳わかやま

あすなろ 智登志代 雀踊子 萬 前 計 前 睦 こふゆ ひでの 寿恵子 みさえ 巴喜美子 たけよ子江 男 良 子虎子秋香

私のイメージきっと悪女だろ 声のイメージ大切にしてまだ逢わぬ 懸命に走るマラソン寝て見てる 王朝のロマンが匂う雛の私語 鮮烈なイメージあれは幻か イメージの観音さまが夜叉となり 雛かざりまだ保育器で手をひろげ 艶やかな蝶にもあった苦いとき はなやかな造花にほしい玉の露 雛段の欠伸へ税金吸い込まれ 立ったまま眠ってござる戦中派 吹雪く夜の白を信じて眠らんか 瀬古選手オリンピックに出てほし 完走へ私のペース崩さない 不況来て暮らしのイメージ変える農 流し雛明日は珊瑚の上で寝る 庭の隅孤独な花に蝶の客 硝子戸で飛べない蝶よ僕に似て イメージは何時も女を横取られ イメージを変えて女は出直す気 コミカルにイメージ変える春帽子 イメージに惚れて打ってる釘の数 ぐっすりと眠っている子よく育ち 白湯と一緒に女は覚悟吞みこんだ 湯けむりでみんな美人に見えてくる 湯煙りに恋の種火が揺れ動く イメージは海へひろがる糸電話 跡へまだ見ぬ顔をダブらせる 酒で気焰あげてる雛の客 川柳塔鹿野みか月川柳会 紀美女 紀久子 日枝子 好 政瑞石信 守

みどり児が眠りエンゼル舞いきたる

もぐらの仮眠冬将軍がまだ来ない 鯉のぼり主役は子守唄が好き 睡眠がずれて一日狂う独楽 手の鳴る方へ眠気ざましについてゆ 菩提樹のてっぺんゆらぎ父眠る 冬眠を決めて雑音気にしない 腹満ちて眠ると虎も牙見せぬ 春暁の眠りへ誘う海のなぎ 子が眠るもしや天下を摑むかも 良心が仮眠ワイロをたぐりこみ 熊も兎もみんな抱えて山眠る 猫やなぎまだまだ眠いふきのとう 母の膝眠りぐすりが置いてある たよりない男居眠りばかりして 眠たげな目をした夢二の彼女たち おっと居眠り運転席にいて候 花柄の枕で眠る七時間

美っ千

かつ乃

平凡に生きて離農は考えぬ このひとはきっといい人よく眠る 刃こぼれを二人の愛で研ぎ戻す Uターン故郷の水も甘くない 喋るほどこじれ戻れば道凍る 日本の良さしみじみと羽田着 がむしゃらに生きて気がつく白い やがて椿は深い眠りを持つことに 蛸壺でないと芯から眠れない 魂が眠ると愛の水涸れる 髪

きみ子

仲よしが家へも寄ってと言うてくれ

みつこ

寒さと不精の正比例する箒の目

とみお

両の掌を合わすと眠くなってきた 眠れない夜は悲しいほど長い 眠る街おまわりさんは月を見る

子司

みぞれ降るすごい速さだマッハー 傘忘れみぞれが降って痛たたた 年とって白髪生えたら染めておく 年明けて誰かが年を取ったんだ 借金は忘年会でわすれたよ ージュニアの部 川柳化粧櫓 中2孝 中1 中1 中2 中1

範臣宏

欲張りで壺から痛い手が抜けぬ 根っからの商人小銭大事がり 昨日見た夢ふるさとはお正月 放たれてさて風船が迷ってる 恥多き老いよお先にさようなら 義理チョコもここまで赤い線を引く 戦陣訓知らぬ軍歌が街にほえ 石橋を叩くと決断迫られる 風邪引いたらしいと税務署から帰り ていねいな言葉で嘘を包み込む 輝悲礎大白越

石花菜

ふ和

銀婚も金婚もない靴を履 アルプスの雪は心か薄く見え 子の躾そしらぬ顔で老いの座よ 風邪の神居心地よくて居座られ 老いの待つ春をせせらぎそっと呼ぶ 寸だけ付けた紅です古稀だから 人っ子同士の恋は親を無視 いずも川柳会 サワ子

吉岡きみえ報 みね子

束の間の幸福はすぐに走り去る

法螺貝の隅に眠っていたほとけ 失意激しく蝶はさなぎに戻りたい

はるお

由多香

けんじ

むり薬が効かないうちに木をゆする

- 98

男の戦さ広がる度に風は哭く 躓いてそこから歩幅広くする 雨だれに海の広さはわからない 視野広い祖父は近所の生き字引き 子等巣立ち夫婦に広い兎小屋 雑魚一つ逃さぬ税の網を張る 兎小屋からでも見える広い空 人許す心の広さ鳩が舞う 公園の広さへ風が追いかける 広い海子供気づかう渡り鳥 能面の広い額にある孤独 転ぶたび男の視野は広くなる 母の日に広い額の母を描く 口コミで広い世間をとぶ噂 広い土地持って心をせまく住み 蓮の葉の広さヘケロケロ朝の唄 子を抱いて夕暮れの街火急の人 幾千万ロマンと走った連絡船 終バスへころげるように酔払 譲渡税ついて行きたい程取られ 竹トンボ空の広さに気がつかず 広い視野持たぬ蛙で妥協癖 ママの追う視野の広さで子は遊ぶ 草に寝て広がる空と語り合う 小走りに妻が帰った良い知らせ 完走の覇者におしまぬ旗を振る 病窓の恩師ショックの灯に走る つっ走る若さで見てる世の流れ 走り抜く力三つ子にうえておく 良久律 多賀子 芙 勝 佐子 青重美桜為寿 湖昭磯水郎美 きよし まこと 六之介 きみえ 昭篤房和 脱税を福祉袋に入れてほし サラダ今日ドレッシングに助けられ 税金に無縁小さな灯を点す タレントは有名税に気を使い 低所得マルサに縁の無い暮らし 申告税出来る身分がうらやまし 帳簿見る税吏のまなこ鷹に似て 酒呑みも少しは国の為になる 税金もなく国宝を磨く古寺 チョッピリと還付儲けた気になれる 税金とくらしのための靴をはく 税地獄マルサの女の目が光る 爪に灯をともした金も課税され 教科書のように税金払ってます

就職へ望郷の空雲走る ゴキブリの方がびっくりした悲鳴 底辺の悲鳴は聞こえない政治 燃えつきて悲鳴をあげぬ父の詩 税務署の眼は帳簿の裏も読む お煮〆とサラダ妥協し平和です サラダなら少し頂く病みあがり 冬眠にサラダ記念という地震 サラダより糠味噌漬けの深い味 サラダ便乗カンチューハイがよく売れる 寝たきりへ愛のサラダが届けられ 嫁三人みんなサラダの腕自慢 女房を褒めると今日もまたサラダ お手料理問われてサラダ玉子焼 血圧が下がると聞いてまたサラダ 大袈裟な悲鳴は仲のよい夫婦 (大 久 智恵子 代仕男 紋次郎 孝太郎 喜栄子 信幸 步

迪秀 (松)文 弁次郎 のり子 マス子 寿 子 先輩の顔をつぶして見計らう 雑草にとても居心地よい庭で 居心地は矢張り大の字俺が部屋 居心地は別だす肚をすえてます ちぎり絵に居心地のよい村がある 見計らう事の上手な母が居て 委せとくと言われて困る見計らい 仲人の機転でそっと座をはずす 初産へ母いそいそとみつくろう 少うしは浮かせるように見計らい 詩人の妻はいつか心を読む距離 北の海誰に悲鳴を聞けよとて いいかげんに見計らってと言う電話 五分五分と見て仲裁を割って入り 愛めばえ春の言葉を見計らう 血で悲鳴あげて看護婦まだ卵

忙しい日はいそがしい絵を描いて 居心地をよくする嫂へみやげ張る 落ち着ける部屋に一升瓶がある 居心地の良い場所猫は知っている 居心地のよさよ実家の古畳 理解した後から女愚痴が出る 理解ある人と言われてああしんど 理解ある母で向こう向いている 夫婦箸剝げて理解ができはじめ 座布団が客の居心地知りつくし 居心地が良いと二泊もして帰る 本能で母は理解をしてくれる あたまでは理解してても出るは愚痴 永遠に理解できない雄と雌 柳宏子 トミ子 頂留子 覚然坊 雀踊子 人風珠風

しんじ 凡九郎 信治 ハル子 シ曲山勝柳久恒文作 マん 子手久美伸子明秋郎 度 美造

居心地のよい居酒屋で酔いつぶれ

この坂を越さねば虹が見られない もういいか笑顔が底をつくカメラ 年度末また税金が道を掘る 片言が言えて今年の初節句 坂道で大正昭和の差が開き ネオン街はずれてうまい店に会い 納税の機械ですがな幸之助 頼りにもなりますハメもはずします 臆病で最初の一歩が踏み出せぬ 心配の峠を越した三分粥 ひめゆりの悲劇哀話も通りこす 春を呼ぶなにわの川の流しびな 浪人も合格者にも同じ春 美しい嘘で固めた涙見せ 日めくりの不満昭和の文字がない 告白の裏でチラチラする打算 落葉焚きはずれた籤の夢も焚く 敵ひとりつくれぬ夫で骨がない 余生とはかかるものかと日向ぼこ 太陽がそっと雲から覗く露地 ひと区切りついた自営の遅い昼 忙しいから毎日が満ち足りる 嫁が居る忙しくするのはよそう 火事怖い寝煙草だけは遠慮する カルガリーかくも激しき雪女 素手で織る紬に女のうたがある 若夫婦口笛合図に出る風呂屋 - ポロと船場ことばのひとが逝く 川柳は**びきの** 塩満 い花屋に春をせかされる 隅谷 シメ子 伴淑 子子 与 呂志 敏妙冬滋藤 報 末志白義 ケイ子 蛙重 美代子 キミ子 悦子 たけし 吐来 みつる 隆昭泰敦 昇 子子 屯 税金が高いたかいと毛皮着る 告白があの子の人生狂わせる お人好し素手で摑んだ栗のいが 警察と税務署と毛虫みんないや 手を合わす瞼をよぎる影いくつ 晩酌の二合が済めば吉日だ 川の真ン中に鬼の座った石がある これからは背中を向けてねぬように 老妻とのくらし名付けて黄金期 どぶ川を好んで潜む魚もいる 急ぐ方お先にどうぞ三途の川 これからが人生の峠茨の道 これからは夫に拍手して暮らす 暮れ際の口から本音滑り出し 吉日になぜか鳥は鳴きたがり 大陸に川国境の線を引き 血税が軍拡となるおそろしさ 地に帰る枯葉の想い訃報くる 告白をすれば背中を風が押す お粗末な花壇も春を待っている ミニをはく若さをねたむぼたん雪 告白して自由な風の波にのる 素手で持つ名料理人の熱い鍋 出世道はずれて家は平和 ふる里の地酒並べて迎えられ 筋の川輝いて銀の帯 の雨男腕くむ物思い 一番旅行案内吹き飛ばす の中で沖縄生きている 倉吉川柳会 渡辺 石 **善**句報 葉順義 寿 貞 美子 美 絢 忠 恵 子 子 宏 子 さつき 寿満湖 希代司 はるお とめ子 清 美津子 胡村 満洲子 トミ子 坐康 生 アルバムの上等兵にもっ会えぬ 玩具づかれの子が箸とればすぐ眠る ロボットがこれから時代乗っとるぞ戦いはこれからですと土俵掃く アルバムをよく整理して嫁に行 迷い箸するほど菜なし倦怠期 割箸が真直ぐ割れぬ日のあせり 生まれ来る先も逝く先も総て金 金儲け甘くはないが生きる糧 古稀近し金も人情も欲しい頃 年の暮れ落葉が金に見えて来た 代議士といえども金には目がくらみ 年金がちょっと気になる長寿国 来てみれば冥土も同じ金の音 争いの因をさぐればどれも金 金よりも心の通う友が欲し 金あれば年よりの座も暖かし 渡し銭六文持って消えて行く 先の世は六文あれば足りまする もう金は要らぬとデカイ見栄を言う 川底に義眼のような石がある 税務署の暦に吉日などはない 日暮れのラッシュねずみとりをする 選びに選んだ吉日に雨が降る 大安吉日猫の子を捨てにゆく 勝ち負けは水に流せと日が暮 マル優を論ずる程の金持たず んぼうの老人金に助けられ 聴障川柳 の川を流れて来た花 中もくせい川柳会 0 田中 n る

みつる

江

豊作報

健太郎

女晄

作

完 とみお

螢

步

句

かつみ男

ゆり

正坊報

鉄 行 八 進 火 江 子 一

しげお

作一郎

とく子

若いからできたと今さら思い出し 雑音の中でも息の合う夫婦 吐く息を受けて新聞ありがとう 自分史にロマンを添える気の若さ はく息も荒い勝利のゴールイン 根性が登龍門をこじあける 若い芽を育てる苦言持っている グルメより茶粥の方がすすむ食 灰色もとぼけて居れば白になる なり振りかまわず商売気を出すJR 景色では飯が食えない島ばなれ 孤独癖鷺は文学好きなのか 古書市へ出かけて行った春の風邪 里がえり夫断食すると言う 嫁姑どこかでボタンかけ違い 野仏に菜の花咲いて春彼岸 あきらめた返事が郵便受にある 人並に洗濯うれしい回復期 球拾い補欠の席に入れてくれ 言い勝ってみたとてしょうがない夫婦 沈丁花春の寒さによく似合う 三島うど吸物椀に春匂う 退院日笑顔の妻が冷やかされ うれしくて姉様人形折っている 嬉しそにするから嘘と思われる うれしそうな媚でトマトは皿にのる アルバムに明治は笑う顔 亡父のアルバムから聞えてくるのは アルバムの裸は娘がむしり取る 嫁ぐ日もきまりアルバム整理 がない する 山下みつる報 軍歌 登志実 もとみ 本蔭棒 与呂志 福 寿美子 きく子 登代子 武庫坊 曲市正ん手雄坊 重 萬 蕗 よし子 降 的 児

制服にスピード落すドライバ民営へ先ず制服を変えてみる

制服にしばられ三十年を過ぎ

自分だけ生きる気の核シェルター

制服の古を着て行く野良仕事 制服に汗にじませて定年す 制服に笑顔も一緒につけて着る 制服の肩に自覚と言う重み 制服が人の個性を包み込む 洋凧に仲間はずれか龍の凧 先行きの不安除くか昇り龍 内幕を知るのが好きな聞き上手 内幕はあんまりしゃべらん方がよ 内幕を暴く正義のペン尖る 大物は尻尾を切って生き廷びる 真似ばかりしてると本気見失う 車椅子生きる希望の汗に耐

> たずね視野から消えた留学生 腰が女の視野の中にある

L 真佐志 泉 三千雄 虎酔吟 介

あ す す か 祥 心 夫 舟 也 吉 物真似が上手で自由になれぬ鳥 良寛の真似して鬼になっている 兄さんを真似た訳ではない二浪 三流館泣かす子役が一人いる 重吉に似てる占い師の昼寝 三度目の女房も逃げた占い師

雄 平穏な暮らしを乱す置きみやげ とことんと落ちて女は強くなり とりとめのない話に心ひかれる日 猿真似でどうにか世間だけわたり 騒音へ手真似も入れて話好き 人真似がうまくてボスになった猿 のよい男が事故の話する

元手

車をとめてふきのとう摘んでいる 末筆に別れた人へ少し触れ 遠き人いつも夕日の中にいる 年金の飾りにしてはルー 親と子のキャッチボールがままならぬ 婦人警官の無言がいちばん恐ろし 人妻とひとことみこと寒い町 いわし雲に人は短き死を残す ス停で昔ばなしが食い違い 等地身売りを知らず白梅開く ープタイ Vi

U

めゆりの塔に反戦の花朱し

火の御恩水の恵みを知って生き

尼崎いくしま句会

出田

佳秋報

みつる

敏

美智子

息切れの階段で聞く発車ベル 脇役が息を合せて死んでやり ネオン咲く海へ一夜の老い脱皮 ラスベガス忘れた頃にころげ落ち

金

制服のスチュワーデスに一目惚れ 制服は企業の顔のハッピなり 制服に怒りを隠す宮仕え

正義

みちたりて生きる苦労を子はしらず

比呂ボル

鉄

司

孫と吹く大正生まれのハーモニカ

笛を吹きたくなってくるゆとり

はつ絵 い年修伊 を を が 大水郎 声夢

真似て書くモネの首から冬になる みようみまねやっと旧家の嫁になる 三流ですごいボーナス出している 追い越せぬ木馬の視野は背ばかり 善も悪もほとけの視野に包まれる 妻の視野外れたところで飲んでいる 松芳 河芳 水静歌眉曲柳紫 白渓子 みち子 かね子 子的 郎女蔵郎

いだ父の荷物が重すぎる

云児

さようなら孤児に母国が遠くなる 震源地ニュース遠いと伝えてる 遠い道歩き通して米寿です 降下する白血球のつぶやきよ 家を出る息子によりそう女を見る イハイと返事ばかりで重い腰 寅之助か た清向

波高き越前海岸別れ雪 孫無心数珠を玩具に通夜の席 嫁ぐ娘のタンスにそっと数珠二つ 地下鉄で和解相手もいける口 最終の地下鉄虎が多く乗り

十歌 敏 夢之助

水晶の数珠は冷たくいましめる

地下鉄の元祖モグラは語らない

叱られに行くには遠い亡母の森

定佳弘

秋治

生み月の娘の住む街が遠ざかる

地下鉄でボタン一つをもぎとられ

球根が土を揺さぶる音がする 雨になる葬儀見ている小さい大 回り道したが幸運拾て来る 風花が舞って葬儀の列動く 達筆が矢鱈色紙を呉れたがり 早朝の空気のうまさ消す車 サークル檸檬

片岡智恵子報 三四子

歩き方ときどき変える遠い道 同好の友が増えたり梅句会

遠い旅何時も梅干つれて行く

本道欲捨ててから見えてくる

智恵子

梅干がどっかと座る粥の中

道標倒れて迷う右左

梅の径また突き当り突当り 絹の道奈良に文化の華開 幻の梅林きっと真盛り この道も神の敷きたる レー ル かな

えんゆうかいおどりやげきでいそがしい おとうさんふろから上がってゆが少し おかあさんのおかずはおいしいね おにいちゃんファミコンうまいんだ 川柳たけはら 幼ち

たこ上げのひごがおれたら上がらない お母さんいないとごはんどうなるの 小三裕次郎

計報聞く順番でないいのち四十歳なり亡父のいくさを想うている こわいなあひとりぼっちの夜の道 旗の色かえぬ男がすみにいる はばたいて欲しや身近にいて欲しや ラジオドラマ友達どうしで聞いてるよ サッカーの試合で足が痛くなる 雪降ったお山でやっと元気づき 寒い寒い早く春になれ 春よこいきれいな花を思い出す 高校をどこにしようかまだ迷い おとうちゃん灰皿いっぱいタバコ吸う 小四晴 中 中一純 小五由 小四視 小四晶 小四慶 小四聡 一亜貴子 政静蘭 幸居

よしつぐ

武庫坊

いわを美

裁ち鋏私の生命あるかぎり 愛憎のからみの中で夜が白み 夜の雨娘の眠る墓思っている シガラキの狸が今も見守りぬ 生かされている尊さよ琴の音 目覚めても又潜りこむ冬の朝 占いに迷うてみたい昨日今日 ハンサムに基準はないぞひき蛙

> 今日子 風 友情の以心伝心便り来る

> > ス

勲 -年枝

八重美

雅

床飾り昇竜の目が光る 妻のほか拭かない背中を拭くナ 山茶花の散りてますます赤き彩

母と子の会話が恋し寒の月 またひとつ授かる歳が重すぎる 雑音も健康なりゃこそ耐えられる 画いたような二十歳の晴姿

背信の予感へ雪の降りはじめ 気くばりがすぎて火の粉を浴びる羽目 薄給の息子出世伝を読む 吊り革の揺れに未練がぶらさがり 蟻のごとく生命をもやし尽くさんか ナス今夜は亡父母の傍でねる

クリスチャンの歴史はいつも涙色 和紙の倉庫で筆のほほえみ やじろべえ羽目をはずしてみたい日も 子のジャンプ見守るだけで満ちてくる 暖冬へ責めてはならぬ狂い咲き 制限を守る車について行く 芹を摘む春の香りが心地よし 打ち寄せて波は孤独を語らない 鈍感なところもあって楽に生き お喋りに飽きてしまった市場籠

太房淑

老いて知るいばらの道のあり 老人の日記にほしい明日の彩 あの日から年齢を言わない口 寄せ書きへ先輩達の鋭い目 スーパーで買う七草のパック詰め がたさ にする

ヤスエ

君

シゲヨ 節

-102

令康

争いもまあまあまあの齢となり

5 月各地句会案内

	日 / 時 及 び 題	会場と投句先
堺川柳会	1日(日) 午後1時より 箒・拇印・坊ちゃん・棒	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
尼 崎いくしま	6日(金) 午後1時半より 若い・流石(さすが)・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
川 柳 わかやま	8日(日) 午後1時より 他人・彩る・皮肉	和歌山県民文化会館 4F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3 枚
西宮北口	9日(月)午後1時より スリッパ・裏話・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘 5 - 25 - 17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4 枚
八尾市民 川 柳 会	10日(火) 夕 6 時より 運動・雨・勝手・過ぎる	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川柳塔まつえ	14日(土) 午後1時半より 葉・地球・時々	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 ねやがわ	15日(日) 午後1時より 高鷲亜鈍傘寿記念川柳大会	寝屋川市民会館 会費 3,000円 詳細は83頁参照
もくせい 川 柳 会	16日(月) 午後1時より 兄・コピー・包丁・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南大阪川柳会	19日(木) 夕6時より 獲物・見識・成績・丁寧	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
高槻川柳 サークル 卯 の 花	19日(木) 午後1時より サラダ・履歴・喧嘩・自由吟	高槻市民会館302号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児 句会費500円 投句料200円(60円切手3枚と20円切手1枚) 各題2句
南海電鉄川 柳 部	19日(木) 夕 6 時より おすすめ・アイロン・寄席	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) (川柳部) 不動産管理部管理課
富柳会	19日(木) 午後1時より 雀・すね嚙り・素顔	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
駒つなぎ 川 柳 会	23日(月) 夕6時より 許す・余白・不安・発展	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
川柳東大阪	28日(土) 夕 6 時より 包む・痛い・パン・帽子	東大阪市社会教育センター2階近鉄布施駅北へ5分長堂小学校 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費500円 投句料60円切手3枚

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円 (郵券可)、各題3句以内 原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です) 〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

●募

5句)

松本

江

原

集・

課題吟 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。 ★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。 写 真 時 末 灯

を限らず。

茴 水 川 香の 染 柳 煙 七月号発 花 帖 抄 塔 3 3 10 10 句 句 句·女性 句 橘 表 黒 西 5月15 八 高 JII 尾 木 董 H

締

切

とみお 風 香 栞 選 選 選 選 選 選 選 課題吟 愛 茴 水 JII

T

★愛染帖・茴香の花・ 5句) 香 染 煙 柳 の花 玩 泳 帖 抄 塔 月 1号 貝 (3句·女性 (3句 10 10 3 具 句 句 発 表 橘 黒 西 課題吟は同人・誌友 6月 八 春 1 高 尾 城 木 織 島 15 武庫 H 文 蘭 千 締 風 香 栞 切 子 坊

5月の常任理事会は2日(月)

選

* 定

分 価

百

円

料50

年分

六 Ξ 五

百 百

送 送

共

料共 料

五四

一 日発行

月

〒545

選 選 選 選 選

> 昭和六十二 大阪 印 発編 刷行集 所人兼 年 年

> > 藤 西

原

童

心

社 巖

尾

発行所 振替口座大阪8—三三三六八番 市阿倍野区三明町二-1〇-ウエムラ第2ビル202号室 電話 Ш

本社5月句会

席 題

j

重 添

野 辻 榎 西

村

숲

費

= 五百円

題

当日発表

題

畑

おはなし 紐

メンズファッションセンター7 東区内本町一一一 地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角 電06.941.1 [112] 萬

918

会 日

時

五

月

t

日

 \pm

午後六時

各題三句以内厳守 太茂津 吐 渓 萬 7 選 選 選 的

白

本 出

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。 各葉毎に裏面に必ず氏名明記。 投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

> Ш 柳 塔 社

モデル 相 談 6月の兼題 狂 う 魂

6月の本社句会は7日(火)

₹ 593

内 天 JII 笑 方

会

河

12

第

夜 市 Ш 柳 募 集

男と女 堺市堀· 3句・ 上緑町一 河 内 5月末日 天 九 笑

選

腿

及使句集」 と言われる と言われる ないった。

作塚社会 則は、 何た的 75 たり、 病 大得 る。祖母 くも私の、

· 11: 母齡

.

がた。

者の気宇の上 だが、明治 だが、明治 の方とより 八きさに 小鯉四海 配門の がんだの 海側の がんだの 海側の がんだの がんだの がんだの がんが、 がっが、 がんが、 がんが、 がんが、 がんが、 がんが、 がんが、 がんが、 がんが、 がんが、 がっが、 がんが、 がっが、 がんが、 がっが、 がしが、 到る所導名 呑れ れめ 「川畑 気の合氏

ああ我が魔原の雲は太関 行の妖魔時を見れて、五月紀 もざはひ悉くし おざはひ悉くし あ我が厳守を対し、はひ悉くい のの神ぎて 大衆と女子供にも理仏教を立め、 ではなくか ではなくか ではなくか ではなくか える点がタ そして一円 る句で無い る句で無い を無くてはな 大子供にも知 (きである。)(は、大我のに徹して個をな は個人の創作にも理解された、「川柳ははならない。ればならない。ればならない。ればないであり上の創作を理解された。 で生また の▼記語がる性「ア 理雑しな、。向ヴー 由誌たの四頼雑ィー **▼** 移

醜ぬ依れ太

W 講真 大 * 刊部薫 ▼思生间 じたまで生 ので、このまま ので、このまま ので、このまま

おり変わりである。 移り変わりである。 移り変わりである。 移り変わりである。 移り変わりである。

こ説 コナ にするいどとだはらせ近二に合づ激がいり再何受き口のこ。 うういろうちた "」が連続しまります。 とううちた "」が連続しまります。

同じ

雑

パには、ない間、ち う入海 とけ軽にこ と言えるいなとんで 五校"

しょう。 (開しいもの)とは、 (関い出した)などのアメリカとのアメリカ 父た、 前側 健康とケム 「食卓は をご紹介 をご紹介

WZ An

杠のスローガンは"Irへきな航空会社で、I Every Five Minu

と何を生む の所の背景 の所の背景

由誌たの四頼雑 まで不とれがイ

にないた

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って…… 夜を通り過ぎたら また陽がのぼっていた 男のロマンと フォーマルと

OSK JEFF.

株式会社 大 工 人 丁

〒540 大阪市東区南新町 1 ─ 13 ☎ 06(941) 8 0 1 5

5つの個性・5つの色味!!

アイスキャンテー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんは残機原本店 なんは高原屋百貨店 栄北高原屋百貨店 京都高島屋百貨店 総种屋負店 セ坂屋百貨店 センラ百貨店

都高級接百貨店 アペノ近鉄百貨店 神百貨店 上本明近鉄百貨店 坂原百貨店 東大阪近鉄百貨店 できる鉄百貨店 奈良近鉄百貨店 をモール店 京都直鉄百貨店

サンストア中之島店 なんば新川店 サンストア海原像店 関のまち店 アペノ近鉄百貨店 ドーチカ店 上本町近鉄百貨店 南海賀安駅店 東大阪近鉄百貨店 福田大丸百貨店 南田大丸百貨店 機田大丸百貨店 乗り面が計画なに 機里は



大阪なんば

TEL 641-0551